

十二個内外を加へ、一冊五錢の定價を附して、一月早々名乗を揚げ、小波閣、櫻桃編、若しくは小舟編とし、毎月二回發行と決したのである。

本來ならば、此の種のものゝ外装には、最も衆目を牽き易き華麗なる石版多色刷を用ふべき筈なるも、本叢書出版の動機が、廢物利用といふ姑息なる觀點より出發せることゝて、出來得る限り原價の節約を圖るの要あり、力めて失費を少くして、安價に供給することを主眼とし、隨つてこれが表紙は、高價の石版に依らず、且畫家も内部の若手を選び、榮光社印刷の、特殊日本木版を採用するなど、すべて消極的手段に歸したものである。

元來此の特殊木版印刷術は、夙に大阪出版の赤本類に應用せられ、而も可なりの効果を擧げてゐる。こは印刷に際し、ルラの使ひ分け一つに依りて、上中下三段の着色を、同時に現し得るのみならず、ぼかしとか、或は濃淡の調節の如きも、單に技術者の呼吸にて、意のままに刷り出さるゝものなれば、普通石版の二色を刷り上げる間に、この印刷術にては、優に五色、乃至六色を刷り上げることもさまで困難ならず、これを經濟上より見て頗る當を得たものであつた。

併し何分前記の如く、インキの盛り加減と、ルラの使ひ分けとを、唯一の生命とするだけに、上中段、又は中下段の重なり目に於て、兎もすれば、やゝ醜き複色を生ずるといふ、一種の缺點はななくもないが、これとても僅かなる注意にて、完全に其の弊害を除去し得たのである。

かゝる有様なれば、「教訓繪ばなし」の表紙は、漸く編數を重ねるにつれて、畫師と刷士との呼吸も一致し、兩者の巧みなる協力に俟ちて、忽ち大阪の出版物を凌ぎ、益々精彩を發揮し、安價なる幼年繪本なるに拘らず、其の外観は、稀有の美麗を感ぜしめ、大に世間の歡迎を受けた。

殊に、これが本文の如きは、十餘年前の幼年雜誌や、初期に於ける少年世界の、最も精巧緻密なる圖版をば、何の惜氣もなく使用せるさへあるに、其の印刷面には、殊更に墨刷を避け、各冊それぞれ色調を異にせる爲め、繪本として、はた讀み本として、著しく變化の妙を極め、將來の華美なる繪本の芽が、早くこゝに萌せるものとも想はれる。即ちこれが總題目を示せば、

- |            |            |
|------------|------------|
| 第一編。家庭の卷。  | 第二編。お嘶の卷。  |
| 第三編。海軍の卷。  | 第四編。陸軍の卷。  |
| 第五編。動物の卷。  | 第六編。植物の卷。  |
| 第七編。ポンチの卷。 | 第八編。遊戲の卷。  |
| 第九編。地理の卷。  | 第十編。歴史の卷。  |
| 第十一編。立志の卷。 | 第十二編。冒險の卷。 |
| 第十三編。修身の卷。 | 第十四編。お伽の卷。 |
| 第十五編。戦争の卷。 | 第十六編。逸話の卷。 |



- 第十七編。奇談の巻。
- 第十八編。娛樂の巻。
- 第十九編。理化の巻。
- 第二十編。博物の巻。
- 第二十一編。發明の巻。
- 第二十二編。衛生の巻。
- 第二十三編。天文の巻。
- 第二十四編。地文の巻。

と、右の如くに分類してあつた。勿論かゝる標題の選み方には、可なりの無理があり、幼年用の繪画として、幾分妥當を缺ける感もあり、且必ずしも其の内容の全部が、標題に適合せるものとも思はれないが、形式上強ひて總體の題目を掲ぐるの必要を感じ、只假に名稱を附せるものに過ぎなかつた。そは堆積せる圖版を、手當り次第に搜索し、辛うじて一編に充つるだけの個數を得るや、これに適宜の解説を附するか、又は小話を案出して、兎も角も辻褄を合せるといふ、極めて變則の手段に依つたからである。

何れにせよ、「教訓繪ばなし」の出版は、當初多少の不安ありしに拘らず、發行早々好評を博し、各編とも月を置かず次々に版を重ね、翌三十七年夏に至り、豫定の二十四冊を完了、更に新しく二十四冊の續編を刊行すべく、これが總目次さへも發表したのであるが、當時戰爭漸く酷となり、それに連れて少年讀み物に對する出版者の警戒は、いよ／＼加はり來り、爲めに折角發表したる續編の刊行は、空しく沙汰止みの運命に會した。併し博文館は、「教訓繪ばなし」の成果に見て、廢版復

活の有效を感じ、更に明治末より大正初頭にかけて、再び舊版利用の手段に出で、或は「幼年繪話百番」、または「幼年ボンチ」、さては「幼年課外讀本」等と、次々に十二冊若しくは二十四冊の叢書を續發して、各種それ／＼に相當の成果を擧げたのである。



和田英作の筆意

者共に少年部に於て適當の解説を附し、一を「日本武將傳」と題し、一を「少年動物畫談」と題して單行出版することゝなつたが、別けても「日本武將傳」の如きは、期年ならずして、十數版を重ね

また、曾て「少年世界」に登載して、特殊の異彩を放ちたる五姓田芳柳筆、生巧館彫刻の西洋木版「日本武將鑑」と、和田英作及び北蓮藏筆の同じく洋木動物標本畫は、共に其の圖版彫刻に思ひの外の高價を拂ひしものだけに、徒らにこれを埋藏するを遺憾とし、兩



るに至り異常の成功を収めた。

一方、「少年動物畫談」は、理學博士石川千代松の綿密なる校閲を経たる上、和田英作の着色口繪と、同じく着色の清新なる表紙とによりて、大いに異彩を放たせ、明治三十七年秋季、即ち日露戰爭の最中に出版した。類書乏しき爲めにや、これ又可なりの評判を博し、永く少年社會の愛讀を得たのである。

### 第五節 「日本昔噺」の英譯

日本在來の、いはゆる昔話の梗概を、廣く外國人に認識させ、同時に我國固有の木版技術の精緻を發揮すべく、特に良質の和紙を使用し、畫家、彫刻師、刷師、製本師の一流どころを動員して、最も良心的の書冊を作り上げ、題して「英文日本昔噺」と云ひ、世界的に呼びかけたる者は誰あらう。日本橋日吉町の長谷川書店であつた。

此の「英文日本昔噺」の、はじめて呱呱の聲を挙げたるは、恰も明治二十三四年の交であつたかと思はれるが、果して其の出版の報せられるや、當初の豫期以上に、良好の評判を得たので、更に次々に續刊して、遂に全部二十冊に達し、極めて特色ある一大文献として、大なる足跡を印したことは、今も猶ほ知る人少くないであらう。

此の書は、美濃判四つ折、十數丁の中に、小林永濯、松本楓湖、渡部省亭等の苦心經營の餘に成れる極彩色密畫をところ／＼に挿入し、これを中心に文字を刷込み、彩色刷の讀み本としての使命を、完全に果し得たものと見られる。即ち、此の叢書に揮毫したる畫家等は、何れも非凡なる手腕の持主にて、特に傳彩上の効果を擧ぐる點に於ては、他の多くの畫家に較べて、嶄然一頭地を抽ける感あり、隨つて日本木版の妙技を認識し、且これを愛好せる外國人の趣味に、最も適合せしめたることは、確に經營者の頭腦の優越を思はせるものがあつた。

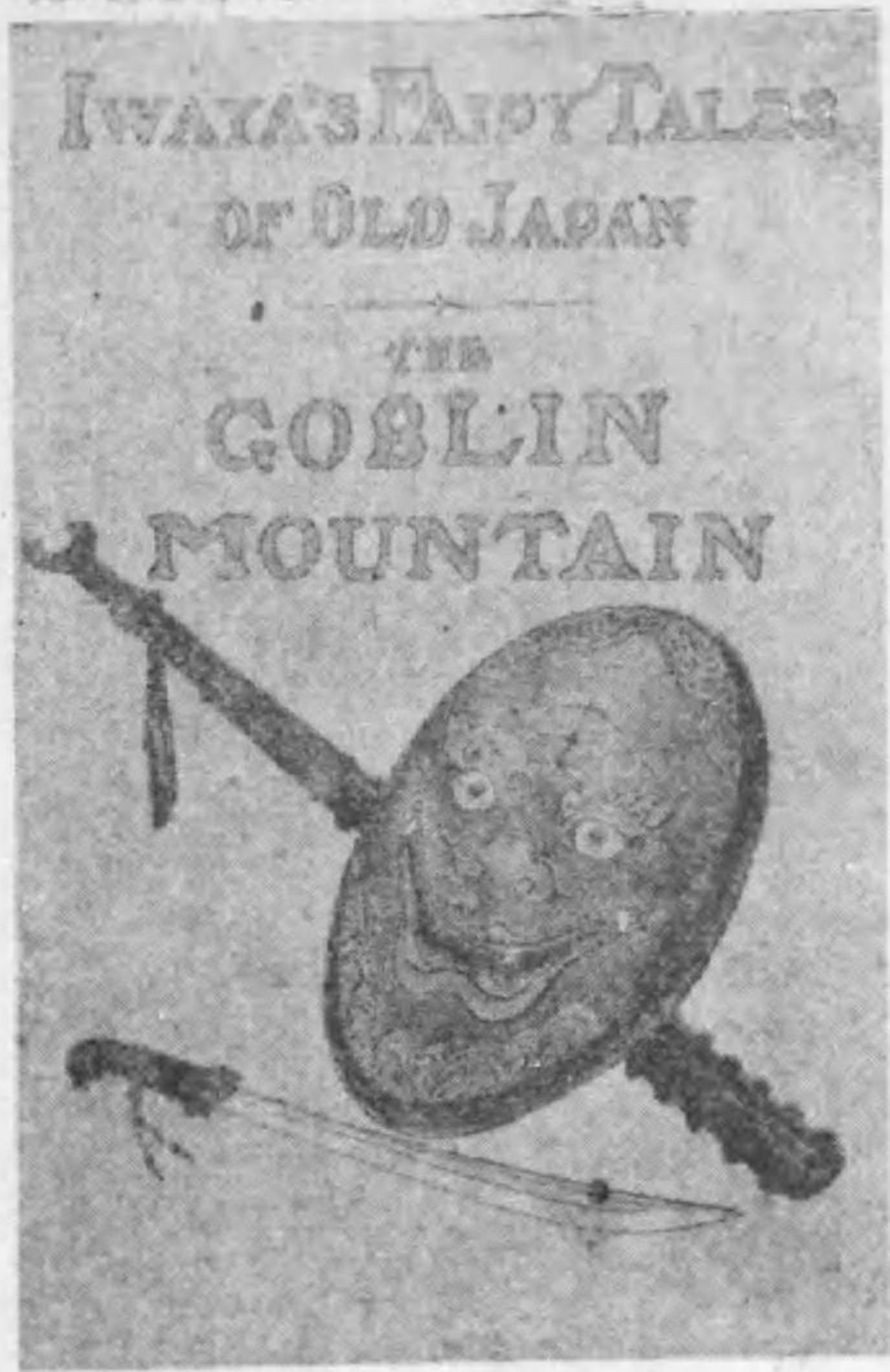
されば本書の挿畫には、世上普通に見る如き俗惡低級にして、目を射るが如き濃厚の傳彩を避け寧ろ清楚秀麗なる淡色を主とし、巧みにこれを案配したるを以て、其の何れの頁を繰展ぐるも、さながら紅白梅花の咲き綻ぶ初春の好景に接するが如き思ひあり、而もこは艶麗なる濃彩を驅使して徒らに眩目の美を發露せしめんとする者に比して、一段の苦心巧思を要したるや、敢て言ふまでもなき所である。

然るに、「英文日本昔噺」の完成後、約十餘年を経て、英學新報社は、これとは別の意味によりて和英對照の「日本昔噺」を出版すべく、主として英人をしてこれが翻譯を擔當せしめ、且其の底本には、巖谷漣山人の「日本昔噺」本を使用することゝした。茲に於て漣山人は、相當の手心を加へて、舊著の改訂を行ひ、無用なる形容詞や、或は外國語として妥當ならぬ洒落等をも、出來得る限



りこれを省き、以て日本昔噺の眞面目を發揮すべく努むる所あつた。

かくして、英學新報社の「和英對譯日本昔噺」は、明治三十六年四月より、從來の「日本昔噺」



紙表の噺昔本日譯對英和

の編次に依つて發行することとなり、第一編「桃太郎」より、第十二編「物臭太郎」までを、約一ケ年餘にして、遅滞なく完了せしめた。猶ほ原著者は、この書に序して次の如くに言つて居る。

日本昔噺の題下に日本古來のお伽噺類を、新たに余の書き改めたのは、已

に十年前のことである。

今その全集が、文學に堪能なる英米の諸婦人の手に依りて、更に英文に翻譯され、遠く海外へ紹介せられるに至つたのは、余の少なからず喜ぶ所であるが、それと同時に、十年前の余の筆

の今日と成つては瑕澤山で、我ながら慙愧に堪へない。

其所で譯者諸嬢と謀つて、凡て之に筆を加へ、専ら簡單に、平易にと書き直した。余も先年伯林の東洋語學校で、獨逸人に日本語を教へた時分に、度々此の書を用ゐたことがあるが、その時の實驗に依つて見ても、それならば外國人が、之に依つて日本語を學ぼうと思ふにも、強ち困難ではあるまいかと思ふ。

但假名遣ひや漢字の上に、此の頃の新語法を用ゐなかつたのは、實は余の本意ではないが、思ふに此の英語書は、讀者を彼の原書に比して、更に他の方面に待つのであるから、少年童女に對する斟酌は、又必ずしも要せぬであらう云々。

蓋し此の叢書出版の目的は、嘗に外人のみを對照とせるに非ず、當時旺然として勃興せる英語修學の青少年の爲めにも、亦趣味多き好個の參考材料たらしめ、かくて内外相應じて、其の讀者を求めんとする意圖なりしやに想はれた。

此の叢書の形式如何を見るに、これを日本風に、右方より開けば、在來の「日本昔噺」と殆ど變る所なく、また反對に、左方より開く時は、英文のみといふ一種斬新の製本形式に依り、且英文の部に挿入せる數面の繪畫は、すべて「日本昔噺」に加へたるものを、其まゝ再刻して使用し、表紙の圖案も、和洋兩面それ／＼に意匠を異にし、表裏共に相當の美觀を呈せしめたものである。



而してこれ等翻譯者は、何れも「英學新報」の寄書家にして、英人リッデル、コルビー、ソルトン、及び米人グリーン、日本津田梅子等數名の名が署され、これ等四者は、在留女流文藝家の鏘々たる人々だけに、此の種のもの、翻譯者としては、恐らく最適任者と見るべきであらう。

即ち、「和英對譯日本昔噺」は、和文部（挿畫無し）約二十頁、英文部（挿畫有り）約三十六頁、これを左右双方より合綴して、中心部に奥附を附し、精良の上等紙を用ゐて、印刷面の鮮明を期し、本文には全體四號字を充たして読み易からしめた。然るに其の出版後の結果は、聊か豫想に反するものあり、且其の續刊中に、日露戦争を迎へし等の關係もあり、最初二十四冊全部を出版すべき意氣込のところ、中途より豫定を變更して、第一期分十二冊のみの發行に止め、次で英學新報社總體の事業も亦、漸次縮小の一路を辿りし爲めにや「和英對譯日本昔噺」は、未だ多く宣傳弘布を見ずして其の形影を没し去つたのである。

謂ふに此の叢書が、かく當初の豫期に反して、遂に好果を收めざりし主なる理由は、これを外人向とすれば、外装其の他に未だ到らぬ點あり、これを一般青少年向とせば、其の取材趣向に稍飽き足らぬ所ありて、正しく其の方針を誤りしもの、世にいふ帯には短し襷には長しの譬に漏れず、折角一石二鳥を目ざしながら、一鳥をも獲なかつたものではあるまいか。

前記せる長谷川書店の「英文日本昔噺」が、挿畫裝幀用紙製本ともに、専ら外人の趣味嗜好に投じたる結果、これを愛玩する者頗る多く、或は故國への苞苴として、購ひ去る者少なからざりしに徴するも、日本人向と外人向とは、各別種の工夫を要すること勿論であらう。

何れにするも、當時我國の青少年間には、英語學修の聲益と高まり、一般學生は固より、商家の丁稚も、職場の徒弟も、夜間の寸暇を割きて、主家附近の家塾に通學する者多く、就中學生を主としたる神田の國民英學會や、正則英語學校等は、最も多くの夜學生を收容し、爲めに兩校の退け時には、さしにも廣き錦町通も、退場學生の通行によつて、身動きならぬ有様であつた。されば又此の機運に催され、これ等の少年學生を對照とせる英語専門の出版書肆の現出するもの相次ぐの盛況を來たした。

「和英對譯日本昔噺」は、かゝる雰圍氣中に生れ出でしに拘らず、學生の趣味、目的に遠ざかりし爲めか、それとも他に其の因ありしか、兎も角も豫期の成功を見ざりしは事實である。

## 第六節 「明治少年節用」の出版

物を囊に搜るが如しとは、古來の格言であるが、若し一部完璧の書籍の中に、一切の普通常識を盛り、必要の場合に應じて、簡單にこれを檢出し得ること、猶ほ囊中の物を搜るに等しき、輕便重寶なる書物、即ち節用集の如きものを、少年の机邊に常備せしめしならば、學問修業上に、尠から



ぬ効果と便益とを奏するであらうとは、少年教育に関心を有てる識者の間にも、既に屢々唱へられし所である。

殊に此の頃、獨逸より歸朝したる小波は、彼の地に於ける此の種の書籍に依つて大なる示唆を受け、多分に其の必要を力説したる一事も、亦少年用節用集出版の導火線となれることは否み難い。而して此の内外一致の要求の聲に従つて、少年世界編輯部の手に編まれしものが、茲にいふ「明治少年節用」に外ならぬ。

「明治少年節用」の編纂は、三十六年の春頃より着々開始せられた。固より雑誌編輯の片手間を利用して、これに従事するのであるから、其の初めの程は、中々に思ひ通りの進行を見なかつたものゝ、是が非でも、本年の天長節當日（十一月三日）を期して、弘く市場に送り出さうといふので、それぞれ分擔を定め、夜間と日曜祭日の時間をこれに充て、多數の参考書類を用意して、懸命に努力せる結果、其の年夏の末までには、大部分の原稿と挿畫とが完成し、いよいよこれを組版に附する段となりて、さて如何なる形式に依るか、こゝに亦考慮を拂ふ要があつた。

その主なる理由は、従來日本の少年書類中に、未だ類例なき斬新の百科全書なるだけに、四六判とか、袖珍本とか、現に行はれつゝある古き型體を逐ふが如きは、聊か智慧の足らなさを思はせる、さりとて書物の性質上、かの「小波洋行土産」の如き眞四角形も如何かと思はれ、兎や角と思

案の最中に、偶然市中に發見したるが、大阪田中宋榮堂發行の商業書簡文の一冊であつた。此の書は天地こそ四六判ではあれ、横の寸法は約一寸ばかり狭く、一種新式の長方形の書冊であつた。これが後にいふ四六四四取三六判である——而も此の書の内部は、全體の約三分一近き齧頭を附して、見る目にも頗る感じよく、即ちポケット用としても、携帯に便利であるから、「明治少年節用」の型式は、これに準ずるが最も理想的と考へられた。

ところが何故か、東京の出版物には、未だ一種たりとも、此の種の製本は見當らない、否、或は有つたかも知れないが、寡見の編輯者等には其の存在を認められなかつたのであらう。兎も角さういふ次第で、これを製本師に問ふも、ハテとばかり、徒に首を傾けるのみ、紙の取都合も印刷の掛け方も、皆目不明であつた。併し大阪に於て、既にこれを製出するからは、必ずや何等かの經濟手段を用ゐたるに相違あるまいといふので、取敢ず右の書簡文を破却して、さまざまに研究を重ね、遂に其の方法を捕捉し得るや、いよいよ此の新型長方形の三六判を適用することゝした。東京の出版者は、曩に異式の木版印刷（教訓繪ばなしの表紙）を大阪に學び、今また三六判の製本形式を、大阪に示唆された一事は、聊か奇妙に感ぜられる。

かくして「明治少年節用」の印刷は、豫期の如く進捗し、二條基弘公の題辭と、加藤弘之博士の序文とを請ひ受け、最初よりの計畫通り其の年十一月三日を以て堂々と生まれ出でた。紫色クロー



ス地に、山中古洞筆の光琳式老梅の一株を、ベタ金にて現し、小口三方をば紅色にて塗り潰し、隅切地券表紙の絢爛たる装幀を施し、當時としては、他に類例稀なる極美の書冊であつた。

即ち其の總紙數約六百頁、數百面の小形圖版を所在に點じ、これが定價の七拾五錢は、やゝ高度



少女節用の口繪

なりしとは云へ、既に幾回となく、「少年世界」誌上に豫告して、極力宣傳に努め、随つて讀者の待望久しかりしこととて、出版早々旬日にして數千部を賣盡し、爾來引續き重版して而も註文殺到して止まず、兩三年中には十數版を印

行するの盛況を呈した。今試みにこれが宣傳文に徴すれば、

明治少年節用は出でたり、此の書口繪には、東宮同妃兩殿下をはじめ奉り、兩皇孫殿下の御尊影を掲げ、各訂盟國々旗及び日本勳章の等級、陸海軍服制等、すべて精巧無比なる彩色石版を以て印刷したるもの、これが内容に至りては、齋頭にお伽噺二十四題、イソツブ物語、日本歴

史、西洋歴史、日本立志談、西洋英雄傳等を收め、又本文には、教育勅語をはじめ、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、礦物、農業、工業、商業、體操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、内外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆蟲採集法、救急療法、學校案内、旅行案内、郵便案内、修學案内、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢對照年表、年齢早見表等あり、日本少年座右の寶典とは、即ち此の書の謂也。

と縷述して、其の内容の一切を盡してゐる。勿論今日にては、此の種の記事の大部分が、或は常用日記の附録として、又は何々便覽として、一般世人の目に熟し、さして珍しくは感じないもの、當時斯くの如く日用便覽の多くを收載せる者は、殆どこれを見なかつたが爲めに、「明治少年節用」の内容の豊富にして、何れも實用に適せる點は、世間少年の愛好の中心になれる主因である。

されば此の書は、其の後も兩三回に亘りて、或は記事の誤謬を訂正したり、若しくは更に紙數を補加して、多くの新しき事實——例へば日露戰爭の經過とか、海陸軍の新編制とか、捕獲軍艦の一覽表等を添へて、益々其の面目を更新し、長く新らしき讀者に便益を與へたのである。

次で又明治四十年九月には、少年少女部の協力によつて、これが姉妹篇なる「明治少女節用」を編纂し、普通學科以外、少女として心得べき一般常識を漏らさず網羅し、紙數形體共に、「明治少年



節用」に倣うて、廣く世間の需用に應じ、これ亦少年節用に追隨せる成果を收めた。

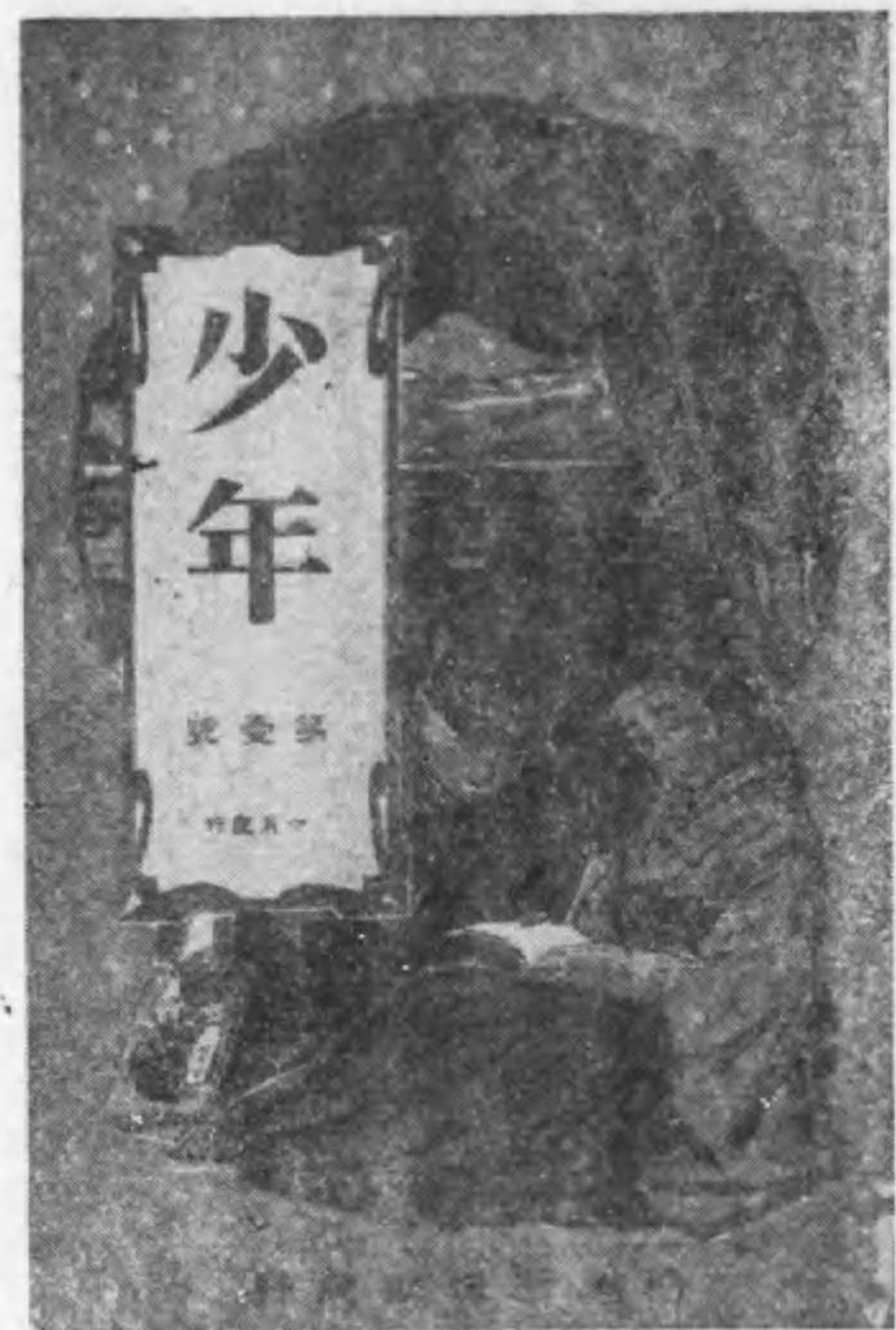
謂ふに今日、少年少女用の優良なる百科全書類の出版は、必ずしも二三に止まらぬであらう。而も其の中には頗る尨大にして、十餘冊に亘るものすら、亦敢て珍しとはせぬ。併し初めて此の種の書籍を編纂して、少年學生に提供したるは、蓋し一卷の「明治少年節用」を以て嚆矢とすべく、よしそれが未だ以て完璧の寶典といひ難かつたにせよ、其の未墾の境地に開拓の鉞聲を加へし一事は明かにこれを認めなければなるまい。

### 第七節 時事新報社の「少年」

寺山屋川を編輯主任として、時事新報社が、新たに少年雑誌の經營に着手したるは、實に明治三十六年十月であつた。即ち「少年」と題する品格高邁なる一雑誌の生れ出でたることは、正しく斯界の驚異といふべきである。これに關して、同誌第一號の卷頭には、編輯記者の名に依りて、次の如くに主張してゐる。新雑誌「少年」の理想の那邊に存するかは、これに徴して一目瞭然たるものがあらう。

少年發行に就て。 時事新報社から、少年雑誌を發行するといふ事は、今日急に思ひ立つたのでありません。既に先年其計畫がありまして、實行の運びにまで立ち至つて居つたのですが、

何分にも新聞紙の方が、擴張やら改良やらに寸暇がないので、思ひながら延引して居りました。その中に、世間でも、少年の讀み物に注意するものがあつて、諸所より雑誌や單行の讀み物を出版するやうになりました。で、是ならば私共が、わざ／＼少年雑誌を發行するにも及ぶまいといふので、一時中止の姿になつたのですが



(號刊創) 紙 表 の 年 少

近頃になつて、其等の出版物を見ますと、何うも私共の考へと違つて居るものが多いのです。それで又々先年の計畫に立ち戻つて、雑誌發行といふことに取り極めました。

雑誌「少年」が即ちそれです。初號は多少不十分の所がありませうが、それは號を重ねるに従つて、發達もしませうし、又兒童教育に關する私共の意見も、是から追々紙面に表現するであらうと思ひます。



と、頗る平易なる文章を以て、其の態度を表示した。蓋し此の新雑誌の背景には、時事新報といふ當時屈指の強力なる宣傳機關があり、且又その社と最も密接なる關係下にある慶應義塾幼稚舎の児童を買客とする等、何れの方面より見るも、基礎の鞏固にして、且將來性を有すること、かの朝生暮死の片々たる小雑誌と異なり、必ずや大成して、斯界に雄飛すること疑ふべくもなく、随つて「少年世界」にとりては、曩の「少年界」とは、較べものにならぬ程の、一大強敵の出現を想はしめたのである。

さて新生の「少年」は、其の本文用紙に、從來他の如何なる同種雑誌にも見難きばかりの、精良なる舶來上等紙を使用して、挿入寫眞版の印刷効果を大ならしめ、極彩色口繪（創刊號には山本芳翠のおないどしを収む）の外に、中繪と稱して、本文の各所に、標本畫式の別紙刷寫眞版を加へ、記事には動植物、一般理科、歴史、逸事等を、何れも専門の博士大家に依頼して、其の正確を旨とする等、著しく泰西少年雑誌の編輯法に倣ふものがあつた。

謂ふに、少年雑誌に必要不可欠なるは、挿畫の多趣多様なる一事である。されば「少年」は、此の點にも深く留意し、時事の繪畫部に在る筒井年峰、北澤樂天等を動員してこれに参加せしめ、各其の特色の發揮に力めた。——樂天は、小林清親以後に於ける漫畫の名手にて、随つて時事新報の風俗漫畫は世評最も高く、當時樂天の名聲は都鄙に著聞し、時事新報の部數を左右する力があつた。

後に東京パツクを主宰して、斯道の第一人者となりしは、今猶ほ記憶に存する人があらう。

こゝに「少年」は、其の創刊號の一頁に、樂天の漫畫を添へ、特にこれを懸賞考物として、次の如き規定の下に、廣く讀者の解答を促した。猶ほ此の一面の漫畫を見るに、下部右寄に姫野刻とあり、恐らくはこれ樂天專屬の彫刻師なりしと想はれる。



（りあと刻野姫） 意筆の天樂澤北

題畫の説明。これは老人が公園の共同椅子に腰を掛けて居る中に、睡氣を催し、杖を力にうとくと居眠を始めた所へ、悪戯の子供が二人來て、老人の凭れてゐる杖の先へ繩を結びつけ、突然グイ

と引いて、老人を驚かして遣らうとして居る所です。鳥が二羽、樹の上からそれを見て居ります。蜂がせつせと巢を拵へて居ります。向ふ方には、見事な噴水があります。老人の足元に



は犬が寝て居ります。是れは老人の愛犬です。若し子供が繩を引いたら、老人はどんなに轉ぶでせうか、それとも狸寝入で、引張る途端に、不意に起つて、悪戯小僧を捉へるでせうか、マサカ狸寝入でも無さうです。若し轉んだとすれば、どうするでせうか。何れにしても、鳥や蜂や、犬や噴水がありますから、屹度大騒動になりませう。

**答案の方法。** 題畫の意味は、略々右の通りですが、扱どんな騒動が起りませうか、是れが問題です。皆さんの工夫にて、此の題畫の結果を、面白可笑しく仕組み、一ツ以上三ツ以下の續畫を考へて御覽なさい。即ち題畫を一とすれば、二、三、四と續畫を工夫するのです。尤も二にて結末を着けても、三にて終つても、それは皆さんの御隨意です。また犬、鳥、蜂、噴水等の材料も、強ひて残らず使ふには及びませんが、皆使つて面白ければ尚ほよいのです。殊に注意するのは、考案は是非面白く可笑しいのに限りますが、穢らしい事や、尾籠な事で笑はせやうとしたのは、一切取りません、畫は成るべく旨くお描きなさい。同案なれば畫のよいのを優等とします。

**答案の心得。** 左の通り定めます。(一)答案者は十五歳以下の少男少女に限ること。(二)答案はいふまでもなく自分の意匠、自分の畫なるべきこと。(三)自分で作つたことを證する爲、答案の同紙中に父兄か學校の先生に、「本人の自作」と書き入れ、捺印して貰ふこと。(四)答案は半紙一枚の中に畫と宿所氏名年齢、父兄又は教師の證明等、残らず書き入れること。若し一枚の紙にて足らざる時は、離れ／＼にならぬやう、固く糊付にすること。(五)文字は明白に書くこと。(六)答案は必ず封筒の表に「少年考物答案」と書き入れること。特に少年と書くことを忘れぬやう注意すべし。(七)答案募集切手は十月十日最終便までとす。

**懸賞の品々。** 答案者の中から、一等一人、二等二十人を選び出し、左の品々の中お望みに依り何れでも一品を贈ります。玩具(汽車、軍艦、人形の類)、硯箱、裁縫用具、眼覚し時計、はこせこ、寫眞ブック、文庫、時事新報切手(以上一等賞)。玩具、吹風琴、リボン花簪、鉛筆、水彩繪具、手帳、束髮櫛、時事新報切手(以上二等賞)。

右の發表に依つて見れば、此の懸賞考物の出題は、編輯者としても、亦相當の期待をかけしものと想はれ、且また其の賞品の如きも、從來此の種の受賞者には、安價にして適當の書籍を贈與するのが普通とせられたるに「少年」は、少年の熱望せる物品數種を列舉し、受賞者の希望のまゝに、これを選択するの自由を得させるといふ、一種の特例を開いてゐる。これ蓋し後年講談社の少年俱樂部等の行ひし手段に等しく、假令其の物品の價格は高からずとも、兎も角も選擇自由の新しき試みが、早くこゝに端を啓きたるは事實である。

却説、「少年世界」第六卷以後に、新たに發足したる大部分の各種少年雑誌は、殆ど期したるが如



くに、毎月一回發行を嚴守し（以前は毎月二回發行を通例とす）、且これが一冊の定價も、十錢を以て標準とした。されば「少年」も亦此の例に漏れず、本文八十六頁を以て、其の價を他誌と一致させ、敢て紙數の多きを求むることなく、寧ろ内容の堅實性と、外觀の純美とを生命とするものゝ如く、随つて「少年世界」とは、自ら其の行路を異ならしめ、時に本文中に二色刷木版畫を挿みて、一段の生彩を放たせ、嶄然として他の模倣追従を容さぬものがあつた。

殊に此の當時は、既に日露間の風雲漸く急を告げ來り、爲めに「少年」は、其の雜報欄に、「佐世保の常備艦隊」と題して、次の如くに記せるは、正しく時局認識に手ぬかり無きものと思はれた。

常備艦隊の編成は、先月一日から非常に増加して、有力の諸艦は悉く編入されましたが、今その艦名を挙げますと、戦艦、朝日、三笠、初瀬、敷島、富士、八島、装甲巡洋艦、出雲、磐手、淺間、常磐、八雲、吾妻、高砂、巡洋艦、笠置、千歳、吉野、浪速、高千穂、秋津洲、千代田、砲艦、濟遠、宮古、大島、鳥海、宇治、驅逐艦、雷、電、曙、漣、隴、叢雲、夕霧、不知火、陽炎、薄雲、白雲、曉、霞、朝潮。

右の三十九隻で、此の内高千穂、宇治の二艦は、清韓沿岸警備として派遣中ですが、其他は何れも佐世保に集つて居りますから、流石の大軍港も、所狭き程だと申すことです、それから同艦隊は、常に二三の戦隊に分れ、時々戦闘操練をなし、或は陸戦隊を組織して上陸の運動を試

み、又は各艦思ひ／＼に演習に従事して居りますが、其區域は僅かに長崎から福岡邊に至るまでの間に限り、かやうにして最早二十日以上も経過して居ります。今後の成行如何は、世人の最も注意して居るところですが、先づ當分は、佐世保近海を離れることは無からうといふことです。

と、暗に戦争の近づきつゝあることをほのめかしてゐる。なほ「少年」の主筆は、幾程もなく交代して、安倍村羊（季雄）の擔任する所となり、表紙は一層精美に、口繪挿畫にも頗る見るべきものがあり、専ら内外の整備に力め、飽くまで一家の見識を持して、同種少年雑誌を擢き、而も超然として高踏濶歩したのであるが、年を経、月を重ねて、漸次創刊當時の面目を失ひ、遂には世間一般の風尚を逐うて、著しく低位に墮し、いはゆる售らん哉の態度に終始したるは、時勢の推移已むを得ずとするも、この雑誌として、最も惜むべき點であつた。

## 第八節 富山房の少年書類

従来主として學術書、又は受験參考書類の出版に力を注ぎ來れる神田の富山房が、時代に目覺めて、少年書類の出版に手を染めたるも、亦この頃のことであつた。即ち先づ坪内逍遙を監修者として、「少年世界文學」と、更にそれよりも程度高き青年向の「通俗世界文學」との、二大叢書の目論



見を、而も同時に発表したことである。

勿論「通俗世界文學」は、こゝに記す範圍ではないが、「少年世界文學」に至りては、恰もかの「日本お伽噺」と、「世界お伽噺」との上層を行かんとする者にて、全部五十冊、毎篇美麗なる表紙と口繪と挿畫とを以てし、表紙の上には、パラフィン紙を當て、一層の美觀を發揮させ、一冊の價十二錢といふ觸れ出しにて、其形容より見るも必ずしも高價とは思はれなかつた。

而してこれが編者は、主として早稻田大學文科出の秀才を網羅し、其の取扱へる題材は、東西古今の傳説童話等を根幹とし、特に趣味深きものを採り容れ、何れかと云へば、他社の既刊物を逐ふことなく、別種の材料を索めて、清新の氣分を横溢せしめることに努めたものと想はれる。其の題目と作者を見るに、

- 第一編。ふしぎの魚 正宗 白鳥。
- 第二編。狼 太郎 中島 孤島。
- 第三編。神代のはなし 河井 醉茗。
- 第四編。はちかつぎ姫 河井 醉茗。
- 第五編。イツツブの話 西村 醉夢。
- 第六編。六 勇士 石原 萬岳。

- 第七編。はまぐりの草紙 河井 醉茗。
- 第八編。梅王松王櫻丸 正宗 白鳥。
- 第九編。くづの葉姫 正宗 白鳥。
- 第十編。七夜物語 高須 梅溪。
- 第十一編。百姓と惡魔 中島 孤島。
- 第十二編。五斗兵衛 正宗 白鳥。
- 第十三編。頼光四天王 大島居古城。
- 第十四編。新 伏 姫 平尾 不孤。
- 第十五編。蝶の魔法 中島 孤島。
- 第十六編。ロビンソン物語 佐野 天聲。

となつて居る。監修者坪内逍遙は、これより龔富山房より小學校用國語讀本を出版して、可なり的好评を博し、小學兒童にも親しみ多き人として、此の「少年世界文學」の前途には、相當の期待のかけられしことは勿論である。

随つて最初より、五十編まで續刊すべき豫定のところ、實際に發行したるは、只前記の十六冊に過ぎず、他は惜しくも未刊のまゝに葬られ去つた。出版界に權威ある富山房が、折角創めた此の計



畫を、中途にて挫折せしめるには、亦相當の困難に逢着せることが想はれる。併し此の社が數年後に至りて、最も權威あり、且最も良心的なる「家庭文庫」の大編纂に成功して、嚴然小童話書類を壓倒したる偉業は、正しく茲に胚胎せるものと見るべきであらう。

今、試みに、右に掲げたる「少年世界文學」の執筆者中、其の二三を紹介すれば、石原萬岳は、幼年唱歌に名を謳はれたる石原和三郎にて、當時富山房の編輯部に在りし人、また西村醉夢は、今の早稻田大學教授文學博士西村眞次にて、高須梅溪はやはり文學博士高須芳次郎である。更にまた大島居古城は、人類學を修め、福岡縣中學修猷館の教諭となり、一轉して日清印刷會社（今の大日本印刷複工場の前身）を興し、専らこれが經營に當りたる人、また平尾不孤は金港堂の文藝界を編輯して名聲を謳はれたが、若くして病歿した。

さて此の「少年世界文學」の發行に關しては、富山房五十年史の一節に、

上略、もう一つの文藝物は、坪内博士監修の、「通俗世界文學」と、「少年世界文學」とで、前者は流麗なる名文章で有名な繁野天來氏の「失樂園物語」「神曲物語」をはじめ十二篇、後者は正宗白鳥氏の「ふしぎな魚」以下十六篇、一は東西古典文藝の、一は同じく少年文藝の再話であつて、當年の一般の趣味には、やゝ高尚過ぎたであらうか、近年俄に行はれ出した家庭乃至青少年女用の文藝的な再話、又は童話の先驅としての功績は、大いに認められてよいものである。

と云ひ、又これが作家の一人正宗白鳥は、當時の思ひ出を次の如く語つて、富山房の記事に裏書してゐる。

三十餘年前、私が學校卒業後間もなく、世界の名作の梗概と、少年向の名作梗概との二叢書が坪内博士監修の下に、富山房から發行されることになり、我々が分擔執筆することになつた。前者の原稿料は一冊七拾五圓後者は三拾圓で、當時では容易に得難いものであつた。私は兩方共第一編を書いた。（中略）

ところが時勢が早かつた爲か、賣行が宜しくなくて、富山房は大分損をしたさうである。しかし時代に先んじて、有意味な仕事をして損をしたのだから、損の爲甲斐があつたといつていい、富山房が今日の大をなすに至つたのも、さういふ進歩的の考へを早くから持つてゐたためであらう。

即ち、以上の記述に依つて見るも、「少年世界文學」は、「通俗世界文學」と同様に、さして世間の歡迎を受け得なかつたものと想はれるが、當時はこれ等著名の執筆者達も、未だ一般少年に親炙すること少く、且發行所富山房が、少年讀者に對する、有力なる宣傳機關を有たなかつたことと、搗て、加へて日露戰爭といふ、讀書界の傾向を一變すべき大轉換期に際會したこと等々の爲め、



折角此の有意義の叢書をして、不幸にも豫期せざる短命に終らしめし所の主なる原因として擧ぐべきではあるまいか。

### 第九節 繪葉書の流行

偶々歐羅巴の都市に在留する人から、内地の親戚知友に向けて通信し來る彼の地の葉書には、其の裏面殆ど一杯に、極めて精巧なる彩色石版や、或は玻璃版印刷を應用して、秀麗なる風景とか、若しくは豪壯なる建造物や、又は人物、名畫等を現し、通信文は主として表面左側の一部分か、又は裏面の僅かなる餘白に認められてあるので、これを入手する者は、其の美觀に打たれぬは無く、英、獨、佛はいふまでもなく、南米アルゼンチン方面よりするものは、西班牙の輸入品らしく、畫面に一種の手工をさへ施して、玩具式に、又は裝飾品式に、極めて奇抜にして斬新なる意匠のものすら見受けられた。

然るに我國では、恰も明治三十三年の秋から、諸外國の例に倣つて、私製畫葉書の發行を許されたので、逸早く其の當日を期して、これを印刷發賣したる者は、たしか神田錦城中學附近の、名もなき小さな活版屋であつた。勿論急造の間に合せ物ではあり、且は印刷屋の餘技ではあり、畫葉書とはたゞ名のみにて、打見るところ裏面の約四分の一程度に、ほゞ一寸角の東京名所を、赤、綠、セピア等の一色刷寫眞銅版に現したるだけの、至極粗惡のもので、何の意匠も雅致も認められず、其の幼稚にして平凡なるは、世にいふ子供だましの域を脱しなかつた。併し畫葉書趣味の將來必ず進歩發達するであらうことは、この幼稚なる最初の刊行物でさへ、相當數の賣上げを示した一事によつても、これをトへし得るであらう。

折から漣山人は、伯林滯在中丹念に蒐集したる多くの見事な畫葉書を齎し歸つたので、「少年世界」は其の第九卷の新年附録として、これまでの慣例なる双六を廢止し、獨逸製の畫葉書を模範として、別に日本式、少年式ともいふべき、四枚連続の畫葉書を武内桂舟の意匠に託し、多色刷石版に附して、大いに新味を湛へさせ、更に一方には、從來連載せる投書欄の工夫畫に代ふるに、畫葉書の圖案を募集し、猶ほこれが参考に資すべく、外國製畫葉書の圖様を模刻して、毎號二三葉づゝ掲出した。

少年の手に成る畫葉書の圖案は、元々本文中に挿入する關係にて、單に墨一色刷ではあれ、既に此の種の趣味が、一般に認識せられたる爲めか、毎月可なり多數の應募作品が集つたので、これを適宜選抜して、等級を附し、一定の型式に清書せしめて五六種づゝ連月發表したのであるが、恰も此の當時桂舟の玄關には、後の漫畫家岡本一平が居て、桂舟の命のまゝに、此の應募圖案を、克明に淨寫して版下を作製したものである。



かくて翌三十七年、日露戦争の幕は切つて落され、其の戦果の擴大すると共に、當局に於ても亦次々に恤兵用の畫葉書を發行するに至り、而もこれ等の大部分は、金銀五彩と空押とを利用して、

巧みなる裝飾を加味し、海陸激戦の場面や、或は荒涼たる戦地の風物などを、玻璃版にて現出し、相常見榮有る者を作り出したが、併しこれを外國の製品に比すれば、未だ格段の見劣りあるのは、亦已むを得ないことと思はれた。

かゝる趨勢につれて、當時東京市内には、畫葉書専門の製作所が



繪葉書圖案(一平とあり)

世にいふ雨後の筍の如く、到る所に續々現出せるのみならず、これが宣傳機關として、或は「ハガキ文學」又は「畫葉書世界」等、其の他にこれに類する新雜誌の創刊を企て、専ら畫葉書趣味の鼓吹に力むる一方、これ等の雜誌は、少年の文章詩歌をも、又大いに歡迎せる關係にて、何れも相當の成績を挙げ、延いて畫葉書の新版發行を促し、これが流行は日を逐うて益々盛を極むるに至つた。

これに關して、「少年世界」の小波一家言には、次の如き説を掲げて、少年に警告する所あつた。戦勝の餘徳は、思ひ設けぬ方面に及んで、畫葉書の進歩流行、今日の如きは、寧ろ異數といふべしである。

何事も長所あれば短所あり、效もあれば又弊もある。されば畫葉書の流行に付ても、必ず多少の弊の伴ふは、勢ひ免れぬ所であらう。が、その少弊あるが爲に、其進歩を妨げ、流行を遮らうとするのは、大いに感服せぬ所である。

要するに繪葉書は、平民美術の隨一である、國民の趣味を養ふ所謂美育の一段としては、恐らくこれに如く者はあるまい。が、強ひてこれを集めたさに、知りもせぬ者に交換を挑み、其爲に餘計な錢を費し、大切な時間を無駄にするのは、矢張り弊の中であらう。夫れ君子は樂んで淫せず、只その徳のみを嘉して、その弊に溺れることさへ無くば、畫葉書道樂大いに獎勵すべし。

と、斯様に急所を突いて居る。事實日露戦争時代を中心として、我國に於ける畫葉書蒐集熱は、最極點に達したる觀があり、それにつれて、外國製のものすら續々舶載せられたが、これ等は俗にいふ東洋向の第二流品と見られ、彼の地から直接入手するやうな、精巧美麗の藝術的印刷物は、殆ど坊間にてこれを求め得なかつた。



兎も角も當時に於ける畫葉書の流行は、全く今人の想像以上に、大小種々の畫葉書帖は、所在の勸工場くわんこうば（今日の百貨店の如きもの）等に、燦然として美々しく陳列せられ、畫葉書商の店頭には、絶えず新版を飾りて、通途の人の目を奪ひ、分けても少年のこれに憧れを有つ有様は、明治初期に於ける繪草紙店を再現したるやに想はれ、或は又何等かの記念の催事ある場合には、必ず幾種かの畫葉書を作りて、來會者一般に配付し、更に主なる名所、古蹟、古社寺、旅館等に至るまで、思ひ思ひに玻璃版の畫葉書を發行して、大いに宣傳の材料に供した。蓋しかゝる實用的方面の畫葉書利用は、今日に至るも、依然盛行を見つゝあること亦何人も周知の所である。

併し如何なる流行にも、盛衰消長あるは、免れ得ぬ運命にて、さしも一時は、數種の多きに上りし畫葉書宣傳用の雑誌も、いつとなく一つ減り、二つ廢めして、やがて明治の末期頃には、全く其の影をかくして了ひ、隨つて又普通に畫葉書といへば、かの文展入選の名畫か、若しくは人氣俳優のプロマイド寫眞に、辛うじて其の面影を留めるに過ぎぬ状態となり、爲めに少年社會からは、もはや過去のものとして葬り去られしとはいへ、只其のこれを實用上の方面より見る時に、名所畫葉書の有つ使命は、必ずしも輕くはないであらう。

### 第十節 戦時の「少年世界」

近き將來に、日本と露西亞との間には、韓國と南滿洲との問題を對象として、一大正面衝突の起り來るであらうとは、我國の少年間に一般的に豫想せられ、爲めに日清戦役の後間もなく、著しく軍國氣分の高潮し來つたことは、既に今日まで約十年に近く、各種少年雑誌の記事内容に徴しても明確にそれを認識し得られた。即ち表面は平和其のものゝ如くに装へども、大部分の口繪と、記事とに、尙武的精神を横溢せしめたるは、正しく讀者の要求の反映と見るべきであらう。

却つて説く。茲に「少年世界」は、其の第十卷を迎ふると共に、一ヶ月を経たるのみにて戦争の勃發に依り、忽ち其の方針を一變して、斷然全誌面の武装を廢らし、此の振古未曾有の大戦争に對處し、以て其の使命の貫遂を期することゝなつた。

而して今、これが内外を検討するに、最も華かなりし第九卷に比して、第十卷の「少年世界」は、あまりにも寂寞たる變貌に於て讀者に接せざるを得なかつた。即ち其の特色として永く卷頭を飾る筈の二色刷十六頁の美觀を廢止したる外、本文用紙も亦甚だ粗惡に墮し、これを彼の時事新報社の「少年」の美麗なるに較ぶれば、よし紙數こそ彼に優れ、其の全體を通じて、甚だしく見劣りあることは、何人にも一目瞭然たる者があつた。

然らば其の著しき變貌を呈したる理由何れにありやといふに、今や博進社印刷工場は、漸く整備完成の域に達し、新たに高速輪轉印刷機を据付けて、能率の増進を計ることゝなり、爲めに從來秀



英舎工場の平臺印刷に依りたる「少年世界」は、自家工場の高速度印刷に俟つことゝなれる一事が、蓋し最も大なる原由と認められる。

元來輪轉印刷の主眼とする所は、新聞紙の如き速成を必要とする部門に利用せられ、随つて印刷面の精美よりも、只大部敷を短時間に刷了するに當り、機械力によりて人力を省き、頗る便利に、且經濟的に有利なれど、如何せんこれが用紙は、粗質なる更紙の巻取なれば、「少年世界」の特色として世間の評判を得たる二色印刷の精美を發揮することは、到底望むべくもなく、將たまたこれが全體としての出来栄に見るも、新機械の操縦に不練し致すところか、それとも機械に不備の點ありし爲めか、遺憾ながら完全無缺とは認め難かつた。

かくの如く、用紙印刷共に、甚だしく理想に遠ざかれる上に、更にまた挿畫の如きも、もはや電氣銅版の必要なく、木版の儘にて、直ちに鉛版に仕上げる關係上、時としては、著しく描線の太きに失するあり、或は又要部に缺損を生じ、若しくは急速廻轉の致す所、濃淡の度合も全からず、大量製産、機械高能を期する結果は、技巧の精緻漸く二の次となり、延いて紙面の光彩を沒了するに至つたものと見るべきである。

かゝる情勢下にある第十卷の「少年世界」を一瞥するに、先づ表紙畫に木兎、心臟形、唐草の類を、濃紺、朱色を主として例のヌーヴォー式に現せるも、これを前年度の、華かなる意匠に比すれ



(筆舟桂) 紙表卷十第界世年少

寫真版口畫には、主として出征將校、戦地の風物等の外、間々中澤弘光の戦争畫を挿入した。弘光は戦争開始と同時に編輯部に加り、爲めに挿畫の面目を一新するに至つた。

併しながら折角企圖したる「動物新標本」も、武装を凝らせる戦時雜誌の口繪

としては、稍不適當の感を免れず、随つて後半期よりこれを廢止し、代ふるに専ら戦争畫を以てした。而して其の執筆者も亦桂舟の外に、中澤弘光(旅順の最期)、三宅克巳(遼陽大激戦)、木村光太郎(戦時の天長節)、桐谷洗鱗(戦地の冬)等、新進の手腕家を動員して勇壯なる想像畫を用ひて



感興を深からしめた。

翻つて説く。少年世界の編輯部は、其の第二號以下、多年力を盡したる武田櫻桃は、望まれて他に轉出し、新たに永廻鱸江(藤一郎)を迎へて、これが陣容を整備した。鱸江は小學教員出の純粹なる教育家にて、曩に國定教科書販賣の爲めに新設したる書籍會社に勤務し、教科書に附隨せる各種の教師用参考書類の編纂に當れる人である。

蓋し前年の秋、一世を衝動したる教科書事件突發し、同時に舊小學教科書類は全廢せられ、新たに國定の新教科書を使用することとなり、其の結果一新會社の創立によつて、これが製造販賣に當ると共に、教師用参考書類の編纂を急務としたのであるが、已にしてそれ等の事務も略一段落を告げ、前記の鱸江を轉用して、「少年世界」の助手たらしめ、同誌の記事の一部をば、特に國定小學讀本に一致せしめ、小學校方面との聯絡をも一層密にして其の聲價を高め、且販路を擴張せしめんとの方策に出でしこと明かなるも、而も此の計畫は、戰爭の勃發に依りて實行の域に入らず、隨つて鱸江は幾程もなく退職し、竹貫佳水(直次)が其の後を襲ふこととなつた。

新入記者佳水は、前に記せる如く江見水蔭の江水社に屬し、「少年世界」創刊以來の寄稿家として知られ、近く米國より歸朝したる土木工師である。即ちかの膀胱船以來、少年讀者間には、相當の名聲を博せることゝて、今この地位を得しことは、いはゆる適材適所といふに庶幾かつた。而も

「少年世界」は、國定小學讀本の形式に倣ひ、假名遣等も亦これに準據して、卷頭の八頁をば「お伽讀本」に充て、此の部分に限りて、全頁子持野にて圍み、鼈頭には新字と特殊の假名遣とを指摘する等、すべて外形の一致を旨としたるが、併し必ずしも用字に制限を加へることなく、單に其の形式を學ぶに過ぎぬといふ自由性を有たしめた。

次にこれが二三種を引いて、小波の文體の如何に變遷したるかを窺ひ見よう。

**人の體。**人の目は二つあります。目は物を見る爲めの道具ドウグです。あすこに、何があるかとゆーことを知り、どんな色だとゆーことを見分けるのは、皆この目の役目です。中にも陸軍、海軍の軍人や、また畫をかく人たちは、皆、目がよくなければなりません。

耳は、目のよーに、誰にでも二つあります。これは、音をきく爲めに、付いてゐるのです。あの人は、何といつたとか、この音は、どーゆー音だとかゆーことを、よくきゝわけるのは、この耳です。ですから、音楽をやる人は、大そー耳を大切にします。

口は、たゞ一つよりありません。その代り、物をゆーのと、物を食べるのと、二つの役目をつとめます。けれども悪いことをゆーと、人に憎まれ、悪いものを食べると、體を損じますから、よほど氣をつけなければなりません。

手と足は、二本ついて居ります。手は、物をもつためにはたらし、足は、道をおるくために動



きます、體操は、この手足を、よくはたらかせる運動です。手足は、はたらかせるほど、強くなりなす。手足が、強くなればなるほど、人の體は丈夫になるのです。

昔の船と今の船。日本は、海國といつて、四方海に取りまかれた、島國でありますから、どうしても、この國では、外の國と戦をする時にも、船が一ばん大切であります。

それで、昔から、船は澤山出来て居りましたが、昔のいくさ船は、皆木でこしらへてあつて、大きな布の帆をかけ、これに風を受けては、海の上を走るのであります。

ところが、今のいくさ船は、大方鐵でこしらへてあり、それに石炭をたいて、動くよゝになつてゐますから、その丈夫で速いことは、とてもむかしのいくさ船の、及ぶ所ではありません。

また戦の時にも、昔は、矢と刀で働いたのですが、今は、大砲や、水雷で戦ひますから、そのまた強いことは、とても昔の人には、眞似も出来ません。

むかし元とゆゝ國から、日本を征めに來たことがあります。その時は日本も、この木のいくさ船でたゝかひましたが、それでも勝つて、元の兵隊を追拂ひました。

今、ロシアと戦をしますには、皆、大きな鐵の船で向ふのです、尤もロシアのほゝにも、同じよゝないくさ船がありますが、日本の大砲にあつて、もゝ四五そゝこわされました。

蝶が來て。蝶が來て。げんげの花に、ちよととまる。蝶の重さに、げんげの花が。

ちよいと揺れ、ば、蝶々もとんで。ちよいと隣の、すみれの花へ。

蝶が來て、蝶が來て。すみれの花に、ちよととまる。蝶の羽風に、すみれの花が。ちよいと動けば、蝶々もとんで。ちよいと向ひの、たんぼの花へ。

蝶が飛ぶ、蝶が飛ぶ。たんぼの花を、ちよと飛んで。またもすみれの、花さく方へ。すみれにあきれば、げんげをさして。蝶々飛んでは、ちよとまたとまる。止まる蝶々は、ちき飛ぶ蝶々。

そして夕日の、かたむく頃は。蝶々いつしか、姿も見えず。何を招くか、草の花。

右の例に示す如く、「お伽讀本」の内容は、普通の常識小話に交ふるに、毎號必ず一二の韻文を以てして、一段と趣味を多からしめ、別に小波獨特の新作お伽噺は、主として戦争關係の材料に依つて、やゝ長篇且高級のものを掲載したが、當時の世態は、十年前の日清戦争の時代とは著しく異なり、國民上下を通じて、五千萬一心協力、曠古の大戦に勝ち抜くべく、最も眞劍の態度を持し、専ら戦争の經過に心を傾け、次々に發表せらるゝ大本營の公報、及び戦地にて實寫せる寫眞等に重點を置くことゝて、勢ひ平和的讀み物の閑却せられしは、深く怪むに足らず、「少年世界」の如きも、連月其の發行部數の低下を來し、同年秋季には、實に創刊以來の苦難に當面したに拘らず、敢然としてこれが難局の打開に精勵したのである。

暫く溯つてこれを見るに、本年度初刊の新年附録は、特に石版着色刷を利用して、「新案海戦將



棋」なる者を提供した。即ち紙面を大海洋に見立て、一隅に戦艦、巡洋艦、水雷艇等の駒を配して任意に切抜かせ、艦艇それらの性能に應じて、東西兩方面に分ち、一定の約束の下に進退し、以て勝敗を決する仕組とし

た。蓋し此の當時日露兩國間に、大海戦の起るべきを豫想せる結果、かゝる軍國遊戯を考案したのである。



大勝利表紙(小波筆)

また例の定期増刊は、春季發行の分を「満十歳」とし、前年度投票に依つて決定したる十名の作家と、十名の畫家とにより、各其の種目を異にせる十篇の記事を掲げ、次で戦時に對應して、「露西亞征伐」「大勝利」「金鶏動章」の三種目を選び、以て大戦の記念たらしめた。随つてこれが内容は専ら戦争實記、軍人美談、並に戦争に因める小説雜錄の類を以てし、全誌隈なく武装せるも、而も

殊更とり立て、記す程の特色は一も見られなかつた。只右の内の「大勝利」の表紙畫は、當時畫筆に精進せる小波自らこれを揮毫せる點に、讀者の好奇心を集め得たかと想はれる。



少年世界第十卷表紙

かくて苦難憂鬱の裡に第十卷を送り、新たに第十一卷を迎ふると共に、漸く希望ある新天地に處し、誌面にも著しく平和色を濃厚ならしめ愈々筆視を新たにして、其の内外を整備した。即ち先づ表紙畫には、室内に於ける少年勉學の光景を現し(後半期より野外採集の圖案に改む)て大いに趣味を豊ならしめ、目次をば新たに見開き二頁としてこれを二色刷としたるは、正しく一新例といふべく、これは後年各種の少年雜誌にも遍く應用せられて今日に至つて居る。

更に彩色口繪の二枚大も、これを分ちて全然圖様の異なる二面とし、一を「新撰少年畫曆」と題



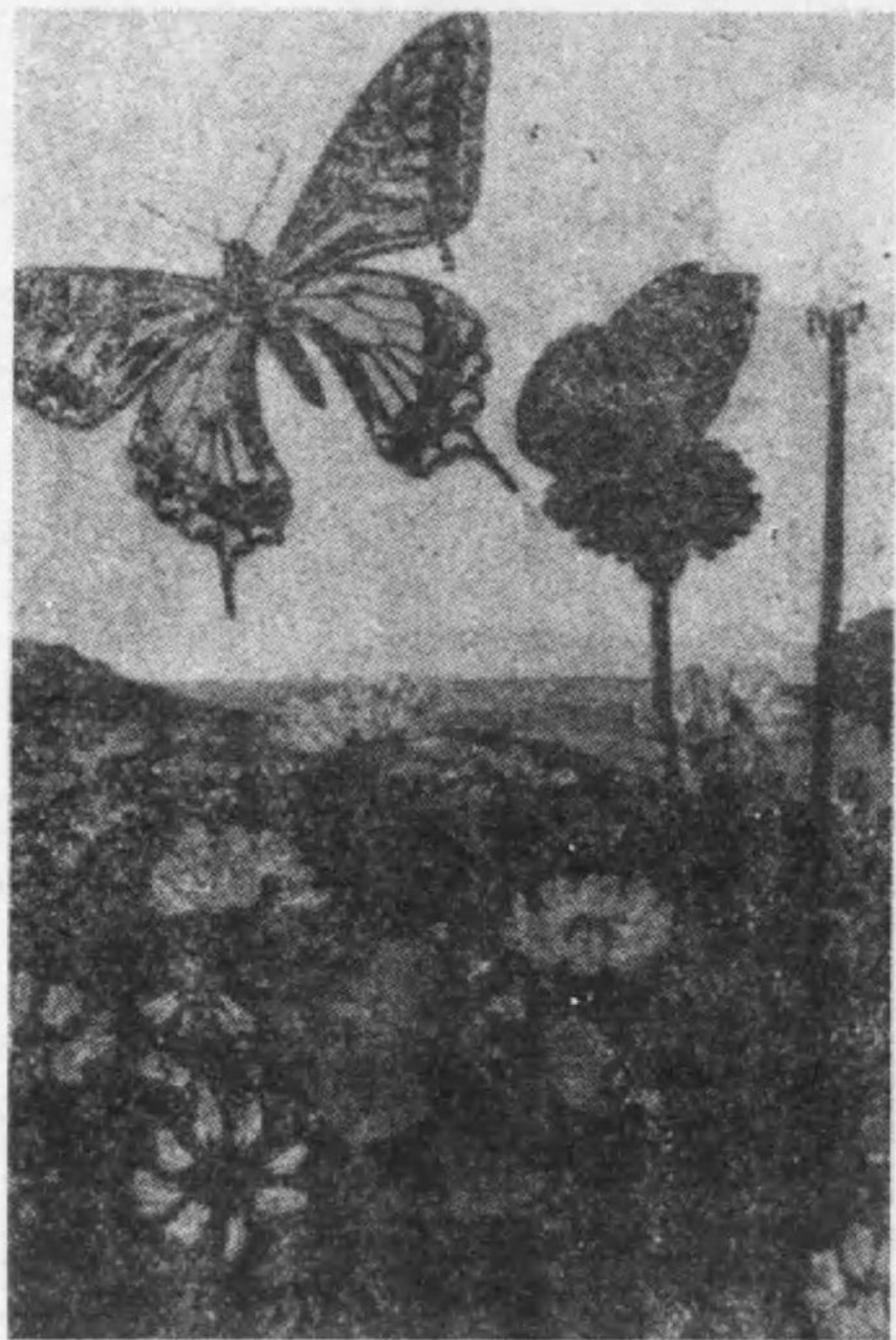
して毎號其の筆者を變へ、他の一を「動物標本畫譜」と題して、斯道の第一人者西野猪久馬に依頼した。蓋し「少年世界」は、これまでも和田英作、北蓮藏、武内桂舟等、和洋筆者を別にして、或は西洋木版に、又は彩色石版に、再三此の種の標本畫を連載して、其の特色としたのであるが、これ等は固より純粹の動物畫家ではなく、未だ完全に固有の生態を寫し得ぬ憾みがあつた。

然るに西野猪久馬は、當時理科大学に職を奉じ、専門大家の實地指導の下に、動植物の生態寫生に全力を傾けつゝある人として、標本畫家としては、他に比肩すべき者なく、極めて緻密の筆致を以て、最も正確に、且最も美麗に、禽獸蟲魚の形態を捉へ、それらの時季に應じて、樹石草花等を配置し、宛然生けるが如くに描出せる點は、確かに一大特色として注目せられた。

かゝる外装の下に、又其の内容に於ても、廣く各部門の博士大家の寄稿を求め、從來の小説雜錄類を減少して、専ら常識的記事を充たし、學問修養の方面に重きを置いた。されば亦定期増刊も、改正せる普通號の主旨に従ひ、「春の世界」、「夏の世界」、「秋の世界」、「冬の世界」に區別し、各季節に依る自然現象、及び一般學科を統合して、全部編輯部にて執筆し、主筆小波も新しく「少年歌劇」の創作を試み、各増刊の卷頭四十頁内外を費して、「笑い山」、「五光の瀧」、「白玉野」、「落葉の宮」など、何れも高雅なる韻文を混へて特殊の異彩を放たせ、茲に漸く前年度の苦境を脱し、明朝の天地を勇敢に進み得たのである。

こゝに此の新作歌劇「笑い山」の冒頭の一節を抽いて、其の作風を窺ひ見よう。

山麓の冬木立。本舞臺一面枯木の林、その木立を透いて向ふに山の見える書割、頂上にわまだ



西野猪久馬の標本畫

雪のある體、上手、山、下手、野えつゞく道、枯れたまゝの小草、處々に捨石を置く。凡て山の麓の冬景色。

此所に雪、霜兩名立ち掛り居る。

雪、霜合唱

露凝つて成りし霜。

雨凝つて成りし雪。

霜に葉落とす力あり。

見よ木々の素枯れしわ。

されどわが爲ならず。

雪に枝折る力あり。

皆霜雪のしわざなり。

冬の御神の御心ぞ。



落ちし葉よ我な恨みそ。 枯れし枝我な呪いそ。  
時來なば蘇生える。 その木々に引かえて。

今ぞ時來りしか？。

霜雪の解けん時。

我等わたく疲れたり。

我等わたく疲れたり。

(霜) なんと雪の兄さん！ お前わこの冬の間に、高が二度か三度しか降らないのだから、それほどでもあるまいが、私は紅葉の染まない前から、毎朝缺かさず降り通して來たんだもの、ほんとにすつかり、草臥れてしまった。  
と、疲れた體に云う。雪わ點頭きながら、

(雪) それわお前も草臥れたろうが、私だつて決して樂ぢやア無かつた。成る程お前の云う通り私の降るのわ二度か三度だが、その代り一旦降つたとなれば、お前の様に直きにわ歸らず、早くも半日、長くわ三日や一週間わ、ちつと解けずに踏みこたえて居るのだから、その又骨の折れることゝ云つたら、お前なんぞにやア眞似も出來やしない。

(霜) そう聞きやアそうかも知れないが、何にしてもこう草臥れちやア、もう地を荒らす元氣も無いから、早く歸つて休み度いねエ。

(雪) 私もそう思うが、まだ冬の神様が、此所をお立ちなさらない中わ、滅多に歸る譯にも行く

まし。

(霜) ア、そうか、そんなら暫く此所で休もう。

(雪) それがよい、くくく！

と、此所で二人わ、各自石に腰を据える。此時木の枝に聲あつて、

風の歌

ヒユウツ！ ヒユウツ！ ゴウくくく。

ソレ飛べ木の實！ ソレ散れ木の葉！

高い枝はヘシ折るぞ！ 細い幹わおし曲げろ！

ヒユウツ！ ヒユウツ！ ゴウくくく。

と云う歌が聞える。

(雪) オ、風さんが來なすつた様だ。

(霜) 道理で林が泣くと思つた。

と、云う所え、木の枝の間から、風ヒラリと下りて來る。

(風) やア、誰かと思やア雪さん霜さん！ そんな所に何をして居るんだ！

(雪) 冬の神様の御歸りも、もう間もあるまいと思つて、此所でお待ち申して居るのさ。



(風) オ、冬の神様なら、もう直き此所をお通りになるので、私はその先觸に來たんだ。

(霜) そんならあの冬の神様も、やがてお歸りなさるのか、やれ／＼それで安心した。

と、霜は嬉しそうに前を出て、風に向い、

(霜) だが風さん！ お前さんもさぞ草臥れましたらうねエ。

(風) なアに、私なんざア、日に十里や二十里駈けても、ちつとも草臥れたと思やアしない。吹けと云うなら今からだつて、こゝら一番吹き荒らして見せうか！

(雪) イヤ、それにやア及ばない、この通りもう森も林も、みんなお前さんが吹き荒らして、枯葉一枚ありやアしない。

(霜) だが流石の風さんも、松や杉にやア仕様がなないと見えて、あれ／＼向うの山の峽に、眞黒になつて茂つてる。

(風) ウン、あいつアいくら吹き立つても、ビクともしない強情な奴さ。

(霜) ほんとにあの松杉にやア、私もひどい目に會ひましたよ。

霜歌

何でも枯らしてやろうと思や。 彼奴め尖つた葉を振り立てよ。

チクリ／＼と目を刺しくさる。 彼奴を痛めるそれより先に。

此方が痛くてたまらない。

と、云うと風わ、それを引取つて、

風歌

それを思やア可愛い紅葉！ 霜で眞赤に染まつた所。

私が出かけて一吹き吹けば、 ヒラリ／＼と舞うてわ飛ぶよ。」

あんなきれいな事わない。

と、うたう。それを聞いて又雪も、

雪歌

そんな事より吹雪がきれい。 お前風横から吹いて。

地にも着かせず私を舞わしや。 梅か櫻か吹雪わ花よ。

とんなきれいな物わない。

と、三人漸く浮かれ出す。所へ冬の神、忽然として現れ、中央にスツクと立つて、

冬の神歌

「やおれ雪霜なに舞うぞ。 やおれ風なに歌う。

今や時なりわれ冬の神。 永く守りしこの地を棄てよ。

戦時の「少年世界」



遠く歸らんふるさとに。

しばし眠らん我家に」

「いかに雪霜はや降るな。

日影うらゝに照りそめぬ。

今や時なり彼れ春の神。

やおら其夢ゆり覺まされて。

近く來らんこの里に。

來てや守らん木や草を」

「いかに風はや吹くな。

東風は長閑に吹きそめぬ。

今や時なり彼れ春の神。

我に代りて此世を占めん。

さらば急がんと冬神。

いざや退らん冬物の。

と、やゝ疲れたる體に歌う。雪、霜、風、皆々平伏して聞き、やがてまた頭をあげて、

(雪) さては冬の神様も、もはや御立でござりまするか。

(霜) 私共も先程から、實はお待ち申して居りました。

(冬神) オ、大儀々々！ 其方達もさぞ草臥れたであらうなア。

(雪) 私共より貴君様こそ、昨年來の御心勞、定めし御疲れでござりましたろう。

(冬神) イヤ、それと云うも其方達が、よく精出して降つてくれたので、大きに私の顔も立つたと云うものぢや、時に風！

(風) はッ！ (下略)

なほ此の年八月一日には、東郷大將の戦功を感謝し、「記念品を贈る檄」を發表して、冷く讀者に喚びかけ、これが基金募集に着手した事は、最も機宜を得たるものと想はれた。次に其の檄文の全章を掲げよう。

願れば、去歳日露の戦端渤海灣頭の第一砲に轟きし以來、旅順に、黄海に、日本海に、或は敵艦を撃沈し、或は水雷の夜襲を決行し、或は驅逐艦の猛撃となり、港口の封鎖となりて、遂に敵の第一東洋艦隊の全部を擧げて之を撃滅し、更に其第二第三兩派遣艦隊をも、亦一擧にして滅盡せしむ。茲に於てか日本帝國の威名烈々として五大洲裡に鳴り、太平洋上に、日本海々面に、亦一隻の敵艦を留めざるに至る。嗚呼この光輝燦爛たる聯合大艦隊に司令長官たる者、實に我東郷大將にあらすや。日本國民たるもの誰か亦大將の偉勳に對し、一片感謝の誠意なきを得んや。即ち敢て親愛なる少年諸君に謀り、日東帝國少年の赤誠を、大將の膝下に致さんと欲す、希くは諸君、左記規定の下に來り投ぜよ。

日本全國少年世界愛讀者の誠意に成りたる記念品を東郷大將に贈るにつき、一人一口五錢以内の金額を出すこと、一人一口五錢以内に限るも、團體なれば此の限に非ず。出金者の姓名は本誌上に披露し、記念品と共に其名簿を大將に献す。出金者は少年世界御中と記し、別に記念品係の文字を明記すること。出金は切手代用苦しからず。切は九月三十日までとす。



と云ふ如く、僅かに二ヶ月の短時日を限りて、其の募集を締切ることとした。然るに此の舉一度發表するや、果して天下の少年を驅つて感激の渦に卷込み、早くも發行の翌日より、近隣相率ゐて續々募に應じ來り、遠近響の應ずるが如く、終に豫定の切期日までには、九拾三圓十八錢を算するに至つた。而も此の金額は、一錢二錢といふ零細なる義金にして、悉く郵便切手を以てせることとて、これが收納計算には、少なからぬ手数を要し、不練の編輯者には相當の重責であつたが、集まるに委せて應募者の出金額、住所、姓名をば次々に清記して、尨大美麗なる帖とし、且不足額の一部分は、これを編輯部に於て補ひ、金壹百圓を以て金時計を購ひ、盤面の一部に其の由來を鏤刻し、芳名帖と共に、東郷大將に献じ、快く受納せられたるは、亦戰時に於ける「少年世界」の事業として記憶に存すべきであらう。

### 第十一節 「護國幼年會」其他

九州の人湯地丈雄は、憂國の至誠已み難く、「護國幼年會」を設立して、水雷艇献納の志願を發し、遍く全國の小學校を歴訪して、其の意の存する所を述べ、これが基金募集に着手したるは、恰も日露戰爭の最中であつた。

これより幾湯地は、九州千代の松原の勝地をトして、元寇記念碑を建て、龜山天皇の銅像を奉安して、大いに愛國精神を鼓吹したのであるが、更に其の第二期事業として、「護國幼年會」を創立し、幼年號の建造を思ひ立つに至つたのである。

「少年世界」が湯地の熱意に共鳴して、「護國幼年會」の設立主旨並に、其の現況を詳記し、これを誌上に發表して、天下少年の奮起を促すや、果然一大反響を喚び起し、加盟者逐日増加し、同會の將來は亦頗る洋々たるの觀があつた。

かくて「護國幼年會」の事業は、年と共に發展の一路を辿り、關東本部（愛知石川岐阜以東の地域）を東京麴町の國學院内に置き、また關西本部（福井滋賀三重以西の地域）を神戸楠公社内に設け、湯地は老軀に鞭ちて、全國小學校を巡廻し、専らこれが完成に向つて努力精進した。即ち其の主意書の一節には、

大日本護國幼年會は、帝國の前途を考へ、全國の子女に、幼年中より海防の精神を涵養し、貯蓄心を啓發せしめる爲め、毎月一錢を貯へ、郵便局へ共同貯金をなさしめ、特別取扱の認可を受け、嚴正の方法を以て、之を國家に貢獻し、特に水雷艇製造の至誠を貫くにあり、又之を保護獎勵せんが爲め、別に保護團を設け、其事務を取扱ひ、捐金を以て其經費に充てんとす、幸に篤志家の賛成を得て、此の美舉を成功せしめんことを希ふ。

と記してゐる。また主唱者湯地丈雄の經歷に關しても、大體次の如くに記されあるが、これに依



つて見るも、湯地の性行の一斑を略窺ひ知ることが出来る。

何事も、時節に依つて成就するもので、大日本護國幼年會の主唱者湯地丈雄氏は、去る明治十九年の頃より、是非とも我國民に、外寇の危難を忘れさせまいとて、元寇記念碑の建設の必要を唱へ、全國を説き廻り、時には、心無き輩から、狂人扱ひをされた事もあつたが、いかに笑はれても、嘲られても、斷乎として初志を變へすことなく、やがて三十七年には、龜山天皇の御像を頂ける見事な記念碑を築き上げた。翌三十八年には、露國のバルチック艦隊の全滅が、其御日通に當るのは、時節とは云ひ條、洵に愉快な事である。

然るに同氏は、豫て深く考慮する所があつた。それは何かといふに、天下の少年幼年に對して、大いに護國の精神を發揚させ、且貯蓄心を涵養するにあつた。偶々明治廿八年の夏の頃、筑前福岡の海岸に、一隻の水雷艇が來泊した時、沿岸に多數の少年幼年が群集して、これを見物してゐた。時に湯地は此等の兒童と種々の問答を試みた上、此の際日本全國の小學兒童が、毎月一錢づつ貯蓄をしたならば、水雷艇の一隻位は、何の苦勞もなく出来る。今日日本は澤山の軍艦や水雷艇を必要とする旨を力説して、大いに兒童達を感激させた。

かくて湯地の意見を聞いた兒童は、家に歸ると共に、此の事を父兄に語つたところ、父兄等も亦これに感じ、早速二十名の兒童が、二十錢を醸出し、これを共同貯金として、福岡郵便局に預入した。護國幼年會はかくして發足を見ることゝなつた。

それから年月を経て、明治三十二年、先年の兒童達も、もはや一ぱしの青年となつた頃、偶々新聞の報ずる所に依れば、米國の少年達が、それ〴〵應分の金を出し合つて、巨大なる軍艦を造つたといふ、驚くべき事實であつた。茲に於てか湯地は、もはや一刻の猶豫成り難しとばかり、いよ〴〵護國幼年會の基礎を鞏固にして全國的に勧誘することゝし、明治三十六年十二月には、逓信省令第五十六號を以て、規約貯金特別取扱の新規則が發表せられ、また三十八年には、共同貯金法の發布もありて、湯地の理想は、着々實現の歩武を進めたのである。

大日本護國幼年會貯金規約書

- 一、護國幼年會ハ、帝國同志ノ幼年ガ、常ニ父兄ノ訓ニ隨ヒ、儉約ヲ守リ、國防ノ精神ヲ顯スヲ以テ目的トス。
- 一、本會ハ、敵國外患、國家ノ非常ニ備フル爲メ、水雷艇ヲ製シ、貢獻スルヲ期ス。
- 一、會員ハ、中學小學ノ年齢者ヲ以テ通常會員トシ、以上ヲ以テ賛成員トス。
- 一、護國幼年協同貯金總代ヲ定メ、各會員ハ一人ニ付一ヶ月金壹錢宛ヲ貯ヘ、拾錢以上ニ至リ最寄ノ郵便局、若クハ郵便受取所ニ預ケ、總代人所持ノ通帳ニ記載方ヲ依頼スルモノトス。但會員父兄其他賛助員ハ、規定ノ金員以外ト雖モ妨ナシ。



一、前記ノ貯金ハ、水雷艇製造費用ニ充ツル場合ノ外ハ拂戻ヲナサマルモノトス。  
一、脱會者既納ノ貯金ハ、各自ニ返戻セザルモノトス。  
一、前記ノ時機、又ハ貯金額相當ノ目的ニ達シ、總代人ヨリ拂戻ヲ申出ル場合ニハ、別記ノ證明書ヲ與フルモノトス。但脱會者ニ對シテハ、脱會ノ證明ヲ與フルモノトス。  
證明。護國幼年會郵便貯金ヲ拂戻シ、之ヲ其筋へ献納スル時機相達シ候ニ付、總代人ハ貯金拂戻ノ手續ヲ爲スコトヲ證明ス。但此現金ハ大藏省ニ直納スルモノニ付郵便貯金通帳ト共ニ、大藏大臣ニテ現金受取得ベキ委任狀ヲ認メ、願書ヲ添ヘテ進達スルモノトス。  
と、大體右の如くに規定されており、特に全國郵便局とも、頗る緊密なる連絡を取り、一絲亂れぬ統制下に置かれた。蓋し此の當時日本全國の就學兒童數は、約五百七十二萬九百餘名と算せられこれに中學、女學生を加ふる時は、其の一隻の建造費二十萬圓を要する水雷艇を、一錢貯金に依つて、毎年三隻づつ造り出され、十年後には、優に三十隻に上せ得る勘定なれば、少くも十年間は獅子奮迅に努力精進しようといふのが、主唱者の熱烈なる存意であつた。併しながら、何分にも湯地は、當時既に六十餘歳の老境に在り、遺憾ながら其の成功を見ずして世を去つたが、彼の歿後には、いはゆる後援續かず、折角の此の事業も、果して如何なる經路を辿りしか、杳として聞く所なかつたのは、千秋の恨事といはざるを得ない。

又一方、小波門下の久留島武彦が、横濱市に於て、新たに「お伽俱樂部」なる一團體を創立し、小學兒童の爲めに、目に見る書物以外、耳に聴くところのお伽口演を以て一の新境地を開拓し、後の口演童話の基礎を樹立せることも、亦忘るべきではあるまい。

然るに「お伽俱樂部」は日を経、年を閲して、漸く鞏固なる地盤を築き、日露戰役後に入りて、著しき發展を遂げ、柳原義光伯を總裁に戴き、神田の青年會館等にて、隨時大會を催し、文學界は固より學界軍部の諸名士を招聘して、滿都の少年少女を娛ましめ、次で同名の雜誌をすら發行して遍く全國的に普及するに至り、お伽口演隆盛の時代を現出した。

かゝる趨勢なれば、各少年雜誌の間にも、特に「講演部」を設け、當該記者の外にそれぞれの辯舌爽かなる知名人に依頼し、時に或は幻燈、蓄音機の類を利用して、順次全國の都市を巡廻し、又は「讀者大會」の名の下に、其の雜誌の愛讀者を一堂内に會して、講演に、はた餘興に、一日の歡を盡したのであるが、歸する所、遠地に出張する關係にて、其の費用意外に嵩み、而も宣傳の效果比較的乏しく、實績顯著ならず、且は讀者の興味も亦次第にこれに遠ざかりし爲めか、數年の後には、漸次此の傾向は廢れ去つたのである。

## 第十二節 戦争と少年書類



十年前の日清戦争の際には、雑誌に「征清畫談」が出で、書籍には霞城山人の「少年の夢」や、落合直文の「皇國の光」の如き名著が、次々に現はれ、その他双六に、錦繪に、少年の注目を牽くべき者も少くなかつたが、今次の日露戦争には、先づ逸早く雑誌に「少年日露戦記」が創刊されて廣く天下少年の爲めに、赫々たる勝利の戦況を逐一報道した。

この雑誌は、例の江見水蔭社中の大澤天仙の主宰せるものにて、随つてこれが寄稿家も、亦江水社一門を主としたから、或意味よりいへば、十年前の「征清畫談」と、同一軌道を進るものとも見られよう。尤も時代の變遷と、讀者の階層とに由り、其の記述は専ら平易を旨とし、少年の名に背かぬものであつた。

これより曩大澤天仙は、秀英舎發行の「小學世界」を編輯して、少年間に多くの知己を有つてゐた。「小學世界」は、初め有地紫芳なる者の手に編輯せられ、其の形式菊判六十四頁の、可憐なる小雑誌であつたが、宣傳の巧妙なる爲めか、將た編輯の親切なる爲めか、一部少年間の愛好の中心となり、「少年世界」及び「少年界」に追隨して、可なりの信用を保ち、且相當の成果を挙げたものである。

然るに今度創刊せる「少年日露戦記」と、前年の「小學世界」とには、如何なる關係ありしか、其の點は明かでないが、或は其の變形ではなからうかとも想はれる。尤も日露戦記は、郁文舎の名に依つて發行せられた。



(筆洞古) 紙表記戰露日年少

さて「少年日露戦記」は、菊判四十八頁、毎月三回發行を以て、迅速に、且正確に海陸の戦報を發表するに努め、石版多色刷口繪一葉の外、寫眞版口繪二葉を添へ、本文は戦記、文叢雑誌の三欄に別たれ、戦記には、戦争の經過を平易詳密に報道し、文叢には、水蔭天仙等をはじめ、江水社同人並にこれに關連する作家を動員して、専ら戦争に因めるお伽噺小説、雜録等の筆を執らせ、

雜報欄には、簡單なる戦争の彙報、勇士の逸事等を採録し、他に四頁を割きて、讀者の文章、詩歌俳句の類を掲載した。

又此の雑誌は、時に應じて「ぬり繪」の課題を提出し、専門の畫家を審査員に擧げ、懸賞に依つ



て廣く喚びかけた。而もや、奇異に感ずるは、現在我經濟學者として知られる法學博士河合榮治郎が、ある時當選者の首位を占めたる一事である。



木版應用の一例

なほ此の當時は、「少年」の如き極美にして上品なる雑誌は別として、普通の更紙に依存する大部分の雑誌は、未だ其の本文記事中に、寫眞銅版の挿入を見ることなく、且先年來流行を極めたる西洋木版も、價格の不廉なると、彫版に時日を要する等の爲めに、今や全く廢れ去り、隨つて出征將校、又は戰死軍人の肖像を掲ぐるにも、總て實物寫眞を基として、似顔を描くの外なく、帝都にて一二を争ふ大新聞すら、悉く此の手段に依る有様であつた。

又一方、かの小栗栖香平の經營にかゝる兒童新聞は、「兒童教育」と改題して、相變らず毎月二回發行を繼續し、他に類なき、一家の見識を持して多數讀者を嚮導してゐた。然るに戰爭開始と同時に、全誌面を擧げて、表紙も口繪も記事も、悉く戰時色に塗り改め、殊に其の改卷第五期第一號（廿七年三月五日）の講堂欄には、主筆下山芳岳（彌三

郎、現平凡社々長）の名を著して、「こんどの戰爭」と題し、次の如き記事を掲げて少年を誡めたる如きは、流石に見上げたものである。

こんどの戰爭は、世界が始まつて以來の大戰爭です。殊に我國にとつては、立つか倒れるかとゆゑ大事な戰爭です。我國民は、大人も小兒も、男も女も、皆戰場に居る覺悟がなくてはなりません。

實際の戰爭は、兵士がやつてくれます。しかし、われ／＼は、國內に居つて、戰爭をするよゝな覺悟で、働かなくてはなりません。それには先づ誰もが、自分の務めを、一心にはげむのであります。農夫は農業を、商人は商業を、一心にはげむのです。皆さんは、學校のおけいことを、一心におはげみなさい。そしておけいこの暇には、手仕事を何なりとなさい。男の方は、わらじづくりでも、繩ないでも、なんでもなさい。女の方は、毛糸細工でも、お裁縫でも、なんでもなさい。決してうつかりして居つてはなりませんよ。

皆さん、軍人は、命をすて、戰場に臨んで居ますよ。皆さんも、戰場に臨んで居るよゝな考へで、自分の務めをおはげみなさい。

と、言々句々、切々として親が其の子を誨ふる如く説き、更にまた項を更めて、「むやみに喜び騒いではならぬ」と題して、再び同一主旨の下に、少年の心得べき條々を、繰返し強調して居る。



仁川の海戦にも、旅順の襲撃にも、我海軍は大勝利を得ました。けれども、まだ陸に於ては、これからどんな大激戦があるかも知れないのです。勝つたときいて見れば、それは誰だつて嬉しいです。愉快です。しかし嬉しさのあまり、あとさきの考へもなく、喜び騒ぐよーでは、決して大國民とは申されません。素より喜ぶのはよろしい、お喜びなさい、心でお喜びなさい、そして静かにおしまひの大勝利をお待ちなさい。何にしても、敵は我國の五十倍もあらうとゆー大國です、まだ決して安心は出来ません。勝つて兜の緒をしめなくてはなりません。

と、かやうに力説する所があつた。而も此の文句と此の意見とは、其のまゝに今日の大東亞戦下の少年の心得として毫も差支なく、いはゆる一億一心の熱意の必要を説示したるものである。それにして現代の少年雑誌記者に、此の意氣ありや、此の用意ありや。將たこの見識ありや。

却説、以上の外に、巖谷小波が、「少年日露戦史」全部十二冊の編纂に着手したるは、恰も三十七年六月、正に旅順背面攻撃の開始されんとする頃であつた。此の書は例の新國定教科書の形式に倣ひ、菊判百二十餘頁、切付背クロースを用ひて、其の外装は寧ろ甚だ堅實に、何等色彩の美を見なかつたが、これが記述は、最も正確を期し、且最も平易に、最も趣味多からしめ、戦功ある將士の肖像、有名なる軍艦、激戦場等の寫眞版四丁の外、各冊筆者を異にする十數面の大形木版挿畫を

加へ、一種の「征露畫談」とも稱すべき者であつた。

今、其の各冊の目次を掲ぐれば、開戦の巻。決死隊の巻。九連城の巻。南山の巻。得利寺の巻。摩天嶺の巻。大石橋の巻。黃海の巻。遼陽の巻。沙河の巻。旅順の巻。奉天の巻。日本海の巻。樺太の巻。凱旋の巻となつて居り、即ち開戦の劈頭より、戦鬪の順を逐うて筆を進め、加ふるに毎篇戦場の感激美談幾十章を添へ、三十七年二月より約一ケ年半に亘れる、此の曠古の大戦の眞面目を傳ふるに遺憾なからしめた。なほ此の叢書は、後年四六判全一冊の美本に纏められ、永く少年の机上を飾れるものである。

### 第十三節 「少年少女智識畫報」

國木田獨歩の經營せる近事畫報社（京橋區五郎兵衛町に在り、獨歩社の前身）が、明治三十八年九月一日を期して、新たに「少年智識畫報」と、「少女智識畫報」とを、同時に創刊したのは、正しく高級畫雜誌の先鞭を着けしものとして、注目すべき價値がある。

此の二種の雑誌は、殊更に他よりの寄稿を求めず、少年は専ら海賀變哲の手に依り、同じく少女は石井研堂の獨力編輯にかゝり、責任者の署名をも堂々と揭示してゐる。兩誌共に六丁十二面の石版畫と、これに相當する十二頁の解説とを以て本文とし、他に數頁を添加して、文苑、時報、懸賞



畫直し、又は畫探し等の新題を提出して、讀者との聯絡を緊密ならしむることに努めた。今試みに、石井研堂の編輯執筆せる「少女智識畫報」の一冊を見るに、其の第一頁には、緒言として次の如き簡單なる要領が掲げられる。

- 一、畫は面白いものです。畫で見たことは忘れぬものです。
  - 一、種々の有益な事柄を、畫で見ると、一生忘れずに居ります。
  - 一、此の畫報は、少女に有益な事柄ばかりを載せてあります。
  - 一、少女の智恵を増し、智識を啓くから、此の畫報を智識畫報と名づけました。
  - 一、つまらぬ畫を遊ぶより、此の畫報を見るのが利益です。
  - 一、又家庭にて、父母や兄弟たる人は、此の畫報の繪解を讀みて、折々子供に説いて聞かせる
- と、子供も悦び、其の智恵智識を増すこと受合ひです。

と、平易に要點を指摘して、此の雜誌の目的とする所を明かにしてゐる。記事の主なるものは、兩誌共に内外の歴史、人物、修身、動植物、傳説童話、遊戲、社會施設、時事などあらゆる方面に亘りて、常識涵養上有效と認むべき一切の事物を採入れ、少年は尾竹々坡、少女は尾竹國觀が、それ／＼専屬畫家として、得意の才筆を縦横ならしめた。

また解説は、四號活字二段組、一頁讀切として畫面に對向させ、畫は表四度刷、裏二度刷を用ひ

て、五彩絢爛の美を放たせ、而も一冊各拾錢を唱へたのは、斷じて高價とは認められぬ。

當時我國の上下は、恰も戦後の好況時代を迎へんとする時期であつたが、又一面東北地方は、氣候不順の爲め、近年稀なる凶作に見舞はれ、農民の困苦一方ならぬものがあり、隨つて此の兩雜誌は、これが救恤の一策として、次の如き手段を講じ、時報欄に於いて、廣く讀者に喚びかけた。

讀み古るしの教科書があつたら、一冊でも二冊でもいゝから、宮城縣下の哀れな少女に送つてお遣りなさい。手續は新聞に出てゐますから、御覽になれば直ぐわかる。宮城縣の凶作といつたら、實にひどい有様です。人の生命をつなぐ米とゆゝものが、全然出來ず、農民は乞食同様の姿に成つて、十何萬人とある少女少女は、學校へ行こゝにも、一冊の本を買ふ事さへ出來ないので。慈情ある畫報の讀者達は、此の哀れな朋友を救ふ爲めに、たとへ一冊でも二冊でも、表紙は破れても、中は汚れても、そんな事はかまいませんから、お所持の教科書を送つてお遣りなさい。どれほど喜ぶか知れません。本社に托してお送りになるなら、十五日（三十八年十二月）までに、畫報編輯所へあて、御届になれば、お取次をして上げましょ云々。これは寔に適切な措置であつたと思はれる。

次に本文の取材を検討するに、只歴史人物、理科博物等のみ偏することなく、各號ともに、内外最近の出來事をも織り交せて、いはゆる畫報としての使命を全うするに努めた。即ち其の一つと



見るべき、伊太利の大地震に就いて、これが認識を得せしめる爲め、畫面には、大建築物の破壊せる状況を示し、其の一隅に、伊太利の地圖、特に震災に襲はれたる地域を明かにし、左の如き解説を加へて、讀者の注意を促した。

新聞にて見れば、去る九月八日、伊太利國カラブリアに、珍らしき大地震あり、幾萬の死人、怪我人あり、村落悉く滅びて、其の跡を留めず、救済列車、赤十字社など、力を極めて、救護に従ひ居るといふ、その慘状思ひやらるゝなり。

伊太利は、地中海へ、長靴の形につき出でたる國にて、その爪さきの所に、シシリとゆう噴火山多き島あり、此の度の、震災甚しきカラブリアとゆう地は、圖に黒く示せる通り、國の南端なる、靴ならば趾おしゆびに當る部分なり。

伊太利より、わが日本までは、大約二千五百里あり、この隔りあるにも拘らず、伊太利の土地の震動の、わが國に波及——波及とは、水の面に石を投げつけし時、輪をなせる波の、四方に傳はり及ぶ如く廣がる事——するには、僅か十一分時間にて足るといふ。

と、平易なる文章體を以て記述し、飽くまで趣味と教養との兩方面より、讀者を誘導啓發するに努めたる點は、流石に多年「小國民」に鍛へし非凡の手腕と見るべきである。

猶ほ兩誌の畫面は、從來普通に行はれたる如き、一定の輪廓を附することなく、全紙面一杯に些

の隙間も餘白もなく刷出せることにて、其の畫の面積よりすれば、輪廓付の四六倍判圖と略同大にて、此の當時としては、これも亦一種の新様式に相違無く、殊に竹坡國觀兄弟が、互に腕を競うて



(筆觀國) 畫挿の報畫識智

細心緻密の筆致を旨とし、毛よりも細き描線を用ひたるに拘らず、巧妙なる製版技術と、親切なる印刷方法とに依りて、殆ど原畫の妙味を彷彿するに庶幾きものがあり、而してこれは日本橋榮光社（鐘ヶ江榮行）の細心努力に俟てるものである。

全なる兒童雜誌として、其の將來性あるを認められしも、未だ一般に普及するに至らず、又十分に其の特色を發揮するに至らずして、早く中止の運命に會したるは、或は時機尙早の結果なりしか、但は他に何等かの理由ありしか、兎も角も甚だ惜しいものであつた。



## 第十四節 少年文の傾向

短篇小説に、詩歌に、俚諺に、あらゆる文藝作品を募集して、讀者の趣味を誘發しつゝある萬朝報は、こゝ兩三年來更に其の一新企畫として、百字文なるものゝ募集を企て、これ亦相當の成績を収めた。百字文は、讀者の感想所見等を、百字以内の短文に綴り、完璧の一篇を成せるものにて、紙幅狭き萬朝報としては、當然往くべき途であつたと想はれる。

一方、少年雜誌が、字數制限の短文に着目したるは、既に久しき以前のことにて、即ち明治廿五年一月發行の小國民第四年一二號に亘りて、六號活字一行文「楠公の贊」を發表したるが、恐らく其の最初であつたかと思はれる。「楠公の贊」は頗る多數の應募者があり、其の優等作のみを、縣別に列ね、約四百名近く網羅した。尤もこれは最初より、一文三十五字を限定せるだけに、作者の苦心は亦尋常一様ならぬ者があつた。

嗚呼公ヤ智謀卓絶身ヲ國家ニ致シ獨節ヲ守テ湊川ニ斃ル水公ノ建碑偶然ニ非ズ。

淺草 佐和田 一雄

孤軍錦旗ヲ奉ジ時到ラズ順ニ斃ル嗚呼湊水洞ル、ト雖芳名ハ赫々青史ニ流レン。

水戸 樂山 居士

嗚呼盛ナルカナ楠公其才ハ張良ヲ壓シ其智ハ諸葛亮ヲ蔑ニス忠武公千載ノ一人。

滋賀 黒田 直道

俯仰天地ニ耻チザル日本魂ノ特色ヲ發揮シタルモノハ千古唯ダ公一人アルノミ。

大阪 廣澤 元次郎

右の黒田直道は後の湖山である。而もこれ以後、此の種の計畫は、一時中絶せられしが偶々萬朝報の百字文に刺戟せられ、「少年世界」は、第十卷に入ると共に、屢々課題を提出して短文を募り、嚴選してこれを六號三段組とし、各定期増刊の末尾十數頁を割いて發表した。蓋し普通號の投書文に較べ、其の面目を異にせるのみならず、從來の長篇投書文は、これを誌上に掲載し得るもの甚だ稀少にて、折角苦心の優等作も、暗から暗に葬られ去る者多く、選抜に當る記者としても、心中忍び難きものあり、時には、「餘白なくして掲載し難き分」と題し、單に文題と作者名とを、誌隅に掲げて、辛くも投書家の熱意に酬いるが如き状態であつた。

かうした見地よりすれば、短文は其の字數少き爲め、一頁の中優に、十數名の作品を收容し得られ、随つて著しく落伍の率を減じ、且讀者の満足も推して知るべく、世にいふ一石二鳥の利もあり、後年に至るまで屢々短文を募集發表して、全般的に慶を頒つことに努めたのである。

さて少年文の傾向は、既に明治卅六年の頃より、可なりの變化を呈し來つた。例へばかの堂々た



る名論卓説は、次第に其の影を潜め、これに代つて主座を占めたるは、大部分が日常の行爲、觸目の感想等を、率直に、有りのまゝに、飾らず偽らず、いかにも少年らしき筆致を以て、何等の滯滞もなく、自由に、奔放に描寫するといふ傾向のものであつた。

勿論これは當該雜誌記者の意圖によりて、誘致せられたる新傾向には相違なきも、儘かに少年文の一大進歩と云はなければならぬ。即ちこれを顧ふに、初期時代の少年文は、或は「友人の東都に遊學するを送る」とか、若しくは「禁酒禁煙論」とか、又は「月下舟遊の記」とか、「雪中登山の記」とか、殆ど其の總てと云つても可い程に、「記事論説文範」等の模倣か焼直しかに過ぎず、而も少年文といへば、かゝる形式を具備するの要ありとさへ思はれ、滔々として一世を風靡したのであるが、其の内容は、千篇一律の常套文字を以て充たされ、何等の新味もなく、又何等の獨創をも認められなかつた。

かくして時代を經過するにつれ、幾分づつの変化と進歩とを辿り、やがて其の文體には、文章軌範式の漢文口調や、或は平家物語徒然草式の國文を主としたる雅俗折衷體の者も、又次第に影うすれて、遂には専ら言文一致體のみに依ることとなり、隨つて其の文題に於ても、「春の小川」「山遊び」「草刈り」「鮒つり」と云ふ如く、何れも着實純眞なる少年の日常を、意のままに現はせるもので、此の風潮は最も永く續けられて今日に及んでゐる。

一方、「少年世界」は、第九卷末（三十六年）初日の出の課題を提出して、いはゆる短文を募集し、此の結果を第十卷一號に發表してゐる。而して其の収容量は、約六十篇の多きに上り、平常號の數倍の人員に對して満足を與へた。今其の中より、北海道の中村武羅夫（後の新潮主筆）の一文を轉載して見よう。

「アーきれいだこと」と、僕は思はず叫んだ、初めは紫の雲が棚引いてゐたが、次にはそれが次第々々に赤くなつて、明治三十七年の初日は、今地平線から半分ばかり顔を出してゐる。それが靜かな風に吹かれて、小波を立てゝゐる海面にうつり、さながら金の波のやうである。

かういつた調子に書かれてゐる。素より來年の初日の出を想像して作爲せることでもあり、未だ必ずしも短文としての堂に入つたものとは思はれないが、これを數年前の文體に比較すれば、著しく新味の掬すべきものあるは、亦疑ひなき所であらう。

次でまた同年第六號には、「征露短文傳書鳩」なる新題を課して、専ら戰爭に關する感想を募集し、これを短文の第二回目として發表してゐる。今この中から、福岡の森山武市郎（法學博士司法省保護局長）の一篇を抽いて見よう。

兇惡極まるロシア、亂暴極まる露國に對して、嬉しや宣戰の大詔が下つた。ロシア兵を滿洲から逐出し、シベリヤを跋渉し、東洋艦隊を海の藻屑となし、烏拉爾山を踏越し、スラヴの都聖



彼得堡を乗取り、雪の如く積りに積つた怨を、一時に晴らすは今である、愉快々々！

と、少年らしい敵愾の精神を横溢させてゐる。此の他京都の生田調介（歌人、蝶介）、岩代の山内千代吉（童話作家、秋生）、秋田の飯塚哲英（中央佛教主筆）、姫路の小倉鏗爾（著述家）、千葉の尾張真之介（歌人、穂草）等は、此の短文投書家の常連であつた。

元來、普通文の投書には、相當に煩はしき規則を設けたもので、例へば用紙は半紙に限り、文題の下には住所姓名、學校名生年月を記せとか、又は字數は十行二十四字詰、楷書にて明瞭に認むること等々、種々の拘束があるだけに、初心の投書家達の、疑問の點を質問して來れる者が、記者の机上に山積する有様にて、双方共に可なり惱まされた。ところが短文の投書にありては、其の性質上、必ずしも嚴正なる投書規則に依ることなく、すべて一葉の葉書を以て代用させ、延いて選者の手數も亦大いに省かれたのである。

### 第十五節 挿畫々家の變遷

日露戰爭を一期として、少年雜誌界の挿畫には、著しき變化を及ぼしたことを忘れてはならぬ。即ち從來最も多く利用せられたる生巧館の西洋木版は、全然時代不適の者となりて影を沒し、これに代つて勃興し來れるものは、寫眞銅版並に亞鉛凸版であつた。

元來、西洋木版なる者は、これが彫成に可なりの時日と手數とを要し、且其の彫刻料も、寫眞銅版及び亞鉛凸版の類に比して、數倍乃至十數倍の高價を稱へしことゝ、なほ雜誌の印刷方法が、次第に平臺より輪轉に變じ、隨つて緻密なる線を以てするよりも、粗大なる描線を使用して其の効果を多からしめんとするのが、西洋木版の衰退を促したる主なる一因と見るべきであらう。

然るに又これに伴ひ、日本畫家に依れる木版も、年を逐うて、衰微の兆を現し、遂には一流畫家の精妙なる挿畫も、一流彫刻家の手腕に成れる和木版も、全く一掃せられるに至り、これに取つて代れるが、新進洋畫家のペン畫を主とするものにて、而も時代の要求は、舊形式の日本畫よりも、寧ろ此の洋畫の新味を歓迎したかに想はれる。

勿論日本畫が廢れて、洋畫の勃興せる理由は、薄美濃を材料として描かれたる日本畫の洗鍊せる筆致は、亞鉛凸版に製し難く、強ひてこれを畫洋紙に糊着して、亞鉛版に寫し得るとしても、甚だしく印象の不明瞭を來し、爲めに其の効果十分ならず、猶ほ亦其の版下を、一々木版師に託して彫成せしむるが如きは、徒らに時日を遷延して火急の間に合はず、且其の彫刻料も不廉にして、亞鉛凸版の速成と廉價なるとに徴せば、今更かゝる舊形式を逐ふ要なしと見るは、亦當然の變遷といふべく、茲に我國雜誌界の挿畫は、次第に木版より金屬版に化し、手工業より器械工業に轉化するこゝとなつたのである。



されば此の際、過去を顧みて、各雑誌圖書の爲めに、其の麗筆を揮ひたる日本畫家の功績を追想するも、敢て無用の業ではあるまい。

既に前巻にも記せる如く、少年雑誌の挿畫畫家として、最も早く、最も廣く利用せられし人は、田井月耕であつた。彼の門には、耕一其の他の弟子あり、師弟共に非凡の手腕を縦横ならしめ、歴史に風俗に、見るべきもの少なからず、「小國民」も「幼年雑誌」も、他の片々たる小雑誌や、小圖書も、殆ど期したるが如くに、月耕一門に其の挿畫を依頼した。謂ふに月耕の時代は、僅々一兩年に過ぎざりしとは云へ、少年雑誌挿畫の草分として、其の名譽を傳ふべきであらう。

月耕と時を同じうして出現したるは小林清親であつた。清親は、日本畫と洋畫との長所を捉へ、巧みにこれを渾一したるのみならず、其の筆致頗る奔放に、いはゆる健筆縱横の感があり、名所風景、歴史人物、動物植物、現代風俗、漫畫（ボンチ畫）等、往く所として可ならぬは無く、名聲一世に鳴り、入門の弟子も亦多く、就中其の高足田口米作の如きは、能く師の筆意を會得し、漫畫界の一異彩として知られた。

清親と其の一黨とは、當時有名なりし團々珍聞に據りて、時事漫畫に奇想を凝らし、更に餘力を割きて少年雑誌にも筆を執り、恰も明治廿二三年の頃より先づ「小國民」「少年文武」、次で「幼年雑誌」といふ順序を逐ひ、就中「小國民」の如きは、創刊後二ヶ月にして、早く此の人を起用し、

後には全紙面を舉げて、其の手腕を發揮せしめた。而して少年投書欄に點綴せる連続漫畫と、西洋木版に依る大形の日本風景畫とは、蓋し此の人の獨特の壇場とせられた。



清親の挿畫（内海刀とあり）

併しながら清親も、又兩三年を出でずして、其の筆致漸く粗笨に傾き、漸次少年雑誌界より遠ざかりて、専ら錦繪界に手腕を發揮した。即ち日清戦争を主題としたる百戰百勝（百選百笑）の大漫畫の如きは、其の名の如く百種百態の意匠を凝らし、構想の輕妙にして筆

勢の自在なる、眞に驚歎に値すべきものあり、現に錦繪界の珍品として、一部好事家間に愛玩せられる。又これと趣を異にせる者に、金港堂發行修身入門書の掛圖に、謹嚴なる筆致を以て、數十葉の大枚彩色畫を揮毫し、精密なる木版印刷を以て現はしたるは、斯人の名聲を高揚するに與つて力



ありしものと想はれる。

さて清親の後を受けて、少年雑誌界に登場したるは、富岡永洗、武内桂舟、水野年方、少し遅れて小堀鞆音、梶田半古等であつた。こゝに於てか、少年雑誌の挿畫界は、正に八千草咲き亂れて妍を競ふの美觀を呈現し來つた。蓋し各時代を通じて、此の時節ばかり、挿畫界の華かに賑かなりしは、前にも後にも比すべきものなく、而もこれは明治二十五六年頃より、三十四五年頃に至るまで約十年間に及んでゐる。

富岡永洗は、小林永濯の門に學び、歴史畫及び現代風俗畫を得意とした。最も雄勁にして且頗る細密なる筆致を以て知られ、各雑誌圖書の表紙、口繪、挿畫等にも、殆ど永洗の名を見ぬは無く、殊にかの「少年文學」の裝幀、挿畫の如きは、永洗桂舟兩者の手腕に負ふ所最も多く、「小國民」も其の四五年度は、永洗及び社中同人に依つて、挿畫を分擔せしめ、多大の好評を博した。

永洗の高名を慕つて、其の門に集る青年も亦少なからず、いはゆる多士濟々の觀があつた。即ち永年、洗耳、苔石（後の大羽）、洗圭（後の春汀）、洗鱗、如洗、洗嬰、洗馬、永曉、洗嵐、洗石など、擧げ來れば正に十指に充つる者あり、而もこれ等社中の同人は、多くは師の庇護の下に、各少年雑誌に筆を執り、それ／＼に評判を贏ち得たものである。

また武内桂舟に至りては、既に屢記せる所の如く、はじめは歴史風俗畫の方面に、其の主力を注ぎ、次で「少年文學」の出づるに及び、漣山人の「こがね丸」以下、硯友社員の創作に對する挿畫の方面を擔當し、漸次其の手腕を研磨し來り、遂に斯界の第一人者を以て目せらるゝに至つた。

桂舟は曾て「小國民」の爲めにも、口繪挿畫を描き、精密なる筆致を認められたが、已にして「少年世界」の出づるに及び、迎へられてこれが繪畫主任となり、其の高足中川葦舟と共に、獨特の手腕を發揮し、かくて同雜誌第一卷より第十三卷まで、約二百數十冊に及びて殆ど一回の休止もなく、連續事に當つたのである。

只此の間、「幼年世界」第一卷十號（三十三年九月、三匹猿）に限り、桂舟は其の身邊に已み難き事情ありて、執筆不能に至りし爲め、代つて中村不折にこれを描かせた。不折は此の當時、一般諸雜誌面に雪舟張の小間畫を發表して、可なりの歡迎を受け、其の他幼少年用の歴史、傳記書類、例へば「世界歴史譚」、「少年讀本」等に於て、縦横に其の天分を驅使して居る。併し不折が、幼年向の小波お伽噺に筆を執れるは、天にも地にもこれが始めてあり、又終りであつたかと想はれる。

即ち此の畫を、桂舟の想像畫に對比すれば、和洋行く所を異にせる關係もあらう、其の人物の姿勢等には遺憾なしとするも、想像を本位とする小波お伽噺の挿畫としては、甚だしく趣味に缺け、未だ渾然一致の妙諦を取得するに至らなかつた。勿論これを不折の筆に望むは、當を得ないであらうが、兎も角も餅屋は餅屋といふ譬は争ひ難い所であらう。蓋し桂舟が、小波お伽噺に對する挿畫



の筆者に任じ、十餘年の久しき、斷乎として第一學を守り、何人にも一指を染めさせなかつた裏面には、又其の研鑽刻苦の勞の、尋常一様ならぬ者のありしことを知らねばならぬ。

桂舟の門下、即ち桂影社中に屬する同人

は、亦永洗社中に譲らぬ濟々たる多數の風

雛麟兒を抱含した。曰く一舟、曰く古洞、

曰く葦舟、曉舟、玉桂、沖舟、春帆、桃舟、

英舟、竹舟等々、而してかの永洗社中の同人が、

大部分洗の一字を冠したる如く、桂影社中の人々は、舟

の一字を受けて世に立つた。殊に永洗社中の宮川洗主も、

師の歿後、桂舟の才能を慕ひ、此の社中に馳せ參するに至り、

鬱然として挿畫界に雄視したるが、併しかく多士を擁しながらも、

眞に桂舟の衣鉢を紹ぐに足る程のお伽噺畫家の、遂に一人も出現しな

かつたのは何故であらうか。即ちこれを惟ふに、漣門下より高名あるお伽

作家の出でざりしと同様、其の師の天才と能力と精勵とに追隨し得る程の者の、



絶無に等しき状態なりし爲か、否か。

猶ほ右の二者に較ぶれば、水野年方の門よりは、亦屈指の俊才輩出

して、而も師名を高からしめた。元來年方は、桂舟と同門の間柄に在

り、大蘇芳年の秘藏弟子にて、其の最も得意とする所は、歴史畫と現

代風俗畫とにあるもの、如く、「少年世界」にも、時々其の才筆を振つ

て細密且雄勁の手腕を發揮した。天性頗る温

厚の君子人にて、殊に門生を指導するに、到

れり盡せりの情誼を以てし、寛嚴時に應じた

る結果、師風著しく學がり、此の門よりは、高名

の畫家が響を並べて輩出したのである。

即ち寛方、清方、輝方等をはじめ、靜方、康方、光方等々、又

女流には、蕉園あり、蕉華あり、秀方あり、何れも版畫界のみならず

日本畫壇一方の雄として知られ、今日老大家を以て第一流に推さるゝ人々あるは、蓋し年方の人格

の然らしめし所ではあるまいか。

以上永洗といひ、桂舟といひ、又年方といひ、共に浮世繪の畑より發足たる人々だけに、いはゆ





る版下畫の技巧に關しては、既に十分なる認識と經驗とを有し、刻師刷師との聯絡もあり、隨つて出版界に重要視せられた。然るに小堀鞆音に至りては、常に絹面にのみ親しみ、純粹の大和繪を奉じて立てる人なれば、其の名聲の高きに拘らず、少年向の版下畫には、全く經驗なきも、一度斯界に臨むや、最も手数を要する武具甲冑の類をも、各時代々々に應じて、さながら物を囊中に探るが如く、易々として而も克明に描寫し、且其の故實の正しきこと、到底浮世繪畫家の模倣追隨し難き別天地を翔飛した。而して鞆音の天分を逸早く利用して、雜誌界に特色を放たせたるは、學齡館の「小國民」にて、次で「少年世界」をはじめ、其の他の少年用歴史書類にも、亦正確無比の多くの挿畫を發表して、其の名聲を坊間に高からしめた。

此の鞆音の門に出でたる安田靉彦、及び尾竹國觀、小山榮達等は、革丙社中出藍の譽ある人々にて、而も共に挿畫界に馳驅する一方、日本畫壇の雄として、我國の美術界に貢獻し、以てよく師名を辱めなかつたことは、亦偉とするに足るであらう。

次に梶田半古は、もと松本楓湖の門に出でたる人、楓湖は宮内省藏版の「幼學綱要」に、其の全部の挿畫を描き、殆く全國的に知らるゝ歴史畫の名手である。半古が、小堀鞆音の後を享けて「小國民」の挿畫を擔當したるは、恰も日清戰爭の酬なる頃であつた。元々此の人の筆意には、一種奇妙の癖も見られたが、よく師の手法を踏襲して、別に一新機軸を出し、傳彩に妙を得たることは、

又其の特色の一に擧ぐべきであらう。猶ほ半古の門に出でたる古平、青邨、古崖、古城等は、最も世間的に知られ、或は人物風俗畫に、若しくは歴史畫に、出版物以外にも高名を馳せた。

以上を外にして、寺崎廣

業、小林永興、三島蕉窓、

久保田米僊、同金仙、藤島

華仙、島崎柳塙、永峰秀湖

等は、斷續的に圖書雜誌に

執筆したるも、其の大部分

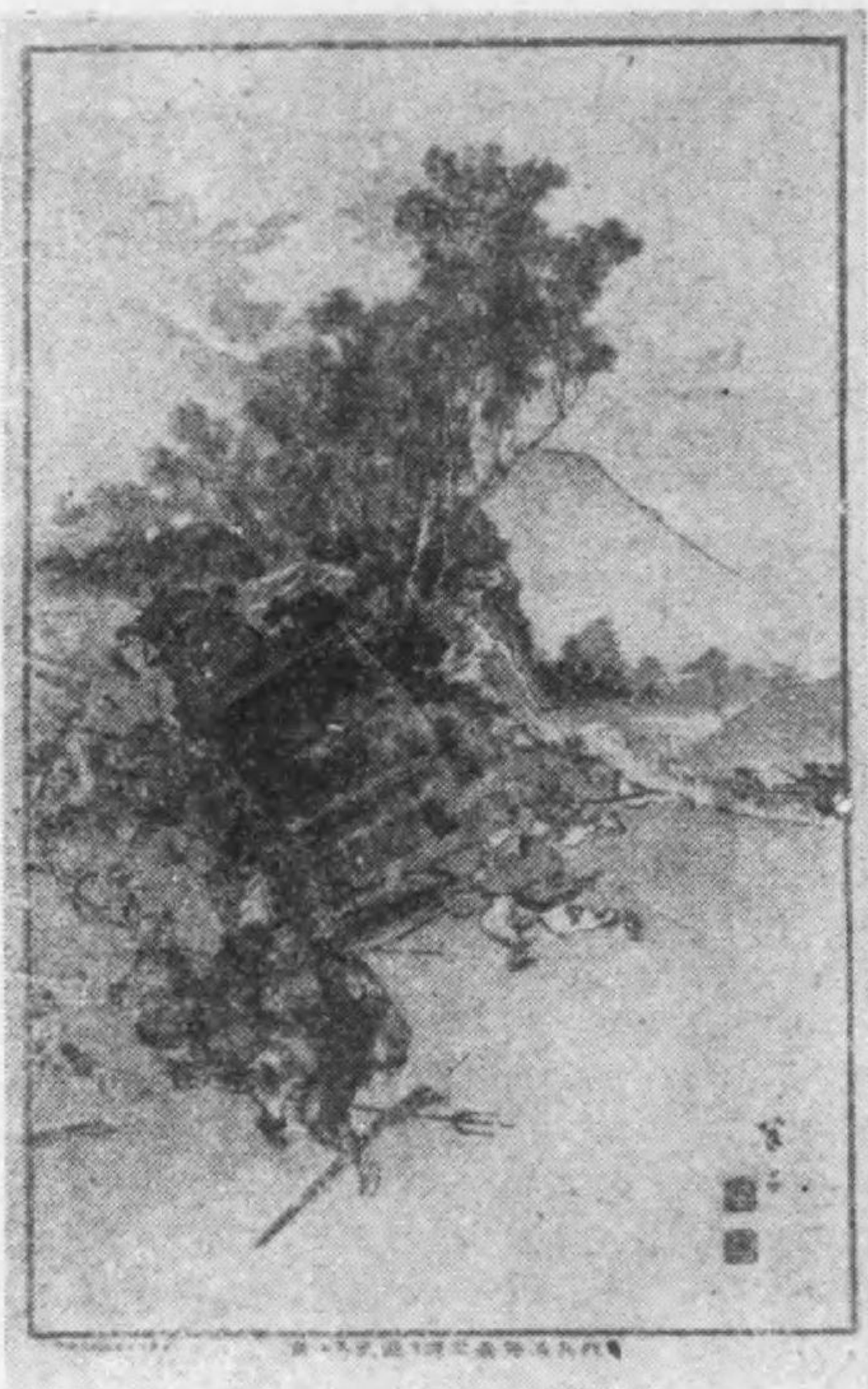
は少年讀者に親炙する程度

にまでは至らなかつたと思

はれる。

次に洋畫界の状態を一瞥

するに、其の初め未だ寫眞銅版の利用せられぬ時代は、専ら西洋木版に依つて、洋畫の面影を傳へしことゝて、これ等の筆者は、一々其の筆名を發表することなく、多くは生巧館に附屬し、隠れたる筆者の感があつた。



梶田半古の古戦争畫



其の多かる洋畫人中、五姓田芳柳、佐久間文吾、茂木習古等は、夙くより各少年雑誌の表紙、口繪等に才筆を揮ひ、次で渡部金秋も、亦寫眞銅版口繪に其の力を效し、更に淺井忠も亦此の方面に携はりて、著しく清新の氣分を湛へしめた。

これを要するに、初中期の少年雑誌、並に少年圖書に關係せる挿畫々家は、何れも正規の畫道を踏みて、其の蘊奥を窮め、一筆一畫苟くもする所なく、専ら名譽家道を重んじ、低廉なる潤筆料に甘んじて、少年教育の爲めに、只管献身的努力を捧げし人々である。而もそれ等の作品は、其の收載せられし雑誌圖書の湮滅と共に、殆ど世上に貽されずとするも、後の隆盛時代を打開したる萌芽の、こゝに胚胎することを知らば、右に掲げたる和洋畫人に對しては、特別の敬意と感謝とを捧げなければならぬのである。

## 第七編 邁進時代

### 第一節 「幼年畫報」の創刊

さしも全世界を聳動したる日露戰爭も、三十八年三月十日の奉天大會戰と、五月廿七八日の日本海々戰とによりて、敵國の陸海軍を殲滅し、我國の全勝を以て終りを告げ、越えて九月には、兩國の間に講和條約が締結せられ、滿洲駐屯の皇軍は、續々内地に向けて凱旋し、國を擧げて平和の喜色に満たされ、隨つて一時沈滞を極めし出版界も、亦著しく活況を呈するに至つた。

願れば日露戰爭勃發の前年、矢野龍溪を主宰者として、「近事畫報」なる一新雑誌が生れ出でた。龍溪(文雄)は「浮城物語」「出たら目の記」等の著者として、且外交官として知らるゝ名士である。

「近事畫報」は、四六倍判の形式を採り、數十葉の寫眞版口繪を本幹とし、内外に發生する一切の近事をば、漏れなく圖版に依つて報道せんとするものにて、外國は知らず我國には、未だ曾て其の例なき新雑誌と見られた。

然るに其の翌年春、戰爭開始と同時に、「近事畫報」は、直ちに題號を更めて「戰事畫報」と稱



し、内外共に戦争に關する雑誌として再出發した。恰も又これと前後して、博文館は「日露戦争寫眞畫報」を創め、富山房も亦「軍國畫報」を創刊し、郁文舎も「戦争畫報」を興し、各自競つて現地に寫眞技師を送り、高名の畫家を従軍せしめ、専ら新を競ひ美を恣にし、忽ちにして畫報雑誌の氾濫を見ることゝなつた。

記事は横道に外れたが、此の畫報を外にして、恰も三十八年の春の頃、大阪市外にて、「こども」と題する四六判十六頁の小雑誌を發行する者があつた。片面四色、片面一色刷を交互に配し、全部繪を主としたる繪本風の愛らしき幼稚雑誌にて、これが編輯は、曾て「少年世界」にも寄稿したるお伽作家久保田小塊が擔當し、挿畫は筒井年峰社中の辻村秀峰の手に成れる者である。

固より其の製版技術面には、猶ほ少なからぬ不備缺陷の存するにせよ、兎も角も、繪本の形式を有する雑誌としては、最も新しき試みといふべく、隨つて相當の自信の下に、東京方面にまで進出して、其の販路の擴張を圖れるものと想はれる。

然るに偶然にも、博文館にて其の一冊を入手し、これなる哉とこゝに標的を得て、新たに幼年用の繪雑誌を發行すべく、隙かさず企畫を進めることゝなつた。蓋し戦後に於ける出版界の好況を見越し、且は従來發行中の戦争實記も、戦争の終局を告ぐると共に、自然廢刊の已むなきに至るを以て、これに代るべき何等かの新規計畫の必要を感じたる矢先とて、幼年繪雑誌も亦此の計畫の一に

加へ、其の題號には、當時雑誌界の流行語なる畫報の二字を當て、こゝに「幼年畫報」の發行計畫は、大阪發行の「こども」を對象として、愈々實現を見ることゝなつた。



幼年畫報表紙の例一

ところが、此の當時に於ける一般幼少年雑誌の價格は、普通一冊拾錢を限度としたるが故に、先づ茲に基準を置いて、「幼年畫報」の形態を定むる必要がある。併し只其の製本形式も、従來の如き右寄二ヶ所の針金綴を以てせんか、見開き全面に及ぶ色刷繪畫の効果を、十分に發揮し難き憾

がある。故に此の新雑誌にありては、書冊の背部より針金を通し、内部の中心點にてこれを折曲げ、二折して一冊とすべき一種特異の新様式を採り、石版四色刷表紙共十六頁、中繪寫眞版四頁、上等紙活版二色刷十六頁、合計三十六頁を以て纏め上ぐる方法を講じ、且これが用字は、國定教科



書の初學年程度に準據し、色刷石版の部分に限りて活字を使用せず、全部筆耕屋の手を煩すことし、明治三十九年一月一日を期して、これを世に問ふべく、着々其の工程を進めたのである。

元來此の時代の石版畫は、一々コロムペーパーを用ゐ、殊の墨に依つて、先づ線描を作り、一旦これを石版面に印したる後、更に其の校正刷何枚かを畫家に送り、初めて色さしを行はしめるものにて、只の一葉の石版畫も、畫家と石版屋と編輯者との間には、兩三回の往復を重ねて漸く完成するといふ煩瑣が伴つた。

却説、「幼年畫報」挿畫の筆者は、從來の關係もありて、武内桂舟、水野年方、小堀鞆音等の一流大家を始めとし、尾竹竹坡、尾竹國觀、鏑木清方、名和永年、山中古洞、吉本康方、田代古崖等の、日本畫家の大部分を網羅し、特にこれが製版印刷の一切をば、榛原中村工場の洗鍊せる技術に託し、初號四萬部を印刷して、是非を世間に問うたのである。

然るに、其の結果は、宣傳の不徹底なりし爲めか、或は拾錢の定價の此の種の者として高率に過ぎたるか、更には大衆階級の注目を牽き得ぬ爲めか、原因の何れに存したるやは不明なるも、兎も角も實際の註文部數は一萬にも充たず、他の約三萬部は、倉庫の一隅に欠伸するといふ豫想外の不首尾に終つたのである。

仍て第二號は、先づ失費を省くべく、著しく印刷部數を低下して、これに對處せるにも拘らず、

依然として好況に恵まれず、果ては逐月減少の一路を辿りて、同年夏季に入るや、其の印刷部數八千を上下するの實狀となり、愈々苦境に彷徨せざるを得なかつた。

併しながら「幼年畫報」は、其の性質上より見て、將來發展性あること確實なれば、今暫くの間忍苦を重ねれば、他日必ずや第一線に出づる者とし、こゝに多大の希望を懸け、編輯營業心を一にし、如何にもして印刷部數一萬の聲を聞かんと燃ゆるが如き熱意の下に、あらゆる手段を講じながら、只管努力精進を繼續した。——恰も此の當時、神田松榮堂より、かの大阪發行の「こども」に類する小雜誌「繪ばなし」なる者を發行し、主として木元平太郎の作畫編輯に依つたが、これは後に實業之日本社に移籍し、舊名のまゝ暫く發行を続け、更に「幼年の友」として完全なる發育を遂げたのである。

かくて「幼年畫報」は、其の春季定期増刊として「森のおばさん」を發行した。これは鏑木清方の秀麗なる筆致に依り、中にも紅白の椿花の満開せる森の孤屋に、神々しき老婆の歡待を受くる幼年幼女を現せる一圖の如きは、眞に情景渾一の妙諦を發揮するに庶幾く、これを中心として如何にも春らしき繪畫を主とし、其の半分をば玩具盡しの花枠に圍みて、小波獨特の諧調なる韻文お伽噺を收めた。左に其の全文を掲げて新意匠を窺はう。

森のおばさん。



- (一) 日わあたゝかに風わ無く。今日わほんとによい天氣。「兄さま一しよに行きましょよ。いつもの森え花つみに」。
- (二) みよ子がいえば三郎も。「そんなら行こうみよちゃん」と。共に手かごをさげながら。森のかたえとさして行く。
- (三) 行けば松杉生いしげり。すみれ、たんぽぽ咲きみだれ。小鳥もなけば蝶も飛ぶ。春わたのしい森の中。
- (四) 花つみながら餘念なく。遊ぶ折から目の前え。ふいに一匹飛び出たわ。見るもあわれな兎の子。
- (五) 耳のさきから足のさき。背も頭も泥だらけ。息もせわしくかけ寄つて。さも苦しげに横たわる。
- (六) 見るより兄の三郎わ。持つた杖をばふりあげて。「おのれきたない野良兎！ そののけのけ！」と追ひたてる。
- (七) みよ子は急ぎひきとめて。「兄さんまつて下さいよ。たといきたない獣とて。私たちにわ何もせぬ。
- (八) まして兎わあのとうり。ひどく疲れているような。いつそ助けてやりましょ」と。いゝつ

つ寄つて抱きあげる。

(九) いはれて兄ももつともと。おのが辨當わけてやり。やがてあたりの小流れに。泥をも洗いふき落す。

(一〇) 洗へばもとの白兎。雪かと思つうつくしさ。長い耳をばふりたてゝ。さも嬉しげにおどり行く。

(一一) そのまたあとを兄妹が。したうて行けばいつの間に、来たとも知れず一つ家の。中には白髪のお婆さん。

(一二) これわお二人よくおいで。先から待つて居りました。さア〜此方えお通り！」と。さもねんごろに出で迎う。

(一三) 迎えとられて二人が。家え上がれば忽ちに。運び出された御馳走わ。どれもおいしい物ばかり。

(一四) 十分たべて歸ろうと。すればお宿へお土産と。奥から又も運び出す。山のようなるたから物。

(一五) そこえさつきの小兎が。仲間大ぜいつれて来て。でんずに賣肩に負い。二人についてお供する。



(一六) わが家に急ぐ兄妹わ。ふり向きながら幾度か。「森の姥さんありがとよ!」「森の姥さんありがとよ!」

次で夏季の「木舟石舟」(宮川春汀畫)、秋季の「くりく坊主」(尾竹園觀畫)、冬季の「うかれ木兎」(尾竹竹城)等に依りて、順次新境地を開拓しつつ、辛うじて第二卷を迎へたのである。——猶ほ「幼年畫報」の増刊には、二卷以後力めて新進の畫家を物色採用したが、中にも安田靉彦、飛田周山、橋本邦助、河合英忠などは、其の錚々たる人々にて、殊に靉彦の「曾我兄弟」の如きは、考證確實、筆力雄邁、最も佳作と認められ、世間の評判も亦高かつた。

然るに第二卷の中期頃よりは、極めて徐々ながらも、多少好轉の兆を現して毎月幾分の増加を示すに至り、卷を重ねるに随つて、一萬は二萬となり、二萬は三萬と進み、數年ならずして、遂に六萬臺を突破するの隆運を來し、且其の若干數の殘本は、比較的高價を以て處分せられ、爲めに兩三年前の苦難時代も、今は全く一場の舊夢と化した。既に此の當時は、諸方にて類似雜誌を企つる者漸く多く、すべて同一形態の下に、或は畫風に新機軸を出し、又は種々のおまけを附して、讀者の歡心を求むる等、早くも弊風の吹き募る感があつた。

而もかゝる時勢に處して、一日の長ある「幼年畫報」は、斷乎として清節を守り、飽くまで家庭教育の見地に立ちて、一路精進したのである。兎もあれ最初は全く無風状態に置かれし幼年畫雜誌界は、年と共に益々混亂の渦を巻き起し、勢の趨くところ大正の中期に入るや、其の數實に五十餘種の多きに上り、爲めに雜誌屋の店頭は、殆ど此の種雜多の畫報によつて占領せられ、さながら萬花妍を競ふが如く、これが甄別にも苦しむ有様とて、果ては業者相議して、同種雜誌の創刊を抑制し、以て其の濫出を防止するに至つた。

如何なれば期したるが如くに、かくも多くの同種雜誌が発生したかと云ふに、これには又相當の理由を認めなければならぬ。勿論世間の好況によりて、各種出版物の賣行率が、舊に倍したる事も其の一因であらう。殊に幼年繪雜誌の類は、すべて石版印刷者の手に依つて成され、随つて多くの石版工を擁する印刷所にては、業務の餘暇の時間仕事として、毎月一回菊半截通しの製版印刷の如きは、世にいふ茶飯事でもあり、よしそれが理想的の賣行に達せず、相當量の大部數を持餘せばとて、これを殘本商人の手に託すれば、優に製造實費を償ひ得て、猶ほ且多少の利潤をも見込み得べく、即ち勞少くして功の多きこと、斯くの如きは無しといふのが、實際印刷の事に當れる者の、當然考へ及ぶべき點であらう。

或は又、小資本を擁する者が、これ等の石版社主と協同して、最初より過半の殘本覺悟の前にて新しく事業を興すもあり、更には商才ある畫家自らが、知己同志を誘ひて、これが發行を企つるもあり、一々見來たれば、從來の雜誌社以外、さして經驗もなく、又何等の定見もなき人々が、相催



して繪雑誌に着眼したる結果、かゝる多種類を生産するに至れるものと想はれる。

されば「幼年畫報」の發行後、數年を出でずして、毎月市場に送らるゝ繪雑誌の部數は、愕くべき大量を算し、隨つてこれ等の中には、其の編輯上、或は用字用語、又は色彩の點にも、如何はしき者少なからず、心ある父兄をして、大いに撃感せしめたることは、更に後年續出したる俗惡の漫畫繪本と、其の軌を一にせしも、自由放漫時代とて、何等干渉を受くることなく、玉石同架、清濁混淆のまゝ、依然として五十種類が、肩々相摩しつゝ、互に鎬を削つたのである。

## 第二節 「少女世界」の誕生

少女専門の雑誌として、初めて生れ出でたる者は、金港堂の企てたる「少女界」であつた。併し此の雑誌は、外觀こそ少女を標榜すれ、これが編輯上に、さして目新らしき點も見られず、且編輯者と讀者との連絡手段にも、やゝ緊密を缺けるものあり、單に少女的讀み物を滿載し、讀者の投稿を雜然と掲出するに過ぎず、看來たれば未だ必ずしも理想的好雑誌とはいひ得なかつた。

さる程に博文館は、これに運るゝこと約五年、即ち明治三十九年九月、新涼の好季節を卜して、「少年世界」と同型式の下に、新しく「少女世界」の創刊を企て、其の編輯實務者として、海賀篤磨（變哲）を聘し、以てこれが一切に當らしめた。謂ふに「幼年畫報」の誕生に運るゝ九ヶ月目にし

て、「少女世界」の誕生を見たるが、これ蓋し戦後發展策の一項目に外ならない。

編輯擔任者海賀篤磨は、何れの系統にも屬せず、或は懸賞小説作家として、又は赤本編纂者として一部に知らるゝ程度にて、少女に理解を有する者とは思はれぬが、只曩に近事畫報社（國木田獨歩經營）の、「少年智識畫報」を編輯せる經驗あり、加ふるに文藝的娛樂、遊戯の意匠に富めることゝ、相當の編輯技術を示し、甚だ地味ながらも、現に其の頃の「幼年畫報」が、猶ほ依然として惡戰苦闘を繼續しつゝあるに拘らず、新生の「少女世界」は、かゝる勞苦を知らぬ顔に、略豫定の順路を經過したるは事實である。

かくて數ヶ月の後、海賀篤磨は他に轉移し去り、これに代つて此の雑誌の編輯に當れる者は、沼田藤次（笠峰）であつた。笠峰は常識に富める紳士にて、文士といはんよりも、教育者の態度のほの見ゆる人であつた。これより曩同文館の「日本の家庭」を主宰し、才略縦横、行く所として佳ならぬはなく、將來性ある「少女世界」の編輯者には、洵に打つてつけの適材と想はれ、隨つて斯の人の手腕に俟たば、向後の發展を期すること、亦難しとせぬであらう。

「少女世界」と「少年世界」とは、正に車の兩輪の如く、紙數も口繪も、その他一切の形式を同一體下に置かれた。而も此の雑誌が、其の挿畫の方面に、日本畫の新進山村耕花、本多穆堂、河合英忠等を起用し、就中其の大部分を耕花の手腕に委したる一事は、かの「日本少年」の川端龍子に



於けるが如きものであつた。

山村耕花は、尾形月耕晩年の弟子なるが、殊更に師匠の筆致に倣はず、筆力勁健、其の才氣煥發



少女世界表紙(筆堂穆)

する所、巧みに少女の賦性を捉へ、姿態を活かし、星遠く月見草咲く夕べの園に物思ふらしき少女の優姿など、正に作者が得意の壇場なるべく、畫面に對する同年輩の讀者をして如何に憧憬の眸を寄せしめしことであらう。而も「少女世界」は、此の優れたる畫家を擁

することに依つて、生氣潑刺の感を深からしめたものである。

笠峰はまた讀者を遇する點に於いて、眞に到れり盡せりの周到なる用意を忘れなかつた。例へば、連日幾通となく寄せ來る少女の書信をも、彼は毫も煩しとせず、克明に、親切に、長々と返書

を認め、其の論すべきは遠慮なくこれを諭し、其の教ふべきは懇切にこれを教へ、この爲めに多數の時間と努力とを費すも意とせず、専ら自己の擔當せる雜誌の發育進歩に向つて精進した。これは勿論、記者としての當然の責務とはいへ、一通一章だも苟くもせず、適當に處理して讀者の要請に應へたるは、蓋し「少女世界」の強みであつた。

由來青少年少女を對象とせる雜誌は、其の實務に携はれる者が、多數讀者に對して、親切の限を盡すといふ一事こそ、唯一の必須條件なれ、若しこれを閑却忘失するが如きあらば、既に其の聲價を半減せる者といはねばならぬ。蓋し其の理由は、かゝる年頃の讀者の多くは、殆ど無條件に、自己の愛讀する雜誌を尊重し、これが記者の言説に絶對的尊敬の念を寄するは、素より異とするに足らぬ。されば編輯當事者が、此の年少者の心理を捕捉して、巧みにこれを指導育成する時は、永く其の讀者をして倚る所あらしめ、延いては雜誌の基礎を鞏固にする上にも、頗る好都合といはねばならぬ。

されば若しも地方在住の讀者が、自己の熱讀せる雜誌の記者より、直接に激勵、或は同情の信書を受けたりとせんか、必ずや彼等はこれを至寶として、永く尊重すると共に、其の雜誌に對する信頼の度を倍加するや當然であらう。「少女世界」の編輯當事者は、殊更自己の作品に、大手腕ありしとは認められぬが——否、編輯實務者は、強ひて作家として立つの要あるを認めぬ——かゝる手段



に依りて、諄々として讀者を諭し、投書家を導き、遂によく鬱然たる勢力を醸成するに至つたのである。

即ち、かくの如き情態の下に、新生の「少女世界」は、創刊後僅々兩三年ならずして、早くも豫想以上の効果を擧げ、其の印刷部數に於ても、殆ど「少年世界」と雁行するに至り、前途頗る洋々たるものがあつた。

殊に此の雑誌は、他の同日発行の同種雑誌に先んじて、毎月必ず一日か二日づつ、早目に市に出だせることも、亦見逃し難き點であつた。蓋し先んずれば人を制すの格言に漏れず、市内の雑誌店頭を見渡すに、未だ明日発行の雑誌の影すら無き時、獨り「少女世界」のみは、新裝美々しく堆積せらるるといふ奇現象は、この雑誌が如何に潑刺たる意氣に燃えつゝあるかを想像するに足りよう。

従來雑誌の発行日は、其の當日か、若しくは其の翌日を以てする例であつた。例へば一日発行の者は、大概其の日の午前中に出版元に引取り、直ちに各取引店の出頭を求め、店前に於て豫約の部數を交付する規定であつた。随つて同じ東京市内にても、遠隔の店は手車の往復に時間を要し、或は發行當日の夜に入つて、漸く店頭飾らるゝ如き例も珍しくはなかつた、尤も新年號の如きは種類の關係にて、大晦日以前に悉く出揃ひ、各種雑誌の賑々しく店前に積まれるのは、都大路に於ける、歳晩の一風景として、足迅き師走の巷に、行人の目を睜せたものである。

然るに「少女世界」は、これ等の舊慣を打破し、毎月多少づつ早目に發行を續くるに至り、随つて此の傾向は亦漸次他に及ぼされ、幼少年用の各雑誌は競つて發行日を繰上げ、それに連れて、表紙の見易き部分に、特に何月號と明示し、従來の何巻何號をば、わざと小字を以て現す者もあり、甚だしきは、約一ヶ月近く早目に發行するもあり、遂に當局の諒解の下に、印刷納本日と、實際の發行日との間には、相當の距をさへ認めらるゝに至つた。

併し何事もあまりに行き過ぐる時は、亦思はぬ弊害を生ずるものにて、はじめ「少女世界」に依つて醸し出されたる早目の發行日も、猛烈なる各社の競争に依りて、幼年繪雑誌の如きは、漸く十二月に入りしばかりにて、正月までには優に一ヶ月近くの餘日あるに拘らず、雑誌面にては、松飾り羽子つきの畫を掲げて、新年お目出度うなどゝ記し、或は未だ雪降り積る時節なるに、誌上にては、櫻花爛漫の光景を現するといふ有様にて、其の實際の季節に較ぶれば、甚だしき間隔ある者を生ずるに至つたが、これとても一般人は、雑誌界の常道として、敢て心にかくる者もなかつた。而してこは大正時代の特異なる一傾向であつた。

それは兎もあれ「少女世界」は、年を経るまゝに、益々堅實なる地歩を築き、多數の固定せる愛讀者を擁して、彼の實業之日本社の「少女の友」と肩を並べ、我國少女社會に重きを成した。而も「少女の友」が、其の社の經營方針のまゝに著しく宣傳の巧に勝るものあるに比して、「少女世界」



は飽くまでも堅實を以て臨み、一面に娯樂の供給を忘れず、指導的態度を閑却することなく、特に



山村耕花の筆意

投書家に對しては、友愛懇親を旨とし、居然として師弟の間に在らしめ、靄々たる雰圍氣を醸成したるものは、正しく編輯者の人格の然らしむる所であらう。

最近新聞紙の報するところに依れば、現代女流作家として重視せらるゝ森田たま、北川千代、細川武子等が相謀りて、舊少女世界の誌友として、當時教導を受けたる故笠峰の恩に酬いる爲め、特に記念の冊子を編纂して、其靈前に捧げ、一夕の追憶に耽りしとか。

笠峰の指導したる當年の少女投書家には、天分豊かなる人々も少しとしなかつた。彼はこれ等の文學少女を糾合して、たかね會を組織し、更に「たかね女塾」を起して、學問文藝の修練啓發を旨とせることがあつた。即ち現代女流作家の大部分が、彼の門に輩出したることは、亦争ひ難き事實である。されば此の意味に於て「少女世界」の貽した功績は、亦頗る顯著の者であつたと見なければなるまい。

### 第三節 「日本少年」と「少女の友」

實業之日本社は、増田義一の經營にかゝり、既に久しき以前より、同名の實業雜誌を發行して穩健適切な記事を充たし、一部階級に迎へられたが、偶々日露戰爭に入ると共に、別に日露交戦録を發行して、亦相當の成果を挙げ、其の基礎愈々堅實を效すや、戦後雜誌界に一步を進め、先づ「婦人世界」と「日本少年」との創刊を企て、次で「少女の友」、「繪ばなし」等に、清鮮潑刺の氣分を盛り、漸く博文館の壘に迫らんとした。即ちこれ實業之日本社が、戦後發展の第一階段と見るべきである。

「日本少年」は、「少年世界」及び「少年」の長所を採り、別に自家獨得の方針に則りて、大々的宣傳に力め、期年ならずして、他の二種と雁行し、或は角逐するに至つた。蓋し金港堂の「少年界」は、既に其の影うすれ、今や「少年世界」「少年」「日本少年」の三誌が鼎立して、互に其の長所美點を發揮した。

「本誌は小學生、中學生、店員、其他一般少年の良師友なり。材料豊富にして實益多く、趣味清

「日本少年」と「少女の友」



新にして内容整頓せり。子供のある家庭にして本誌を備へざる處ありや」といふのが、即ち「日本少年」の宣傳文句であつた。

此の雑誌の最初の編輯者は、たしか石塚月亭なりしかと想はれ、次いでまた有本芳水の時代に入つた。月亭は、嘗に編輯上に敏才を有するのみならず、時には自ら市中を巡廻して、屢々各書店の店頭に佇み、或は店主に面接し、「日本少年」の販路向上に關して畫策する所あり、其の熱心と勇敢とは、到底他社の人々の思ひ及ばぬものがあつた。また芳水は、少年詩に妙を得、常に讀者の胸臆に徹する長短の詩篇を發表して、多くの憧憬者を得たが、これ亦「日本少年」の特色の一に擧ぐべきであらう。

次に特記すべきは、其の題目の選び方である。從來の一般雑誌は、出來得る限り簡單の文句を用ゐたのであるが、「日本少年」は、此の慣例を打破し、一頁段抜きの長々しき題名を掲げて、讀者の眼を集注するに努めた。例へば、「菓子賣りの少年後には有名なる器械發明家と成る」とか或は「木に登りて隣家の喧嘩を見し少年今は有名なる實業家」とか、聊かわざとらしくもあり、一見甚だ煩しき感もあれど、却つてこの題目に魅了せられて、大いに好奇心をそゝり、何とは知らず手にする者も、亦漸く多きを加へた。惟ふに實業之日本社が、其の發行諸雑誌に、此の種の題目を多分に採入れて、讀者を吸収したる工夫は、正しく一顧の價値ありといふべきである。

次に「日本少年」は、其の挿畫々家として、新進の川端昇太郎(龍子)を起用し、敏腕を縦横ならしめたことも、亦これが發展上閑却し難いものがある。龍子は極めて天分豊かに、其の筆致は從來



(筆子龍) 紙表の年少本日

の層々たる畫家と異なり、描線に活力横溢し、且あらゆる畫題に對して、何の苦勞もなく、自然に自由に、奔放に描寫し去れる點は、道こそ異なれ、往年の小林清親を想はしめるものがあつた。

而も「日本少年」が、後年に至りて、比較的清楚なる三色刷活版を利用して、極度の異彩を放たせたる一事は、亦他の追隨し難き點であつた。もと此の三色印刷は、東洋印刷會社の特技に屬し、時事新報の日曜附録として、北澤樂天一派の漫畫印刷に始まり、其の着彩の美と構想の奇警とを以て、讀者を魅了せるもので、當時の時事新報讀者は、日曜日の特別附録を待ち侘ぶること非常

「日本少年」と「少女の友」



のものであつた。

併し一方これを印刷者の側より見れば、かゝる效果的の三色刷機械も、たゞ日曜一回の運轉にのみ止まり、他は休止の状態に置かれ、さりとて相當大量の印刷物ならぬ限り、これを利用し難き憾もあり、聊か資の持腐れの感さへ無くもなかつた。即ち此所に着眼したる實業之日本社は、當時既に大量製産に向ひつゝある「日本少年」に應用して、其の挿畫の美觀を期し、著しく効果を擧ぐるに至れるものは、正しく機先を制せる者であらう。——以上の経緯は、曾て東洋印刷會社に在りし某甲の直話である。

更にまた「少女の友」は、「日本少年」に遅るゝこと二年、即ち四十一年紀元節の當日を以て、梅花馥郁たる表紙に飾られて其の初號を發行した。

試みに就いてこれを見るに、開卷劈頭村井弦齋の、「優しき少女が友達を善人に化したる話」と、例の如く長々しき見出を附して、一場の事實訓話を行つてゐる。弦齋は此の當時「婦人世界」に據りて、料理法の記事に評判を博したものである。

又これを他に於て、高信峽水（婦人世界記者）、渡邊白水、瀧澤素水、長谷部湘雨、江原小徑、星野水裏等、主として同社記者の手に成れる作品と、他に三五の寄稿とを集め、其の執筆畫家には、木元平太郎（繪ばなしの最初よりの畫家にて、後にコドモ社を創立せる人）、谷洗馬（永洗門下にて馬の畫を

善くした人）竹久夢二、川端昇太郎、笠井鳳齋、島守寒光等が、それ／＼分掌した。併しながら口繪の多色刷石版及び寫眞銅版等には、未だ殊更新意匠の認むべきものは無かつた。



少女の友の表紙（寒光筆）

其の卷頭の十六頁に表裏別色の二色刷を採用せることゝ、寫眞銅版に依る挿畫を多く挿入したることゝは、一層其の印象を鮮かならしめた。此等の畫家の中にて、早くも讀者の歡迎する所となれる者は、かの竹久夢二であつた。夢二は独自の觀點によりて、異色ある筆意を用ひ、最も少女の姿態を現すに妙を得、且少女好みの文章に

も、驚くべき天才を發揮した。次に「生れぬ前」（第五號所載）の一文と、其の挿畫の一部分とを掲げて、初期に於ける夢二の面影を彷彿せしめよう。空の美しい、風の涼しい日曜日のことでした。

「日本少年」と「少女の友」



露子と武坊は、姉様につれられて、叔母様の家へ遊びにゆきました。前のお庭には、カンナの花が一杯に咲いてゐます。

「僕は黄色いカンナが好きだ」



夢の二筆意

と、武坊がいひますと、露子は、

「あたし、紅い方が好いわ、

ちよつと姉様のリボンのよう

ねエ」

といひました。

今度は裏の花畑の方へゆきま

した。花畑の芝生のなかに、小さいスミレの咲いてゐるのを露子が見つめました。

「かあいゝスミレ！ あたしがさきに目つけたのよ」

「うそだア、僕が一等さきに見たんだ」

「うそよ、あたしだわ」

「だつて僕、三つのおき目つけたんだもの、僕の方がさきだ」

僕と露子の争ひを  
今宵はよもよもいひだす

「あたしは武坊がうまれないさきに見たわ、だつて武坊よか、あたしの方が年が多いぢやないか、その時、あたしこゝを通つたことよ」

これには武坊もちよつと困りましたが、まけてゐてはくやしいから、一生懸命で、

「だつて僕、鳥の時、こゝんところを通つて見たよ」

といつたので、露子も姉様も笑つたことでした。

極めて淡々たる小話ながら、いかにも夢二の想像らしい、滋味に富める書き振りにて、かゝる短篇が、毎號二色刷を以て、巻頭の一部を飾れることは、やはり他誌に類例を見ぬ、一特色とせられた。

また笠井鳳齋の考案に俟てる、懸賞畫探しの新題が次々に提出せられ、大いに讀者の興味を唆つた。而もこれが解答人名の發表は、從來他雑誌に行へる形式とは、著しく其の趣を異にし、同一地方の解答者を一所に集め、縣別に依つて配列せるのみならず、詳細に住所姓名年齢を明示し、且全體の應募總數を詳記したるは、編輯者の周到なる注意の結果と見られ、且經營者の存意の、那邊に在りしかを窺ふに足りよう。

なほ初期に於ける「少女の友」の特色として擧ぐべきは、「歌つなぎ」の懸賞募集であらう。これに關しては、編輯者も亦多大の希望をかけしやに思はれ、極めて親切なる注意書を附して、讀者



を導いてゐる。即ち第一回の課題を見るに、

(一) ○○○○涙こぼるゝ○○○○○○○○○○夏の夕ぐれ。

(二) 月影の○○○○○○○水見えて白き花咲く○○○○○○○。

注意。上の課題の○○の所へ、皆さんのお考へで、それ〴〵適當な文字を入れて、一つの歌を作り上げるのです。

例へば(一)の代りに

○○○○○夕暮かなし○○○○○○○○○○鐘ひやく時

といふ題が出たとしますれば、「ひとり居の夕暮かなし山の家、母ある空に鐘ひやく時」と云ふ風にも作れるし、又「何となく夕暮かなし小雨する湖をわたりて鐘ひやく時」とも作れます。次に(二)の方の例に就いて申しますと、「嵐山○○○○○○○むらさきの水に棹さし○○○○○○○○」といふやうな題があるとしたらば、「嵐山さくら散りうぐ紫の水に棹さし下りけるかな」とも作れますし、それから又、「嵐山春をたづねて紫の水に棹さし語り明かさん」と云ふやうな歌にもなります。

新たに入れた字へは、右の例に示したやうな・印をつけて下さい。題の(一)は上の句の上五字と下五字、下の句の上七字が脱けてゐます。(二)は上の句では中七字、下の句では下七字

がぬけてゐます。間違へないやうになさい。(一)を一つ作つてお出しになるとも、又(二)を一つ作つてお出しになるとも、尙ほ又兩方を作つてお出しになるとも、どちらとも御隨意です。

と云ふやうに、眞に痒い處へ手の届くばかり、到れり盡せりの注意を加へてゐる。即ちこれを數年前の一般投書規則に記されし如く、何々すべし、何々すべからず式の窮屈さに較ぶれば、眞に霄壤の感があり、早くも讀者に阿諛し迎合せんとする厭ふべき傾向の漸く擡頭し來ることを想はれ、暗に其の競争の激甚を將來しつゝあることが認められる。

それは兎も角も、「日本少年」と「少女の友」とが、兄妹肩を駢べて、天下の信用を高め、且またこれが發行部數を増加して、斷然斯界の第一人者を以て任ずるに至りしは、かの上野公園陳列館に於ける、全國少年少女成績品展覽會の開設に依りて、異常なる効果を收めしことが、其の最大の導火線たりしは、亦否み難い所であらう。

此の成績品展覽會は、「日本少年」と「少女の友」とを發行する實業之日本社と關係深き大隈重信伯を總裁に戴き、多數高名の人々を賛助員とし、兩雜誌の勢力を十二分に驅使して、廣く全國都鄙の各小學校に喚びかけ、兒童の手に成れる圖畫、清書、作文、手工、其の他あらゆる成績品を大集し、これを選抜して順序を定め、陳列場の内外には手の及ぶ限を盡して裝飾を施し、櫻花爛漫の時



節を期して、華々しく開催せるものである。

何事も宣傳の世の中ではあり、殊に宣傳の巧妙なる實業之日本社の企畫ではあり、爲めに連日入場者雲集し、殊に高貴の御方さへ、御來觀あらせらるゝといふ有様にて、私設の展覽會としては、稀に見るの名譽を博し、大成功裡に其の幕を閉ざした。

さればこそ、この事あつて以來、兩誌の勢力は、眞に旭日昇天の概を來し、爲めに多年牢固たる地盤を擁したる「少年世界」すら、聊か後方に墮着たるの感なきを得なかつた。

#### 第四節 「兄弟」「姉妹」其の他

日露戦争後の、好況時代の波に乗るといふか、戦争前までは、寥々として一二指を折るに過ぎなかつた青少年用の雑誌も、戦後の發展時代に入ると共に、それこそ待つて居たぞとばかり、次々にそれ〴〵の新企畫を立てて、思はぬ方面から、類似の型式のものが續々生れ來つた。

今、此の當時の傾向を一瞥するに、何れも期したるが如くに、すべて菊判型を採り、表紙の意匠に石版四五度刷を用ひ、口繪には石版多色刷一葉、或は二葉を挿み、寫真版口繪は、一色刷若しくは梓付二色刷四丁、本文は紙質の如何に依りて、多少の差を設け、百頁乃至百二三十頁を往來し、其のうち巻首の十六頁に上等紙を採用して、挿畫と文字とを別刷とし、而も定價拾錢といふのが、

一般の標準とせられた。即ちこれを數年前に較ぶれば、全體を通じて著しく華麗を極め、雑誌店頭



姉妹の表紙(與平筆)

正の初頭まで嚴守せられた。かくて團子坂の講談社が、定價拾五錢の「少年俱樂部」を創刊するに至つて、この標準型式は漸く破れ去つた。「少年俱樂部」といへば、曩に北隆館が、同名の少年投書専門雑誌を發行して、相當廣く少年間に認められしことは、既に記した通りであるが、其の

後明治四十一年三月、本所外手町の同名の社より、同名の新雑誌發行を企つる者があつた。

これは、早大英文科出身の、西宮藤朝の經營にかゝるもの、固より一般商人とは稍其の選を異にし、いかにも青年らしき理想と抱負と希望とを以て、熱心に其の經營に當つたと思はれるが、折角



の目論見も、理想と實際とは一致し難く、未だ半年ならずして、早くも廢刊の運命に會した。これに依つて見れば、講談社の「少年俱樂部」は、正しく第三回の襲名なるに拘らず、其の經營の妙を得て、遂に天下に大を成すに至つた。

この西宮藤朝の「少年俱樂部」と相前後して、他の三大少年雜誌及び二大少女雜誌とを向ふに廻し、新たに打つて出でたるは、麴町飯田町の、國學院大學出版部の「兄弟」、「姉妹」と題する二種であつた。これは其の題名の示す如く、彼は少年を對照とし、是は少女を目標として、新しき境地を拓くべく、雄々しく發足せるものである。

國學院大學出版部は、松室岩雄の主宰するところにて、國學院の機關誌「國學院雜誌」の外に、國文學に關する大出版を續行して、かなりの成績を擧げて居るので、今度の創刊二雜誌も、やゝ其の方面をこそ異にすれ、朝生暮死の弱體小雜誌とは、自ら差あるものあり、これが運營の如何に依りては、優に第一線に立つべき可能性は、十分に認められたのである。

殊に此の雜誌は、編輯主任藤澤紫浪（衛彦）の努力に俟つ所多く、其の裝幀挿畫の如きも、當時賣出しの竹久夢二と雁行して、而も別途を行ける宮崎與平の、豐なる新味を多分に盛り、且木版畫と寫眞銅版畫とを可なり思ひ切つて多用したる上に、全體としての編輯振も、頗る上品に感ぜられ、何所となく綽々たる餘裕の見ゆる好雜誌であつた。

試みに今、「姉妹」の創刊號（四十二年六月十五日發行）を採つて、暫らく検討して見よう。先づ表紙畫には、石版四色を利用して、與平の意匠に俟ち、石版口繪には、小峰大羽の「夏」と題する清楚涼爽なる一圖を加へ、他に光澤紙一丁と、赤門紙三丁によつて、一色二色取り混へたる寫眞版口繪は、他の同種雜誌と大差なく、次で巻頭には、水野葉舟の「冬ちやん」を收めて、第一の呼び物たらしめた。これは四號段抜二十頁に亘る長篇少女小説にて、其の他に服部躬治、窪田空穂、國木田治子等、他の同種雜誌とは、やゝ其の寄稿家を異ならしめ、且文學的記事を以て充たしたる點は、往年の「少女界」を想はせるものがあつた。而してこれが全體の紙數約百二十頁、目黒和三郎なる人が、編輯發行者として署名してゐる。

猶ほ此の雜誌に見逃し難き一事は、例の湯地丈雄の護國幼年會が、「兄弟」「姉妹」兩雜誌の勢力に依存して、大いに發展の歩武を進めしことである。即ち本文三頁に亘りて、其の會の主意書、規約、手續その他一切の事項を發表して、荐りに讀者に喚びかけたることである。其の故は國學院の高山昇なる人が、護國幼年會の總代人として、重要な地位を占め、湯地は又同會の代表者として、其の職務を分擔せることに依つても明瞭であり、何れにしても護國幼年會の基礎は、こゝに一段と強化せられしは事實である。

然るに此の「兄弟」「姉妹」も、元々少年雜誌專業ならぬ人々の手に依れる爲めか、更には經營



上に不備の點ありしに因るか、折角の努力も兎角時好に投ぜず、兩三年後には早くも業績不振に陥り、遂に二誌合同して、更に陣容の整備を圖れるものゝ、それさへも維持し切れず、遂に廢刊の外なきに至つたのは、聊か秋風落葉の感なきを得なかつた。

また此の當時、神田旅籠町の文光堂より、「少年の友」と題する、片々たる小雜誌が生れ出た。菊判三十餘頁、寫真版口繪一葉、定價五錢なりしやに記憶する。文光堂は、野口安治の經營にかゝり同人は曾て博進社工場に勤務し、活版印刷界にも知己多く、夙に投書専門の「秀才文壇」を發行して、多數文才ある青年を教養したるが、更に此の勢力を驅つて、新たに少年雜誌の方面に進出せるものである。

尤も「少年の友」は、「秀才文壇」の副業とも見るべく、さして特色と認むべきもの無きも、自家の「秀才文壇」及び博文館系の雜誌を利用して、絶えず廣告宣傳に努め、且小川未明其他早稻田派文士の童話、小説等を掲げ、特に投書文に力を注ぎ一部讀者を保有しつゝ、辛うじて其の發行を繼續した。

### 第五節 三雜誌の特色

往年（明治廿六年の交）、かの「小國民」と、「幼年雜誌」とが、共に少年雜誌界の第一線上に立ち、

兩々相對して追ひつ追はれつ、其の記事に新機軸を案出し、或は挿畫の精粗と多少とを争ひ、勢の趨くところ、時に採算を度外視するの傾向すら看取せられしも、已にして「幼年雜誌」の後を受けたる「少年世界」は、却つて此の競争圏外に立ち、次で「小國民」また聊か疲勞の狀を示し、さしも激甚を極めたる兩誌の角逐も、兩三年ならずして解消し去つた。蓋しこれ我國少年雜誌界の前後を通じて、最も特異の現象であつたと見られる。

爾後數年間、「少年世界」は少年雜誌界の首位を占め、續出せる群少年雜誌を眼下に瞰し、居然として独自の境地を濶歩したが、偶々明治三十五年金港堂の「少年界」の出づるに及び、其の外装の優れたる點に依り、讀者の一部分を、これに吸収せられしやに想はれしものゝ、事實彼此の間には、亦相當の距離を存し、相互の任する所自ら異なるが故に、兩誌は何等の摩擦を起すことなく、又競争をも企てず、各々泰然自若として進展を續けたのである。

試みに「少年界」の編輯を見るに、主として幸田露伴門下の秀才に依つて、其の陣容を整へしことが知られる。そは同誌の主筆神谷鶴伴が、露伴門より出でたる關係なるべく、隨つて亦其の内容にも、お伽噺、少年小説、雜錄の類を多數に収録し、一見新進少年文學者の筆戦場の如く、爲めに他の學科、修養方面をば、やゝ輕視せるやの傾向すら見られた。

これに反して「少年世界」は、勿論小波のお伽噺に重點を置きしとはいへ、さりとして軍事學術其



他の記事を輕視することなく、加ふるに「少年界」に比すれば、讀者の投書、通信等を取扱ふこと甚だ親切に、殊に第十一卷以後に至りては、學術方面の記事を重しとし、専ら博士大家を訪うて所説を聴き、記者自らこれを筆録して、少年の繕讀了解に便し、平易簡明の幾種類かを掲載して、頗る好評を贏ち得た。

然るに明治三十六年秋、時事新報社の企畫に成れる「少年」は、始め外國少年雜誌の編輯法に倣へるものゝ如く、隨つて童話小説の類を二次的に取扱ひ、主として科學、就中世界に於ける最新の事實、發見發明等の、一見目を愕かすに足るべきものを網羅し、以て其の特長たらしめた。

一方「少年界」も「少年世界」も、これが挿畫の大部分をば、從來の如く専ら日本畫家の手に託し、木版畫萬能を以てしたるに、獨り「少年」は、其の用紙の精良なるに委せて、頗る見事なる寫眞銅版畫を隨所に挿入し、日本木版と相和して、一段の光彩を放たしめ、「少年世界」が輪轉更紙を使用せるに比すれば、其の精粗美醜固より同架すべくもなかつた。

併しながら「少年世界」は、雜誌専門業者の手に依りて、既に十餘年の久しきに亘り、連綿として繼續發行し、牢固不拔の地盤を擁するあり、且繼續的讀者多く、假令其の外裝に多少の遜色ありしとするも、「少年」とは亦自ら別途を歩みて、能く其の信用を保持し得たのである。

而も「少年」と「少年世界」とは、其の定價に於ても、又其の階級に於ても、殆ど相對の間に在りしに拘らず、兩誌は固く紳士道を守り、又何等の競争的野心を起すことなく、淡々として一意各自の分野を開拓するに努めた。

茲に暫く「少年世界」の内容を檢討するに、其の初めは、主筆漣山人の關係者と、從來の博文館寄書家、特に硯友社系統の人々とに依りて、これが根幹を成せるものと想はれ、隨つて其の創刊後兩三年間は、いはゆる名士の寄稿頗る多く、而も漸く年を経るに従ひ、漣山人の門葉榮え、且硯友社諸子の門下の人々も、亦多數來り加り、爲めに其の執筆者に於て、やゝ低下せる傾きありしも、こは勿論新陳代謝の自然的趨勢にして、いはゆる時代の然らしむる所、亦何等異とするに足らないのである。

日露戦後に於ける「少年世界」が、讀み物本位より脱却して、重點を學者の寄稿に俟つや、専ら専門家の門を叩き、其の學説を請うて、誌上の花たらしめたるは既記せる所、即ち人類學の坪井正五郎博士、動物學の石川千代松博士、同じく飯塚啓博士、植物學の松村任三博士、同じく三好學博士、古生物學の横山又次郎博士、物理學の鶴田賢次博士、西洋歴史の箕作元八博士、國史の萩野由之博士等を始めとし、上野動物園長黒川義太郎、昆蟲學の名和靖等々、一流の大家を網羅し、更にまた軍事方面にも、堀田（英夫）海軍少佐、多賀（宗之）陸軍中尉、隱岐（敬次郎）大軍醫等の新進武人の壯快なる記事を集め、少年の軍事思想啓發に寄與する所あつた。



かくの如き状態を以て、「少年世界」は堂々として天下を闊歩したのであるが、日露戦後に出現したる「日本少年」の發達に連れて、一層の緊張を要したるや固よりいふまでもなかつた。即ち一は其の基礎鞏固なりとはいへ、やゝ老成化せる者、これに反して一は新銳の意氣高く、加ふるに宣傳弘布の手段に長じ、向上の一路を猛進せんと圖りつゝあり、況や兩者の目ざす所は、略其の行路を齊しうするをや。

これを物に譬ふれば、同じく東京より關西に到らんとするに、從來東海道線と、中央線と、各々鐵路を異にして西下したる者が、今や東海道に別途の新線路を築き、兩列車同一の速度を以て相駢行するにも似て、必ずしも兩者鑄を削りし程にはあらぬも、其の讀者に及ぼしたる影響は、蓋し相當大なるものありしやに想はれる。

殊に「日本少年」は、實業之日本社の一般雜誌記者が、いはゆる三階總出を以て、絶えず長短の文章を寄せ、或は屢々讀者大會を催して、京濱湘南の遠足を試み、或は又各種新規の問題を課して賞を與ふる等々、讀者との交渉に密接なる注意を傾け、而もこれが宣傳の手段方法に至りては、遠く「少年世界」の企て及び難きものがあつた。

今、忌憚なく兩者の優劣を判断するに、「日本少年」が、新機軸を掲ぐることに汲々たりしは、明かにこれを認められる。そは「少年世界」が、既に創刊後多年を経て、其の編輯工作上にも、これぞといふ斬新の妙案無きに反し、新進氣鋭の「日本少年」は、如何なる題材を捉へ來るも、悉く時代の趨勢に適應せしめて、新規とし妙案としたるにて、この點は正しく後進者の利得といはねばならぬ。

殊に「日本少年」は、其の挿畫の寫眞銅版、若しくは網入亞鉛凸版に、種々製版上の新工作を施し、例へば切抜寫眞銅版の類を、本文中到る所に散在せしめ、それに應じて巧妙なる組方を探り、誌面に變化を呈したる一事は、多分に讀者の感興を牽ける點なりしやに想はれ、彼此相對照し來らば、其の作家、寄稿家の世間的地位等は別問題とするも、能く少年の嗜好に投ぜしめ、其の愛看を集めたるは、確かに「少年世界」に一籌を輸する者といへよう。

翻つて「少年世界」の主義方針を顧みるに、固より前時代の「小國民」、若しくは「少年團」等に於て見たるが如き、一にも二にも、記者自身が先頭に立ち、指導訓育を旨としたるに異り、最初より各方面の寄稿家に頼り、これを編むに記者の手腕を以て變化を多からしめ、必ずしも指導訓育にのみ偏せず、寧ろ少年の情操を長養するを以て主眼とした。即ち強ひて苦澁多き良藥のみを與へず、却つて甘菓を供給して、娛樂歡笑の裡に、これを善導せんとしたるものゝ如く、例へば小波山人の卷頭お伽噺を見るも、敢て教訓を力説せず、明朗潤達、大らかなる氣分を涵養せしめるに在つた。修身を課し、學科の復習を強ふるは、これを二の次とし、少年と共に樂しみ、少年と共に遊び



以て偉大なる國民性の基礎を築かんとするに在つた。随つてこれを前時代の同種雜誌に比すれば、其の精神氣力に於て、正しく一大進歩と見るべきである。

此の意味に依つて編輯せられたる「少年世界」は、創刊後の兩三年間は只發達の一路を邁進せるものゝ如く、次で五六卷時代に入るや、讀者投書家との連鎖薄れ、誌面亦や、情氣を生ぜしやに感ぜられ、已にして小波山人洋行の後を受けて、江見水蔭をこれが主筆として迎ふるや、俄かに従來の編輯方針を改め、各科別に欄を立て、且著しく程度を高むるに至つた。勿論此の時代は、殆ど他に競争者らしき者を見ず、さながら無風状態を呈したりとはいへ、常に讀者の意向を考慮して、清新の氣分を注入するに努むるは、營業政策上亦當然の處置と見なければならぬ。

由來雜誌の編輯は、只單に主任記者の存意計畫に俟つのみならず、更により以上經營者の意志を尊重すべき要あり、時としては、これに盲従するの外なき状態にさへ置かれた。即ち當該主任記者が、如何に妙案奇想を懷けばとて、それが經營者の意に満たざる場合は、遂に實行不能に陥り、勢の趨くところ、編輯と經營と兩々對立して、相譲らざるが如き事態を醸さんか、延いて其の雜誌の衰運を招くこと、亦必然と見なければなるまい。

往年「小國民」の經營者が、非常なる大雅量と信頼とを以て、其の編輯上の全權を、舉げて主任記者の手に委ね、毫も容喙する所なく、二者一心の實を完うしたるは、甚だ賢明の方策にして、當

該雜誌をして永く優位を保持せしめるに、與つて力があつた。併しながら手廣く多種多様の雜誌を經營する者が、それ〴〵思慮を異にし、性格を別にする主任記者に對して、萬遍なくかゝる態度に出でんか、恐らくは放漫に流れ、若しくは自由に墮し、假令其の發行部數は増大するも、果ては收支償ひ難きに立到るやも、亦圖り知り得ないであらう。

故に經營の立場にある者——即ち資本家は、編輯の任に在る者、即ち勞務者に對して、屢々制馭を試み、時に註文を發し、或は會議を催して是非を正し、かくて費用の許す限度に於て、編輯者の意見を容れ、其の方策を採用し、以て雜誌の榮譽を保ち、これが發行部數の増加を期するといふのが、蓋し當時に於ける偽なき實情であつた。

さて、筆は横路に外れたが、「少年世界」は第九卷を迎へて、再び小波の主宰する所となり、従來に比なき大改革を斷行して、其の面目を一新するに至つた。即ち新歸朝者の齎したる新知識を十分に盛りて、先づ程度を引下げ、内容外觀共に麗美を極め、頗る世評を高からしめたが、翌年早くも此の形式を破り、搗て、加へて日露戰爭の爲めに其の發行部數は急激に低下を來し、こゝに創刊以來未だ曾て經驗せぬ受難時代に逢着した。

かくて隱忍約一年有半、已にして戦後の好況時代を迎ふるや、「少年世界」は前記せる所の如く、其の陣容を整頓し、多數名士の寄稿を仰ぎ、漸次頽勢を挽回して、年は一年毎に、目覺しき發展の



一路を辿り、爾來十數年の久しきに及びて、其の信望を失墜することなく、少年雜誌として無二の長命を保ち得たるは、誌界稀有の現象といふべく、此の間二十餘年の星霜を、殆ど不動不變の熱意を以て、全般の指導監督に當れる巖谷小波の努力も、亦大いに多とすべきである。されば屢々其の主任者を交迭せしめて、主義方針に激變を及ぼす如きは、即ち該雜誌存在の精神を没却するものと言はざるを得ない。

## 第六節 少年文學の作家

初期（廿四五年頃）に於ける少年雜誌の寄稿家及び少年書類の著述家の態度を見るに、其の大部分は、單に子供だましの程度に過ぎなかつた。當時此の方面に最も力を注げる漣山人すら、日本昔噺の序文の一節に、「又しても氣樂な子供だまし」の口吻を漏らせる程なれば、他の一般作家の、少年讀み物に對する觀念は、これに依つて推知すべきであらう。

即ち穩健着實に、兒童家庭に對して、清新潑刺たる娛樂、乃至教育薰陶の要素とすべき、優れたる新作品を提供せんとする心思に缺け、極めて輕忽に、淺薄なるくすぐりや、但は興味中心のおどけ話の類を弄し、以て能事足れりとする者が、其の全部に庶幾かりしことは、疑ひなき事實と見なければならぬ。而もかゝる傾向は、漣山人の「こがね丸」時代を前後として、多分に存在したるや

に想はれる。

例へば幸堂得知（鈴木利平）南信二（谷村要助）等の、江戸末期より明治初期時代に名を知られたる人々の筆に成れる者は、殆ど其の總てに近きまでに、坊間に流布したる赤本類の燒直しか、或は又これに示唆を得たる、低劣、卑俗の創作、翻案にて、全然時代を無視し、兒童の心性を理解せず、教育を度外視し、只管滑稽諧謔にのみ重點を置き、徒らに有り得ぬ神怪と迷妄とを語り、若しくは醜陋眉を撃むべきもの多々ありしにも拘らず、社會一般はこれに對して何等の關心なく、且毫も奇異とせず、所謂「子供だまし」として、頰冠りのまゝに看過したのである。

かゝる幼稚低級の時代に當り、新進の博文館が、權威ある作家を擧りて、「少年文學」の創刊を企て、茲に一脈清新の氣分を横溢せしめたるは、確かに時代の先驅を成せるものといふべく、これに依りて少年讀み物の革新を齎らすや、勢ひの行くところ、漸く此の方面に對して眼を着け、心を傾くる者少なからず、遂に鬱然たる少年文學の新世界を樹立するに至つた。

勿論、「少年文學」の全卷を通じて、これが作家並に題材の種別を見れば、いはゆる舊體形に依る人々も、亦絶無とはいひ難きも、大部分は硯友社系統か、又は何れの派にも屬せぬ優良なる新進作家を網羅して、略其の目的を達したるに庶幾きは、當時として大成功といふべく、其の局に當れる企畫者の慧眼は、推服するに足るものあり、次代を負うて立つべき少年の心の糧として、最も榮養



に富める好書を得たる一事は、何人も諒解したる所であらう。

惟ふに博文館が、少年文學の發達に對して、多分の力を傾けたる一事は、常に「少年文學」の好結果に依るのみではなかつた。蓋し當時文壇の中心を成し、一世を風靡したる硯友社の勢力を假りて、文學的出版に活用せんと企てたることも、亦これを認めなければならぬ。即ち其の社中の一人渡部乙羽を迎へて、内部の計畫に參與せしめると共に、硯友社との聯絡を密ならしめ、次で乙羽の斡旋に依りて、少年文學界に盛名高き、巖谷漣山人を聘したることも、社運の隆盛を將來すべき、一大要素と成れることは、斷じて否定し難いであらう。

漣山人は、硯友社に屬して一頭地を抜き、而も其の筆致輕妙洒脫にして、夙に一家の風を爲せしとはいへ、當時双壁を以て謳はるゝ紅葉露伴の壘を擊するが如きは、固より思ひ及ばぬところであつた。されば自己の本分を識るに賢明なる漣山人は、其の方向を轉換し、「こがね丸」に依つて得たる評判を忽にせず、進路を少年文學に求めて銳意努力、新境地の開拓に向つて全力を捧げたるは、博文館が少年文學に力を傾けしと同様、頗る賢明の策なりしと見るべきである。徳富蘇峰の評言に、余は漣山人の文を愛讀する一人なり。君が文を展讀する毎に、未だ曾て靜穩なる和樂を感ぜずんばあらず。余竊に云ふ、君が筆端には春風吹きつゝありと。

余は必ずしも君が文の心醉者に非ず。其の奇癖典麗、精細にして簡潔なる、固より紅葉の敵に非ず。其の雄拔驚悍にして熱火ある、亦た固より露伴に比す可からず、然れども樂んで淫せず、哀んで毀らず、大人にして少年の心を失はず、恒に人生の光明を描きて、常識の外に逸脱せざるに到ては、紅葉露伴の外、明治の小説界に一頭地を出だすと云ふも不可なきに似たり。余は君が著作の殆ど一點だも、不健全の要素を含まざるを識認するに憚らず。而して余は君が前途の進境駭々乎として、其の天才を發揮し、更らに能く世道人心を裨補せんことを待望する也。(日本昔噺序文)

と記せるは、眞に漣山人の長所短所を道破して、餘蘊なきに庶幾きものがある。

蓋し事を成功に導くと否とは、其の人と、時と、而して處とが、三位一體となりて、圓滑に緊密に、聯繫し協力するや否やにある。即ち漣山人は、明治少年文學の萌芽せんとする最好の時を得、博文館といへる新進堅實の處を得て、十二分に羽翼を張り、十二分に翱翔し得たものである。又これを處の側より見れば、當代唯一に推さるゝ、漣山人を得たる一事に依り、其の思ふがまゝに英才を發露せしめ、其の天分を伸張せしめる事に依つて、莫大の成果を贏ち得たるものと云ふべく、能く明治少年文學界の一半を獨領したのである。即ち漣山人以前に少年文學無く、博文館以前に少年文學莫しといふも、敢て溢美の言ではあるまい。

併しながら少年文學は、これを大人用の文學に比して、酬いらるゝ所甚だ薄く、其の作品は著し



く低く評價せられ、爲めに假令自ら傑作と信じ、佳篇と認むべき者と雖も、殆ど世評に上ること無く、識者も亦これに對して、多くは吾關せず焉の態度を以て臨むを常とする。故に少年文學に従事する者は、世間の毀譽褒貶を度外視して、名聲報酬を閑却し、超然たる意志と態度とを堅守すべきを要とした。漣山人のいはゆる織子扱ひをも甘受しなければならなかつたのである。

而も漣山人は、かゝる囂中に在りて、孜々として倦まず撓まず、自己の往くべき道は、此の一筋以外他に無しとの、堅き信念に生き、よしや世評に上るが上るまいが、石の上にも三年の覺悟を以て、専ら子供對手に終始したるは、亦尋常一様者の做ひ難き美點といはざるを得ぬ。

かくて數年、時代の進運に伴ひて、漸く其の努力は酬いられ、遂にお伽噺てふ不壞の世界を建設し、所謂お伽宗の開祖として、世間の萬人に仰がるゝに至り、天下唯一の少年文學者を以て遇せらるゝに至つたのである。

恰も此の當時、將來有望の少年文學者として囑望せられし人は、必ずしも五六指のみではなかつた。試みにこれを擧ぐれば、小波門下及び其の系統に屬する者には、生田葵山、黒田湖山、西村渚山、尾上新兵衛、金子紫草（舊姓千葉）、諸星絲遊、小野小峽、沼田笠峰、川上鈴舟等があり、また江見水蔭の率ゐる江水社には、新田靜濤、磯萍水、大澤天仙、竹貫佳水、谷活東、松見佐雄等が數へられた。

更に紅葉門下には、泉鏡花、徳田秋聲、柳川春葉、藤井紫明、泉斜汀等が、それ／＼少年文學界に進出し、又幸田露伴の門下には、神谷鶴伴、三島霜川、米光關月、川崎醉雨等を出し、川上眉山の門下には岩田烏山（鴨夢）があり、これ等硯友社系統を他に於て、早稲田派の坪内逍遙門には、杉谷代水、正宗白鳥、中島孤島、西村醉夢等を數へ、文部省には吉岡向陽（郷甫）、高野斑山（辰之）が在り、其の他何れにも屬せざる有名無名の作家多く、雲の如くに簇り起り、各々の雜誌、叢書、單行本に據りて、或は新作お伽噺に、又は廣き意味の少年讀み物に、各自妍を競ひ麗を争ひ、眞に多士濟々前途洋々たるを思はせた。

翻つて看るに、此の當時の状態は、能力あり、文才ある者が、志望を文學に立つるとも、其の門頗る狭く、容易に入り難き憾あり、隨つて特別の傳手を求めて、名ある文士の門に贅を執り、相當年月の間師の玄關を守り、刻苦精勵心思を潜め、然る後師の許諾乃至其の斡旋に依りて、漸く自己の作品を公にし、或は新聞雜誌社に招聘せられて、茲に初めて文壇の一隅に名を列ぬるといふが、蓋し一般の傾向であつた。例へば紅葉門下の鏡花、秋聲、春葉、若しくは漣門に於ける葵山、湖山の諸子等、比々皆然らぬはない。

而して以上列擧したる多數の諸子が、果して其の生涯を通じて、少年文學の爲めに献身したるか否かを見るに——勿論純文藝に成功したる人は別として、意外にも大部分は他に逸脱し去り、能く



残存して孤壘を守れる者は、殆ど數ふるに足らぬ有様である。他は兎もあれ、少くも漣門下に於ける諸子が、何故に殆ど一も成功の域に達し得ざりしかと云ふに、固より其の天分の多寡に因ること疑ふべくもあらぬが、同時にお伽噺の世界の、いかに狹隘に、且至難なるかを物語つて餘りある所以が頷かれよう。

そは、既に言へる如く、時と處とを得るにあらずば、如何に非凡の手腕を發揮せんとするも、遂に及び難きを如何せむ。即ち有力なる發表機關に據り、絶えず其の作品を世に問ひ、以て天下の評判を占めざる限り、到底驥足を伸ばすに難く、况や單なる流行の波に乗じ、何等の蘊蓄もなく、何等の根柢も無き者に於てをや。故に一方辯舌に爽かなる者は、筆に代ふるに舌を以てし、遍く都鄙を巡行して、直接口演を行ひ、相當の成果を收むるに至れるのも、或はこれ半面の勝利者といふべきであらう。

願ふに明治の末年には、多種多様の少年雑誌が群立し、且少年讀み物の方面に進出せる出版者も亦續出した。併しながら此等の少年雑誌とても、各々其の據る所ありて、殊更に門塹を高くし、何人にも自由に出入を許さざりしは事實である。随つて門外者流のお伽噺、少年小説等の創作發表の機關としては、十分にこれを活用し得ず、偶々其の一二篇を採用せらるゝも、擔任記者以外の同一人名が、常に其の誌面に出現する時は、さなきだに新奇と變化とを生命とする誌面が、爲めに著し

く單調に墮し、讀者をして倦ましむるの虞れあり——特に高名の作家ならば、却つて歡迎せられしも——營業政策の見地より甚だ好ましからぬ事象とせられ、爲めに其の處を得ぬ人々は、勢ひ他に轉向するの已むを得ぬこととなるのである。

かくの如き状態なれば、其の初め多數有望なる少年作家の輩出したるに拘らず、多くは中道にして挫折し、或は方向轉換を行ひて、漸次其の影を潜め、眞に一流の少年文學者として世に立てる者の、寥々たるものありし事情も、詮ずるところ、自己の天分の足らざること、研究の足らざること、而して時と處とを得ざりしことに、其の眞因の存したるを想像せられるのである。

### 第七節 お伽噺に就て

世界何れの所にもありても、昔嘶無き國はあらざるべし。蓋し是れ身體に衣食を要し、心情に安慰を求むると一般にして、精神上缺くべからざる一種の要素なるべきか。

古代人智未だ開けざる時にありては、事物の理を解することなく、天然現象の端倪すべからざる轉化を見て、只驚駭する外なかりしなり。然りと雖も人心の需用豈此に止まるべけんや。驚駭疑念は、人智發達の萌芽にして、此より益々想像を廻らし、日月星辰を初めとして、山川風雨の現象に至るまで、皆恰も神靈たるが如くに説明し、以て當時に於ける疑念を晴らし、其智



的要求を満足せしめんと欲するに至りたり、所謂古代神話の如きは即ち是れなり。其中には單に智的要求に應じて、現象を説明せんとしたるものあり、世界開闢の説話の如し。或は小説的なるものあり、日月山川を以て古代の英雄に擬し、是等の現象を人類の行動の如くに看做せるものは是れなり。又或は訓誡的なるものあり、本書の如きは、多くは訓誡的を旨としたるに似たり。

夫れ兒童は、古代の人民と同じく、驚駭疑惑の念常に充滿し、且つ頗る想像に富む者なり、故に彼等を教育するに當り、其理解力の尤す限り、天然現象を説明して、其驚駭疑惑の念を晴らし、且つ其想像を利用して、巧みに訓誡を施す時は、其功蓋し少なからざるべし。只實際に有り得べきこと、單に空想に止まること、は、明かに之を區別し、兒童をして誤想を生ぜしめざらんことに注意するを要す。

加之、昔噺は其國民或は地方人心の氣質を代表するものなるのみならず、之によりて兒童の氣質に及ぼす所の影響亦少しといふべからず、其選擇豈忽にすべけんや云々。

以上の意見は、當代唯一の心理學者元良(勇次郎)文學博士が、例の「日本昔噺」の一篇に叙したる説である。即ち昔噺——廣義にいふお伽噺が、心理學者の眼に、如何に映じたるかは、これに依つて、略推知し得られよう。

これより幾數年(明治廿五年)、内田不知菴は、「讀小説法」の中に、次の如き解説を試みて居る。

小説の嗜好は、精神の發育に伴うて推移す。垂髫未だ慈母の膝を離れざる時に當つてや、世界は怪異を以て充ちたる一塊物にして、其小さき眼を張つて凝視すれば、金石草木鳥獸蟲魚、悉く是れ不思議ならざるはなし。肥滿せる人來れば、之を以て長人ゴライヤンと爲し、玩具を與ふる者あれば、之を見るに神人フエアライを以てす。猫も犬も、人形も、靈智を具へ、隨意に談話を試むるものとなし、少しく錯雜せる事實に接すれば、直ちに魔法の爲す所なりと考ふ。

此故に、是等童幼の欲を飽かしめむとすれば、特に此殊相に注意し、惣て何事も單純にして且つ驚奇のものたらしめざるべからず。見よや、溪流に漂へる桃實は偉大なる桃トモ太郎を生めり。彼の糧食は黍アヲ團子なり、彼の兵卒は犬と猿と雉子なり、彼の敵國は鬼ヶ島オニノシマなり、彼が掠奪せしは寶物なり、ドンブラコたる桃の實に初まり、鬼ヶ島棟梁の降伏に終る。其の間日本一の黍團子、双角青面の鬼卒、犬のワン／＼、猿のキヤツ／＼、雉子のケン／＼、何れか兒童の好奇心を満足せしむるものならざるべき。狸汁、婆汁、木の舟、土の舟、かち／＼山、舌切り雀、花咲爺、猿蟹合戦、小石を辿るホポマイサム、番瓜に乗するシンデレラ、惣て是れ孩子が眼中に映ずるの世界なり。

漸く長ずるに及んで、喧嘩棒ちぎり、犬を追ひ、石を投ぐるの時來れば、長人と神人は、忽ち



頭腦より放逐せられ、代つて其地位を占むるものは則ちお山の大將なり。されば是等活潑なるいたづら子の嗜欲を飽かしむる物語を編まんとすれば、先づ勇猛なる兒子、若しくは青年を以て主人公と爲し、之をして萬里波濤の壯遊をなさしめ、忽爾暴風を起して船體を破壊し、怒濤に揺られ、終に無人島に漂着せしめ、若しくは黒色土蠻の手に委せしめ、九死一生の苦闘を爲さしめ、殆んど神に類するの行爲を以て之を威服し、一度威服して忠實なる僮僕となれば、之を伴うて益々内地に侵入し、犀、河馬、虎、豹、獅子等の猛獸と戦ふの物語を羅列せよ、兒童必ず之を愛讀して、卷を釋くに忍びざらむ云々。

と、一般兒童の趣味が、所謂お伽噺を経て、冒險小説に移行する経路を述べし點は、大に首肯するに足るものがある。而も小波山人の創作お伽噺は、正しく不知菴の意見に一致する點多きを認められる。

併し今日にては、お伽噺は既に過去の遺物として葬り去られ、僅かに古傳の桃太郎、舌切雀、花咲爺等の幾種か、兒童用繪本として辛うじて其の面影を留むるに過ぎぬ状態なるは、聊か寂寞を感じざるを得ない。曾て明治維新を大成したる偉人も、或は外敵を撃滅して現代の隆運を將來したる英雄も、其の幼時、母の膝下にこれ等の説話を聽きて、悠遠なる想像の世界に歡遊したることを想ふ時、更に一層の寂寞を覺えしめるものがある。殊に况や現代に於て、新作お伽噺類が、殆ど全

く其の跡を絶ちて、縹渺無限の空想を、兒童の世界より除去したるは、果して何故であらうか。少くも明治の精神を復活して、更に一層雄大なる、進歩的お伽噺の世界を創造するは、蓋し刻下の一大緊要事ではあるまいか。

現代に「お伽の國」若しくは「お伽の世界」といへば、凡そ吾等の實生活とは全くかけ離れたる世界——例へば南洋の王の國とか、阿非利加の奥地とか、かゝる別天地に於ける奇異、珍妙なる原始的生活を表現すべき場合に於て、僅かに此の文字は使用せられてゐる。而も現代にいふ童話なる者は、凡そ明治時代のお伽噺に比して、其の庶幾せる目標に、著しき相違あることは、亦言ふまでもないであらう。

蓋し現時の童話は、兒童の實生活に即し、殆ど其の有りの儘を記述して、切實に感銘を與ふるに足るべきも、何等神韻の掬すべきなく、又何等大らかなる空想の世界に悠遊せしめるでもなく、只恰侷にして感心なる兒童の心性を表現するに専らなるものゝ如く、吾人のいふお伽噺とは、甚だ縁遠き感を催さしめるのである。

惟ふに今日の世相は、複雑多岐にして、自肅緊張を要すべき時代なれば、かの悠揚たるお伽噺を創作し、且これを推奨するの餘裕無きやに考へらるゝも、指導的地位に立てる童話作者が深く此の點に想を潜め、常に現實の生活にのみ終始することなく、更に一步を進めて、未來の大人物養成を



理想とし、雄大無邊なる構想の下に、高渾なる想像の世界を將來せんことを希望する。勿論、二十年三十年の過去を顧みて、これに還元するの要なく、亦必ずしも先人の後蹤を追ふことなく、更に陳腐なるお伽噺の文字に拘泥することなく、現代及び將來に適應すべき、新鮮、雄渾、潑刺たる大童話の創造に向つて邁進すべきは、童話作家の往くべき途ではあるまいか。

次に、我國の所産たる、「お伽草子」の發生に就いて、萩野（由之）文學博士の歴史的解説を掲げて参考に供しよう。

上略、お伽草子は、短篇の草子物語二十三種の惣名なり、その書は徳川氏の中世に出でたる板本と、近く明治二十四年に、今泉昌山の二氏の校刻せる活版本と二種ありて、普く人の知る所なるべけれども、先づ其の名を擧げん。

- |            |            |
|------------|------------|
| 第一、文正草子。   | 第二、鉢かづき。   |
| 第三、小野小町。   | 第四、御曹子島渡り。 |
| 第五、唐糸草子。   | 第六、木幡きつね。  |
| 第七、七草さうし。  | 第八、猿源氏草子。  |
| 第九、物臭太郎。   | 第十、さゞれいし。  |
| 第十一、蛤のさうし。 | 第十二、子敦盛。   |

- |             |            |
|-------------|------------|
| 第十三、二十四孝。   | 第十四、梵天國。   |
| 第十五、のせざる草子。 | 第十六、猫のさうし。 |
| 第十七、濱出草子。   | 第十八、和泉式部。  |
| 第十九、一寸法師    | 第二十、さかき。   |
| 第廿一、浦島太郎。   | 第廿二、酒顯童子。  |
| 第廿三、横笛草子。   |            |

是なり。この草子どもの時代は、第廿二酒顯童子草子は、大江山繪詞ともいひて、兼好法師の筆なるものありといへば、南北朝の比の物なるべく、第十六猫の草子は、慶長七年の文見えたれば、徳川氏の初世の物なり。されば大凡この時代の間に出來たる草子なること明けし。其の作者は、すべて傳はらず。

さて是を集めて、お伽草子と名づけたるは、何時の頃にか、古板本に其の年を記さざれば明ならず。貞享二年の廣益書籍目録に、この内の草子をよく載せたれども、叢書としてのお伽草子の名をば記さず。或は元祿の頃などにや名づけつらん、そは尙考ふべきことなり。

湯淺常山の文會雜記に、おとぎ冊子は、至て好書なりと君修の評あり、五朝小説の中の咄をよく染かへしたるもの也と、君修の友人、小説よく讀む人の云へることなりと記せり。君修とは



松崎觀海、名は維時といへるが字なり。五朝小説といふもの未見ねばこの評の當否は知らざれども、此の草子の趣向は様々にて、或は大福長者の宿世よくて目出度事を種とせるあり、或は繼母に苦しめらるゝ悲哀小説あり、或は滑稽の物語、或は因果應報の理を含ませたる佛教小説、さては孝子の傳、浮世物語など、何と指せることもなく、幼稚を噓し誘く話の種を主とせるものなり。

されば僅なる叢書にはあれども、足利時代より徳川氏の初にかけての、文學の資料として見る時は、確にその時代の或る方面を明らかに得べし。故に近時本邦の文學史を研究する人は、必ずこの草子を其の材料の一つに供ふ。されどもこの草子が收むる所、僅に廿三種に止まれるは、物足らぬ心地せざることを得ず。先輩が、この新編お伽草子を集め置きたるは、この不足を補はんの料にとてか、即余と感を同じくするものなるべし。

足利時代といへば、人は皆文學の暗黒時代とおもひ、徳川時代といへば、文學繁昌の時代といふ。これ大體において否定すべからざる事ながら、暗黒の中にも光明あり、光明のうちにも暗黒あることを思はざるべからず。抑も國文學は、王朝時代においては全く公卿の手に在り、故に當時の文學はすべて上流にのみ行はれて、下級の士民に普及せざりしが、鎌倉時代を経て、足利に至りては、次第に下層に推し及ぼすべき傾向を生じ、徳川氏に至りては、詩人をして海

内文章落布衣といはしむるに至れり。

此の詩の意味に於ては、公卿に文學者なきを慨歎せしものなれども、文學の發達の爲には、布衣に落ちたるが却てその幸福なりしなり。而してこの文學を、縉紳の手より傳へて、布衣に興奪せしものは、即ち緇衣の徒なりしなり。宗教の目には貴賤平等なり。僧侶が教法を流布するに、公卿士庶を論ずることなきが故に、文學をも貴賤上下に普及せしむること、尤適當の地位たるに因れり。

文學が僧徒の手に落ちて、脂粉の氣は抹香臭に變じたりと嘲るものあれども、この時代の文學にも儘に其の特色を認め得べし。從來王朝の文學は、概して寫實的抒情的なりしもの、此に至りては、教訓的諷刺的意思を以て書けるものを出せるも其の一なり。神皇正統記の皇位の傍正を論じて世道人心を正し、太平記の忠臣義士の事跡を叙して勤王の心を鼓舞し、徒然草が世態人情を洞觀して名利の避くべきを説けるなどは言ふも更なり、かのはかなき小草子の、桃太郎鬼ヶ島渡り、花咲爺、かち／＼山などの話説、いづれか勸懲の理を示すたつきならざる。

徳川文學に至りては、諸種の方面おの／＼發達して、光華を競ふに至れりと雖も、その初めて特色を現はせるは、元祿以後にあり。仁齋徂徠の經學、水戸諸儒の史學、契沖長流の國學を初めとして、芭蕉の俳諧、近松の院本等、皆この際に起れるものなり。元祿は即ち徳川文學の初



めて新旗幟を樹てたる時なり。慶長元和の治平より、元祿に至るまで小百年の間は、文學次第に盛なりといへども、なほ翻譯の時代なり、模倣の時代なり。

試みにこの頃の著作を見よ、源氏物語を譯して若草源氏あり、雛鶴源氏あり、伊勢物語に擬して仁勢物語あり、太平記に擬して虫太平記、魚太平記、草木太平記あり、徒然草にならひて、犬つれぐあり、續つれぐあり、枕草子にならひて、尤の草子あり、又犬枕と題したるもあり、古今集の序に擬して古今若衆といへるものさへ出來たり。たゞこの種類のもが、翻譯模倣たるのみならず、經說にもあれ詩文にもあれ、さては歌俳諧書畫までも、皆多くは足利時代の型範を墨守せしに過ぎざりき。

されども翻譯模倣の内より、又換骨脱胎の手腕を振ふものを生じて、遂におのづからなる其の特長を發表するに至るは、物の發達の順序なるべし。業陰比事が行はれしによりて、翻譯の平假名業陰比事出づ、而して櫻陰比事がこれを本邦の事に翻譯して出だせるは、たしかに一の進歩なりき。戯曲の如きも井上播磨掾が語りきといへる曲目を見るに、兵庫の築島、二王の本地さては十二段草子を作りかへたる新十二段などなるが如き、山本土佐掾に至りては、小敦盛、鉢かづき、浦島太郎、酒頭童子、さては梵天國など、お伽草子を種となせるもの多く見ゆ。近松巢林子の如きも、其の初めに成れるものは、概古草子謡曲を粉本となしつる跡著しきに、晩

年の作に至り、始て渾和天成遂に一派の法門を開けり云々。

萩野博士は、以上掲ぐる如き解説を附して、從來流布せる「お伽草子」に漏れたるもの約二十篇を集め、「新編お伽草子」を編みてこれが完璧を期し、且其の湮滅を未然に防止せる一事は、感謝に値すべきものである。

「新編お伽草子」の内容は、福富草子。十番の物争ひ。音なし草子。わか草。かさしの姫君。常盤の姫。小おちくぼ。今宵の少將。毘沙門の本地。貴船の本地。十二段草子。つき鳥。化物草子。魚鳥平家。狐の草子。こうろぎ草子。玉虫の草子。柿本の系圖。立烏帽子。尤の草子を以てする。次に掲ぐるは、此の内の「毘沙門の本地」の一節にて、其の文體と構想は、略推量し得られよう。

むかし天然に國あり、名を瞿婁國とぞ申しける。其國に王一人おはします。御名をばせんさいわうとぞ申しける。萬めでたき事人に勝れておはします。時に從ひ寶の降ること雨の如くなり。何れも一天下におろかなる事おはせども、是を例し跡なき事にぞ申ける。天が下、なびかぬ草木もなし。寶日に從ひて降り下り、白銀黄金の築地に黄金の扉をたて、庭には金銀瑠璃を敷き、黄金の砂ごを鏤ばめ、泉水の樹立は光りを交へたる心地して、おもしろき事申すばかりもなし。内裡には鶯の羽鷹の羽にて、宴室造りにぞ葺れたり。金の瓦に鍔がねの床を並べ、錦の几帳を立られたり。百八十間の御簾に金の細を百廿丈に組まれたり。其うちに一萬人の公卿大



臣、三千人の女官達に圍繞せられておはします有様、例しすくなくぞ見えさせ給ふ。

されども行末千秋萬歳を有たせ給ふべきと思召すとも、老の身は人をも嫌はぬ事なれば、大王も后も齡傾きましますことぞ哀れなる。既に大王は御歳九十にぞならせ給ふ、后は六十にならせ給へども、末の世を繼がせ給ふべき王子一人も無し。せめて姫宮にてもおはしまさねば、めでたき御中にも、事の外なる騒ぎにてぞおはします。

公卿僉議あるやうは、昔よりこのかた、人は申子まうしこをする事ぞと傳へたり。末の世を繼がせ給ふべき王子一人もましますねば、國の煩ひなるべしと申させ給へば、大王げにもと思召、利生あらたにまします梵王へぞ参らせ給ひける。されども效しも無し。其時寶を傾け参らせんとて、白銀千兩、黄金千兩、絹綾千匹参らせて、其うへに一萬五千兩を寄せ給ふ。また善を爲れば協ふとて、千僧供養をして九重の塔を建て、忌々しき願を申させ給ふ。

三七日と申す夜半ばかりなるに、御戸を押し開き給ひて、御とし八十ばかりなる翁、殿杖にすがり給ひて、少し繕ひて申させ給ふやう、御身の子種を天に昇り地に入り、六天を初めて三千大千世界を尋ねれども更に無し、取らんとすれば水となり火となり候。いはれば、君はむかし小鷹にて、よろづ鳥類翼の命をとり給ひしが、或僧のあらたに經讀み給ひしを聴聞したまひし故に、南洲の國にきんわうといふ民に生れて誓を立てし事、我世に在らん間、僧を空しく通さ

じといふ願を立て、常に窟くわく施行引きつるにより、この國の大王と生まれ給ひけり。心ざし深きは富貴の家にうまるゝ、然りといへども過去に物の命を殺しつるにより、今子の種有らず、后は前の世は日本美濃の國の二尋の蛇にてありしが、物の命を殺しつるが法花經の御壁を耳に觸



日本のお伽文庫表紙(米齋筆)

れしにより、かたじけなくも後の位に生まれ給へども、子種能はず、汝が思ふより、予が尋ぬるは苦しきなりと仰せければ、大王畏まつて申給ふ、假令佛の御子なりとも賜はり候つるものならば、七寶の堂を黄金白銀にて組みて参らせんとて、肝膽を碎き祈り申させ

給へば、十方淨土へ参り、佛に申、得難き子種を申請て、如寶珠の玉を一つ申下しけると御覽じて、殊に光りめでたきを、后の左の御袖に賜り候と思召して、やがて其れよりして、いつし



か后御懷妊ありて、悦ばせ給ふこと限りなし云々。

此の「毘沙門の本地」は、數十葉に上る長篇なるが、法華の功力と、因果應報の理を説示して、勸懲の資料たらしめたる點より推せば、勿論僧徒の手に成れるものに相違ない。蓋し足利末期より江戸中期に亘り、悠々三百數十年、我國の上流子女等は、かゝる形式のお伽草子によりて教訓せられ、次で桃太郎、花咲爺等の、純然たる昔噺に、幾多微妙なる夢幻の世界に遊び、更に明治中期以降、巖谷小波の出現に依り、同期間の児童は、長短多數の新作お伽噺に陶醉し得た。今や邁進雄飛の光榮ある時代である、世界的大創作家の出現亦期して待つべき者があらう。

猶ほ小波山人は大正初頭の頃、「日本お伽文庫」の題下に、上記の「お伽草子」及び「新編お伽草子」を基本として新しき一叢書の編纂を企圖し「正文草子」「鉢かつぎ」「牛若島巡り」等を紹介したるが、却つて時代に逆行せる感もあり、惜しい哉多く世に行はれずして中絶するに至つた。勿論これが詳細なる経緯は、「大正篇」に詳記せられるべき豫定である。

### 第八節 「お伽花籠」其の他

小波山人が、十餘年間の努力の結晶ともいふべき、「世界お伽噺」全百篇の完成を記念すべく、神田東京座に、前後五日間を期して、盛大なる「お伽祭」を催し、満都の少年少女をして歡喜踴躍

せしめたるは、實に明治四十一年六月であつた。而して「袖珍日本昔噺」が、此の記念の一として美裝を凝らして世に出たのも、亦同じ時日であつた。



お伽花籠の扉 (筆水非)

また一方、小波山人の知友、並に門下一同協力して「お伽花籠」なる一書を編纂したるは、實にこれに先立つこと二ヶ月、恰も櫻花爛漫たる四月の好季節を卜し、上野常盤華壇に一夕の祝會を催して、小波山人を圍みつゝ、なごやかなる半宵を過したのである。

さて「お伽花籠」は、十名の作家と、十名の畫家とに依つて編成せられ、主として「少年世界」及び「少女世界」の編輯同人と、これに加ふるに文部省關係の人々とが、其の中心と成り、書物の型式は、四六判クロス製約三百頁の頗る華麗なる美本であつた。元來多數作家の短篇を合輯して

「お伽花籠」其の他



一部のお伽本を編むは、一見色とり／＼にして、甚だ賑かなるには相違なきも、所謂どん栗の背較べにて、其の中心の那邊に在りやを疑はれ、随つてこれが出版上の効果は、一人一作の精魂を盡したる書物に比して著しく遜色あるものとせられる。殊に况やお伽噺は、元々小波山人の専賣物だけに、後輩の手に編める「お伽花籠」の成功如何は、出版者に於ても、多くの期待を懸け得ざりしは事實である。

併し此の書は、世界お伽噺完成記念といふ點に、特別の強味が有り、且これが執筆者等も、存分の熱意を傾け、更に一方には、各自受持の雑誌上に、随時宣傳紹介に努めたと、相俟つて豫期以上の効果を收め、出版數月ならずして、數版を重ねるの景況を見た。

此の書に收むる所は、犬の名前（西村渚山作・橋本邦助畫）、靈の水（沼田笠峰作・橋本清方畫）、蝦夷の鍛冶（吉岡尚陽作・山中古洞畫）、琴の由來（高野斑山作・田代古唄畫）、爪助物語（竹貫佳水作・木村光太郎畫）、錦太郎（武田櫻桃作・宮川春汀畫）、金馬銀馬（黒田湖山作・岡野榮畫）、魔法の森（窪田空々作・杉浦非水畫）、お伽國大王（福田琴月作・桐谷洗鱗畫）、赤天王（木村小舟作・名和永年畫）を以てし、これ等の挿畫は、すべて石版多色刷に依り、各篇の首部に配置して光彩を放たせ、表紙扉等は、杉浦非水の超凡なる新意匠を用ひ、金色燦然頗る見榮のある好冊子であつた。

なほ此の作者の中、窪田空々（重戈）は、日露戦争に際し、新軍艦日進の主計長（海軍主計中監）として出征し、「少年世界」にも屢々戦地より通信を寄せ、或は又海軍に關する趣味ある記事を草して、少年間に知己多き人である。

又、此の書には、上田萬年、芳賀矢一兩博士の序文を請ひ受け、これを巻頭に掲げて異彩を放たせた。上田博士の序文に曰ふ。

今度、巖谷小波君の世界お伽噺が完成したに就いて、同君の知友や門人の諸氏が、其の記念として、「お伽花籠」と題する一書を編し、これを小波君に贈るに依り、其の序文を僕に書けと云う、頗る結構なことであるから、僕が即座にお受けをしたのである。

實わかくいふ僕も、小波君の世界お伽噺、其の第一編からの愛讀者であるばかりでなく、同君がこれを創められるに就いて、僕に相談があつた時にも、僕が双手をあげて熱心にこれを賛成した一人である。のみならず僕も、小波君よりも前に、お伽噺を試みた一人である。が、君が成功せられたに反して、僕が見事に失敗した一人であると云うことも、こゝに改めて白状しなければならぬ。

僕が、はじめにお伽噺に筆を採つたのわ、有名なグリム童話の狼と七匹の小山羊を譯して、「お伽花籠」と題する一冊を、吉川書店から出した。時わ明治廿二年のことで、家庭叢話と云う題の下に、十編も二十編も續けるつもりであつたが、いろ／＼の事情から、只一冊だけで中止し



たのである。

ところが、それよりも前に、やはり同じ狼の話が、有名なる統計學者吳文聰氏の手によつて譯され、明治廿年の七月に、西洋昔話第一「八ツ山羊」と云う題の下に、弘文社から發行せられていたことを、後に至つて知つたのであるが、不思議やこれも只一編しか出なかつたものと見える。

かくの如く吳氏も僕も、みんな不成功に終つたのを、巖谷君が見事に大勝利を占められたのわ、僕の大きい愉快に感ずる所だ。故に此の機を利用して、僕は多年秘藏の「おうかみ」及び「八ツ山羊」をば、小波君に献じたのである。

殊に、僕の一そう嬉しく思うのわ、僕等のかねて熱心に主張して居る改訂假名遣が、小波君の著書をはじめ、この「お伽花籠」によつて、天下幾百萬の少年少女に弘まりつゝあることである。

右の序文に依つて、三つの注意しなければならぬ問題が考へられる。即ち本邦に輸入せられしグリム童話の中にて、「狼と八匹の山羊」は、最も早く、幾人もの手によつて、紹介せられてゐることと、而もそれ等は時機尙早の爲にや、或は其所を得なかつた結果にや、何れも不成功に終れる事である。——「小國民」にも、後には「少年世界」にも、此の説話は原説のまゝ、若しくは再話の

形式にて取扱はれてゐる——。

次に本書の第一編第十六節「初期の兒童書類」の中に、「おほかみ」と「八ツ山羊」とを、同じ上田博士の手に成れる者の如くに記録し、それが異なる題材であり、且發行年月を、明治廿三年と推定した。然るに此の記述に依りて、「八ツ山羊」は、別人の手に譯され、猶ほ其の發行所を異にせることが明かにせられてゐる。これは自分の記憶の混沌より起れる誤謬なれば、特に此の機會に其の過誤を正して、讀者に陳謝しなければならぬ。

今一つは、「お伽花籠」の各篇の文體が、上田博士等の主張に基き、小波山人の所謂お伽假名によりて、全篇を統一せることである、此の一事は特に同博士の希望に従ひ、其の慫慂に従へる次第であつた。

餘談ながら恰も此の當時、自分は或る知己の書肆の依頼を受けて、「日本歴史畫譚」と題する一書を編み、上田博士の著者名に因り度き旨を懇請したるに、博士は言下に、其の一切の記事に、改訂假名遣（わ假名）を使用せば、敢て異存は無しとの條件にて、頗る快く承諾せられしことがある。即ち此の一事に徴するも、いかに上田博士が改訂假名遣の普及に努力したるか想像するに足るであらう。

そは兎もあれ、初め可なり成果を危ぶまれし「お伽花籠」は、案するよりは産むが易しの譬に漏



れず、豫想以上の効果を収むるや、これに力を得たる執筆者等は、更に其の姉妹篇として、「お伽テーブル」と名づくる一書を續發するに至つた。木に竹を接ぐと云はんか、一見甚だ奇妙なる書名にはあれ、初め此の書編纂の會議を日本橋の偕樂園に催したる際、朱塗の大圓卓を圍みて、食事しつつ各自意見を闘はせ、其の圓卓を取つて題名としたるにて、當時としては頗るハイカラ式を發揮せるものと見られた。

次で其の後小波山人は、渡米實業團に加はり、澁澤團長に隨行して彼の地に渡航するや、其の歸朝歓迎の意味を以て、前記「お伽テーブル」の執筆者等は、直ちに緊急協議會を催し、第三出版物として、「お伽寶船」なる一書を企て、最大速力を以て一切の事務を推進せしめ、恰も實業團一行の乗船が、横濱埠頭に安着する時刻を過たず、滞りなく其の一本を作りて船中の小波山人に捧げたのである。猶ほまた第四回目には、小波山人の病氣全快を記念して、「お伽バラダイス」一巻を合作し、「お伽花籠」に縁ある常盤華壇に同人相催して小波山人を迎へ、心からなる祝會を開ける事もあつた。

かくの如く、「お伽花籠」以下、都合四種の合作お伽集は、各異なる意味に於ける記念出版なりしだけに、其の形式といひ、また内容といひ、姉妹篇の實を發揮して、四部完璧の美を保たせ、讀者の歓迎を受けたが、更に大正時代に入りて後も、亦同様の計畫の下に、或は「お伽の森」、若しくは「お伽の日本」と次々に三四篇の記念出版物を續刊してお伽文學界に貢献したのである。而もこれ等の作家同人には、各篇毎に、二三の加除を生じ、又其の取材にも趣向の新規を求むる等、直接編纂の任に當る者は、良きが上にも猶ほ良からんことを期したるも、最早や今日に至りては、それ等の冊子全く市場に影を絶ち、且これが作家の大部分も、既に殆ど世を替へ、偶々生存せる者も、悉く他方面に轉じ去つて、空しく世間に忘れられたるは、轉た寂寥の感を深うせざるを得ない。

### 第九節 「少年世界」第十二卷

翻つて又茲に暫く「少年世界」の行歩を検討するに、既に苦難雌伏の時代を經過し、明朗なる第十二卷（明治卅九年）を迎ふるや、さながら順風に帆を張りて、千里一碧の大海洋を航走するにも似て、全誌面潑刺たる氣力を湛へ、實に前途洋々たるものあるを想はしめた。

即ち先づ表紙畫には、五色刷石版の諧調を以て二個の馬蹄形を表し、其の一個に表題を、他の一個に數面の童顔を點じ、綠鮮かなるクロバトと櫻花と白鳩とを綴りたる桂舟の意匠は、先づ讀者の眼を刮らせ、且從來石版多色刷に依れる西野猪久馬の動物標本畫も、本年度より新たに原色版印刷（三色版）を用ひて、これが眞髓を發揮するに努めた。



蓋し西野の動物標本畫は、微細なる鱗毛の美を克明に寫生し、一羽半鱗だも苟くもせず、爲めに其の姿態宛として生けるが如く、比類稀なる天稟の技術に拘らず、採算の點に妨げられて、心ならずも生硬の石版刷に依る外なく、眞の妙趣を傳へ難き憾多かつた。而も今や百尺の竿頭其の一步を進め、はじめてこれを原色版に附するに至れるは、正しく異常の進展と云はねばならぬ。

當時、我國に於ける原色版の製版及び印刷は、大江印刷所（大江太經營）の獨占到係り、既に兩三年來、文藝俱樂部の口繪に應用し、其の精巧なる印刷技術は、多大の好評を博せる所であつた。併し何分にも、印刷費不廉なる爲め、未だ廣く一般に利用せられず、各雜誌の編輯者をして、大いに望洋の感を深からしめたものである。

然るに本年度の「少年世界」は、敢然としてこれを採用し、斑馬、鴛、象、鰐、蝶、螻蛄など、季節に應じて、次々に局面の異なる優麗の筆致を漂はせ、大いに讀者の満足を得しのみならず、更に第二口繪として、日本畫壇の老手川端玉章に囑し、淡彩の毛筆習畫帖を挿み、且普通寫眞銅版には、光澤紙二丁、表裏四頁を以て専ら印刷の精美を期し、本文巻頭の十六頁には特別上等紙を使用して二色刷となせる等、恰も第九卷時代以上に、光華爛煥たるものがあつた。

次に本文の配置は、小波お伽噺（巻頭十六頁）、少年唱歌（小波作、鐘笛曲）、お話草、理科、地理、修身、歴史、陸海軍、農工商、英語、新遊戯、衛生、訪問記、文學、談叢、少年新聞、讀者の領分

（少年文及び少年通信）等に細別し、特に地理、歴史、理科等の學術記事は、何れも専門の博士大家の寄稿を以て填め盡すなど、眞に飛躍的の一大進境を見せた。

また、年四回の定期増刊は、「學校園」、「不思議世界」、「談話會」、「十二科目」の四種を選び、各



（筆舟桂）紙表卷二十第界世年少

異なる觀點より讀者を啓發するに努め、それ／＼に新味を横溢せしめし中に、第一増刊「學校園」は、恰も兩三年前、文部省普通學務局より沿く全國の小學校に對して、學校園設置の必要と、これが利用とを傳達するところあり、爲めに各學校とも競つて校庭の一部に

植物園を附設し、業績大いに見るべきものがあつた。即ちこゝに關心を持して此の増刊を編纂するや、時季に恰當せる故にや、大いに少年間の好評を博し、未だ從來に例なき成果を挙げ得た。蓋し



此の一冊は、實用的要素を主とし、花卉蔬菜の栽培法、有用家畜類の飼養、魚鳥の養殖、或は蟲菌の防除等にまで及ぼし、學校園の經營者に對し、將た一般家庭に對し、園藝術の好手引たらしめるやう、良心的編輯に努めしものであつた。猶ほ第二増刊「不思議世界」は、内外古今の怪奇を輯録し、一々其の原因理由等を闡明して、迷信の打破を主眼とし、理學研究の必要を強調したるものに、往く道こそ異なれ、二者は正しく姉妹篇を成せるものであつた。

繰つて見るに、此の當時、我國の出版界を風靡したるは、陸軍中尉櫻井忠温の新著「肉彈」であつた。されば又此の好著は、嘗に大人間のみならず、少年社會にも廣く愛讀せられ、多大の感銘を享けしこと云ふまでもない。

勿論日露戰爭の最中にも、やゝ高級の戦記書類は少なからず發生せるも、それ等の多くは、さして世間に迎へられず、出版成績としては、殆ど失敗に終りし觀がある。而も暫く時を過ぎて現れたる此の「肉彈」は、さすがに身を激戰場裡に晒したる生々しき體驗談ではあり、文章亦優れ、爲めに俄然天下を沸騰せしむるに至り、次で現れたる水野海軍少佐の「此一戦」と共に、いはゆる戦記文學の双璧として、古語にいふ洛陽の紙價を高からしめたものである。

櫻井中尉は、曩に「初航海」を著したる、かの櫻井鷗村の實弟にて、旅順攻圍軍に参加し、勇戦奮闘の末、瀕死の重傷を蒙り、遂に右手を切斷するに至れる人、不便不自由なる左手を驅使して、

具さに當時の實感を記述し、茲に「肉彈」と題する一書を著して、果然戦記文學の首位を占むるに至つたのである。

然るに此の著書は、ゆくりなくも天聽に達し、微々たる一中尉の身を以て、辱くも天顔に咫尺し奉るの光榮に浴した。而して其の事の次第は、中尉の筆に依つて、「少年世界」に發表せられ、天下の少年をして感激措く能はざらしめた。「少年世界」は、此の當時櫻井中尉の戦争談を申受けて毎號特異の光彩たらしめたが、就中此の「拜謁の記」は、少年讀者に對して、最も大なる感銘を與へしものであつた。次に其の全文を掲げて、中尉の光榮を追憶しよう。

先頃私は精神教育の爲め、肉彈と名づくる一書を編みました。これが端なくも、岡澤侍從武官長の手を経て、辱くも天闕に達しました。これさへ身に餘る至大の名譽であるのに、特に思召を以て天顔に咫尺するの光榮を擔ひ、數ならぬ微小の身でありながら、破格の恩典を蒙り、聖慮の仁慈なるに感泣いたしました。

申すも畏れ多きことながら天皇陛下には日夜大御心を政事に注がせ給ひ、廣大無邊なる聖徳洽く津々浦々の賤が伏屋にまでも及ばせ給ふ、臣下たる者如何にして天恩の萬分一に報い奉ることが出来ませう。

世にも有難き御誼を受けました私は、去月二十五日午前十時三十分參内、十一時二十分岡澤



閣下に手を取られて、陛下の御座所に進みました。閣下は私の負傷の模様を始め、種々伏奏に及ばれますと、大元帥の御服を召されたる。陛下には、始終御起立の御姿勢で、一々玉音朗々として背かせ給ひ、御會釋を賜りました。私は如何にして當時の事をいひ表はすことが出来ませうか、唯雲の梯に登つたやうで、心魂恍惚、私の全身は、常に激しい鼓動を起して居りました。

これより先岡澤閣下には、私の戦歴、殊に未知の一勇卒が、己も亦負傷せるに拘らず、敵圍中に斃れたる私を、千辛萬苦の末、漸く救ひ出したる當時の模様や、書中にある忠烈なる兵卒の働きぶりを、詳しく天聴に達せられると、聖上には殊に御感あらせられたるのみか、微功もなき私に對して、此度の如き辱き御誼を給はつたので、そればかりでなく畏れ多くも陛下には私が歩行の出来るやうになりしやとの御下問に、閣下は恐る々々、歩行は大丈夫になりましたが、萬一の匱相なき爲め、私の手を取つて御座前に進むことを許し給はるやうに奏せられたるに、陛下はこれをお許しあらせられたのであると承りました。

聖恩の優渥なる、微臣が癡餘の身の上までも、大御心をかけさせ給ふ深大仁慈なる天恩に對して、感泣せずには居られませうか、草莽の卑臣いかにして能く陛下の御聖徳に應へ奉ることが出来ませうか、私が受けたる破格の光榮は、私の光榮ではなくて、一に私が再生の恩人たる勇卒の受けたる無上の光榮で、今は亡せし彼、若し知るあらば、地下に之を拜して、感涙を潑ぐことでせう。

退出後閣下は懇ろに陛下の思召のあるところを話されて、益々身體を勞つて、大君に盡せよとの訓へを給はりました。私は思はず涙に咽び癡餘の身なりとも、盡す誠は同じであると、今更ならぬ覺悟を強うするのです。

殊に閣下は御前に於て、中尉は素より陛下の御爲めに、一身を捧げて忠節を盡すを以て本分と致して居りますが、此上は益々聖恩に報じ奉らんことを決心して居ると申されました。嗚呼私は、如何にして聖恩に報い奉るべきでせうか、唯だ此上は、親愛なる少年諸子と、互に手を取つて、一朝有事の日には、陛下御馬前の塵となり、誓つて叡慮を安じ奉らねばなりません。

以上の如き感激の一文を、左手に託して少年の薫化に寄與する所あつた。蓋し櫻井中尉の如く、武勳赫々として高く、加ふるに文章に秀でたる青年將校を、寄稿家として迎へ得たる一事は、確かに「少年世界」の信用を價值づけるものと云はねばならぬ。

猶ほ、右の櫻井中尉と並びて、陸軍少佐猪谷不美男も、亦屢々軍事談を寄せて、少年の精神教育に力を傾けた。猪谷少佐は赤城と號し、夙に文武兼備の青年士官として著はれ、後に乃木大將の副



官として、専ら學習院の事務に携り、能く院長を輔佐して終始全力を傾け盡した。かくの如く「少年世界」は、戦後漸く人心の弛緩せんとするに鑑み、殊更に精神の陶冶に重點を置きて、絶えず新意匠を織り交ぜつゝ、最も堅實なる地歩を築き上げたのである。

### 第十節 「お伽共進會」の發行

明治四十年は、恰も博文館の創業二十周年に該當した。博文館といへば、過去現在我國出版界の牛耳を執り、前後四十年間に於ける各種の出版物は、優に數千百種を以て數へられ、あらゆる部門を網羅して餘す所なく、随つて我國の文化向上に、偉大なる足跡を印しつゝあるが、分けても、かの「幼年雜誌」以來、又かの「少年文學」以來、幼少年用の雜誌圖書をも連續發行して休まず、遂に此の種の權威を以て任ずるに至れる次第は、前段既に縷述し來たる所にて、何人も亦首肯し得るであらう。

然るに博文館は、茲に創業二十周年を迎ふるに當り、報效の微意を表すべく、各種の公益事業に寄附行爲を營むと共に、創業當日の六月十五日を期して、主なる雜誌の臨時増刊を企て、何れも紙數を増倍し、各其の特色を發揮せしめた。而して「少年世界」は、「お伽共進會」なる題名の下に、廣く天下に優賞を懸け、遍く新作のお伽噺を募集して、これを選抜編輯し、以て一部完好の書冊を

作り、隠れたる作家を顕して、將來の兒童文學に寄與すべき計畫を樹て、發行兩三月前より、其の主旨及び投稿規定を掲げて、大いに投書家の奮起を促すところあつた。



(筆也審) 紙表の會進共伽お

會て「少年世界」の愛讀者にして、初期に於ける漣山人のお伽噺に陶醉、親炙したる少年の多くは、今日既に青年、若しくは壯年となりて、或は文學に志望を抱くもあらう。或は又小學教師として、直接兒童に接觸し、一場の講話にお伽噺を演じて、幼時を追懐する人もあらう。更には文才すぐれ、特に少年文學に興味を有ちながら、其の驥足を伸すに道なきを歎

く者も、恐らくは少くないであらう。

こゝに於てか、これ等隠れたる有爲の新人を發見して、漸く沈滞せんとする我少年文學界に、一



脈の新鮮味を湛へしむるは、亦少年雑誌の經營者として、當然考慮すべき問題でなくてはならぬ。即ち、事實上より見るも、日露戦後に於ける我國の少年文學界は、只舊形式を墨守するのみにして、未だ新傾向の現はるゝものなく、而も此の現状に鑑みて、吾こそはと、私かに腕を撫して好機の到來を待てる者も、必ずや少からず存するであらう。併しながら由來お伽嘶の門戸は甚だ狭く、いはゆる新人の志す道は、殆ど閉塞せられて如何とも爲し難き状態にある。かゝる時、突如として發表したる「お伽共進會」發行の宣言は、此等有爲の人々にとりて、空谷の足音といふべきか、但は大早に雲霓を望むといふべきか、正しく豫期せざる好機に恵まれしものと見るべく、一たび其の發表あるや、期に遅れず規定に準じて、次々に送られ來るところの原稿は、連日十數篇の多きに上り、遂に豫期以上の夥しき數に達し、爲めにこれが整理に當る者は、亦頗る喜ばしき多忙を感じたのである。

さて、「お伽共進會」に收載すべき應募原稿の選評者としては、「少年世界」の主筆巖谷小波の外に、文學博士上田萬年、文學博士芳賀矢一の兩先輩を加へて、飽くまでも其の萬全を期した。蓋し上田博士は、「少年世界」初期以來の寄稿家にして、且お伽嘶の先覺者であり、芳賀博士は曾て「少年世界」の學事顧問欄に名を著して讀者間に名望を有し、而も現在兩博士共文部省に在りて國定教科書の編纂に携り、兒童讀み物に對しては、最も深き理解と認識と希望とを有てるもの、當代此の

二先覺を措いて、他に其の人無しといふも過言ではあるまい。即ち此の三大家が、新作お伽嘶の選評に當れる一事は、「お伽共進會」の聲價をして、一段と高からしめ、延いては應募者の勇奮を促したるものと想はれる。

なほ、此の募集原稿は、其の性質上、必ずしも少年投書家にのみ限らず、否寧ろ廣く少年文學に認識を有てる人々の翼賛に俟てるものなれば、年齢にも地位にも更に拘束を加へず、只誌上に收載する關係にて、これが字數を制限するに止め、頗る自由性を多からしめしことゝて、各方面の反響を喚起し、爲めに其のメ切期日までには、相當知名の教育家、及び文學者、一般社會の人々、並に少年投書家等、從來に全く類例を見ざる多種多方面に亘りてこれが募りに應じ來り、隨つて取捨選擇亦實に容易ならぬものがあつた。

かくて先づ順序として、編輯記者の手許に一應の點檢を施し、規定に違反せるもの、若しくは構想の幼稚、陳腐、拙劣にして、到底選評に入り難きもの、或は翻譯、翻案の臭味濃厚なるもの、又は文字甚だしく亂雜を極め、讀下頗る困難なるもの等、即ち選者の手に交付するに足らざる作品をば、遺憾ながらこれを淘汰し、漸次篩にかけて、愈々巧を留め拙を排け、最も慎重に、最も親切に數次の嚴選を重ね、最後に十數篇の佳作を残すと共に、第一に小波の手許に於て、其の採點を定め而も嚴秘に附し、次で上田、芳賀兩博士の綿密なる査定を受け、各採點を得て初めてこれを合一



し、更に三等分して平均點を得、(滿點三十點)茲に順位を決定したのである。

此の結果、第一位を贏ち得たる者は、井田弦聲(秀明)の「仙人壺」にて、其の内容は、正しく世界お伽噺中の一編を彷彿せしめる者にはあれ、確かに創作たること疑ふべくもなく、其の他富岡鼓川(直方)、眞下飛泉(庵藏)等も、二位三位に推されて、いはゆるお伽文學の登龍門に到達した。

さて、これ等の人々の、其の後の進路如何を見るに、井田弦聲は、有名なる書道の達人井田秀生の息にて、一たび「お伽共進會」に榮冠を受くるや、果して他の少年雜誌等にも囑目せられ、幾多の新味ある佳篇を發表して大いに將來性を示したるが、其の後杳として消息を絶てるは、或は他方面に逸し去れるものか否か。

また富岡鼓川は、後に實業之日本社に迎へられて、「日本少年」の記者となり、其の健腕を謳はれ、次で自ら出版書肆を經營して、良書の普及に努めしことを記憶するも、これ亦如何したるか、其の消息を聞き得ない。

今一人、眞下飛泉に至りては、他の二者に比して、年齢稍長じ、當時京都府下の某小學校に職を奉ぜし者、少年時代より文才に長じ、夙に「學生筆戰場」の有力なる投書家として知られ、殊に日露戰爭時代には、「こゝは御國を何百里」の名作を公にして、天下に其の名聲を轟かした。

現に京都知恩院の境域に立てる一基の記念碑は、飛泉の文名を不朽ならしめるもので、其の碑面

には、名作軍歌の冒頭の一句を題する。これは例の肉弾の著者櫻井少將の健筆を揮へるものである。次に「戦友」の全章を掲げて、追憶の料に供しよう。

こゝは御國を何百里。離れて遠き滿洲の。赤い夕日に照らされて。友は野末の石の下。思へば悲し昨日まで。眞先かけて突進し。敵を散々懲らしたる。勇士はこゝに眠れるか。あゝ戦の最中に。隣に居つた戦友の。俄かにはたと倒れしを。我は思はずかけ寄つて。軍律きびしき中なれど。是が見すて、置かれよか。「しつかりせよ」と抱き起し、假纏帯も彈丸たまごの中。折柄起る突貫に。友はやう／＼顔あげて。「御國のためだかまはずに。遅れてくれな」と目に涙。あとに心は残れども。残しちやならぬこの體。「それちや行くよ」と別れたが。永の訣わけれとなつたのか。戦すんで日が暮れて。探しにもどる心では。「どうぞ生きて居てくれよ。物なと言へ」と願ふたに。空しく消えて魂は。故郷へ歸つたポケットに。時計ばかりがコチ／＼と。動いて居るのも情けなや。思へば去年船出して。御國が見えずなつた時。玄海灘で手を握り。名を名乗つたが始めにて。それより後は一本の。煙草も二人でわけてのみ。着いた手紙を見せ合ふて。身の上話くりかへし。肩をたいて口ぐせに。「どうせ命はないものよ。死んだら骨を頼むぞ」と。言ひかはしたる二人仲。思ひも寄らず我一人。不思議に命ながらへて。赤い夕日の滿洲に。友の塚穴掘らうとは。隈なく晴れた月今宵。心しみ／＼筆とつて。友の最期をこま／＼



と。親御へ送ることの手紙。筆の運びは拙ないが。行燈のかけで親達の。讀まるゝ心思ひやり。思はず落す一筆。

洵にこれ詞情双絶、巧みに戦友の感激を描き、惻々として胸臆を打つものあり、世を擧げて永く愛誦したるも亦理由なしとせぬ。即ち此の一作によりて、眞下飛泉の名は、永遠に生けるものと云ひ得るであらう。

却説、何は兎もあれ「お伽共進會」の發行は、隠れたる少年文學者を、顯揚し紹介する上に、相當の効果を擧げしことは疑ひなく、更に一面より見れば、漸く沈滞せんとするお伽噺の世界に革新を促すべき一導火線と成れるものとも想はれる。

即ち、此の當時お伽噺の傾向は、最早や單なる擬人的の興味本位を生命とする無稽の説話漸く廢れ去り、これに代つて兒童少年の生活、心理を描き、脈々として讀者の實感に觸るゝ少年小説か、若しくは後年にいふ所の生活童話の類の、漸次擡頭し來らんとする趨勢にありしことは、亦見逃し難き現象といはねばならぬ。

果然、明治末期に於ける各種の少年雜誌を瞥見するに、十數年前の漣山人の作品に於ける如き、神韻縹渺として無限の空想世界を現出したるものは、殆ど其の影だに認むるに由なく、多くは實説に近き構想によりて、讀者を魅了せんとするものゝ如く、こゝに古きお伽噺を送りて、新しき童話

大地を築き、以て其の面目を一變すべき胎動のひびきの、既に微かに耳を打ちつゝあるは、疑ひなき現實であつた。

次に「お伽共進會」に首位を占めたる「仙人壺」の一節を記して其の傾向を示すこととする。

仙人壺、武藏の國わ雲取山の麓に、兄弟二人の少年が住んで居ました。この二人にわ、親もなければ、他に身寄りの者もありません。たつた二人で仲よく暮らして居るのです。

兄さんの名わ芳太郎といつて十六、妹の方わお小夜といつて十三——他の者の様に學校へなんぞ行かれない。毎日、朝起きると芳太郎わ百姓の手傳いで、草を刈つたり、牛を曳いたりして、僅かなお鳥目を貰つて歸ります。お小夜わ山へ落葉や枯枝を拾いに行つて、自分の軀より大きな荷を背負つてわ、村へ賣りに出て、そして兄さんの手助けをするのであります。

ある日のこと、平常の様に、兄妹手を曳かれて、お小夜わ大きな籠を擔いで山の方え、オ太郎わ草鞋を穿いて村の方え、右と左を別れる道路の角、

「兄さん、行つていらつしやい」

と、お小夜がいゝますと、芳太郎も、

「あ、行つておいで、氣をつけて、怪我をしない様にお仕よ」

と、優しくいつて別れました。



それから芳太郎わ、仕事先の太郎兵衛さんの許え行きますと、丁度今日わ畑の方も手が空いたから、ゆつくり一日骨休めをする日だというので、子守でもして呉れといわれて、二時間も子守をすると、

「別に今日わ用もないから、これで休むがよかろう、それに今、蓬餅が出来たから食べるがい、妹も定めし食べたいだろうから、持つて行つてやれ、そうしてゆつくり一日遊んで行くがい、一日の賃錢わやるから」と、親切にいつて呉れますので、芳太郎わ大喜悅、お腹の裂けるのも知らずに御馳走になりました。さアお腹の中の胃や腸わ大變です。田舎の者が電車でも見た様な騒ぎ、何しろ生まれて初じめての蓬餅……而も澤山這入つて來たのですから、消化方に面喰つたくらゐ。

で、芳太郎わ仕事もしないで、一日の賃錢を貰つた上に、美味しいものを可厭という程御馳走になつて、まだその上に妹のお土産まで貰つて、夢でわないかと嬉しかつた勢で、早く妹のお小夜を喜ばせようと、我家へ急ぎ歸つて來ました。がまだ妹わ歸つていません。

「奈うしたんだらう、馬鹿に遅いぢやないか、もう歸りそうなんだ」と、呟いたが、自分が平常よりも餘程早かつたのに心注いで、

「そうだ、此方が早いんだ」

と、獨りで笑ひながら、妹の歸るのを待つていましたが、奈うしたのか却々歸つて來ません。もう歸るだらう、もう歸る時分だと思つてゐるうちに、日が暮れるのでした。然雖、妹のお小夜は影さを見えませんか、もう心配で心配でたまらない。

「奈うしたんだらう」

と、一晩中いゝ明かして、もう鳥が鳴き初めました。さあ眠としてわ居られません。それかといつて、立つたり坐ったりして居ても、妹わ歸つて來ないものと定つたら、一刻も早く探さなければならぬのであります。

芳太郎わ頼みに思う唯一人の妹が、山へ行つたきり、狼に食われたのか、天狗の餌食になつたのか、一日一夜歸らないのでありますから、もう氣違ひの様になつて、御飯も食べずに家を飛び出して、山の方え急いだ。さあこうなると、却々人間の足も早いもので、もう三里も來ました。

これから道わ坂路ですから、容易なことでわありません。

芳太郎わ爰で一寸一休み息を吻いてと、腰を草の上へ下した時に漸く夜が明けきつて、太陽が此方を睨み出したのでした。こう腰を下して休んで見ると、一晩微睡ともしなかつたのですから、眼が呆然して來ます。



あゝ、這處處で居睡りして溜るものかと、氣を取直して、今度わ坂路を登るのです。坂路を三里ばかり登るといふと、平地があつて、其處いらわ一面の杉の木で、日光が射さないから、薄暗くて、氣味の悪い濕つばい空氣が壓え付ける様です。唯でさえ心地の悪くなる處を、ごう／＼と風だか何だかの音が物凄く聞えるではありませんか。

路わ細くなつて一本、すうツと眞闇な方え付いて居るばかり、併し芳太郎わ一生懸命ですから、何とも思はずに進んで行きますと、うゝツと呻り聲がして、二匹の狼が、のそり現れて、芳太郎の前え、立塞つたのであります。これにや芳太郎も愕然しました。

以上は、仙人壺の第一回分である。全篇六回より成り、これを四號活字二十六頁に盛り、内に一頁大挿畫三面（尾竹々坡筆）を挿み、文字も畫も共に色刷として現し二等富岡魁星（後の鼓川）は、魔法の子（中村不折畫）を以て、同



七つの林の狼

じく二等の

中村秋圃は

七つの林檎

（錦木清方畫）

を以て後を嗣

ぎ、三等の高田

涼景は新浦島物

語（上原古年畫）に

依り、同じく三等の友

常秋美は乙女山（木村光太

郎畫）を、同上眞下飛泉は月のお

宮（岡野榮畫）を以て當選作の末尾を飾り、選外佳作其の他を以て、

危然たる三百十餘頁の大冊を編み、其の價貳拾錢にて發賣したるは、

亦勗めたりと云はねばならぬ。

「お伽共進會」の應募作品は、總數實に三百四十一篇の多きに達し、又これが應募者中には、當

「お伽共進會」發行



錦木清方の方筆意



時既に相當知名の文士、教育家の名も見ゆるが、今は思ふ所あつて、其の人名の發表を略し、審査員の一人芳賀文學博士の批評を掲げて、當時の傾向を推知せしめよう。

今回のお伽噺審査に就いて、余の感じたことは、その西洋種の非常に多いことである。否すべての話の構造が、西洋式であることである。巖谷君の世界お伽噺といふものが、殆どお伽噺の標準となつて、巖谷君のお伽噺か、お伽噺の巖谷君か、分らなくなつて居る様な形勢であるから、世間一般にお伽噺といへば、まづ巖谷君の世界お伽噺を連想するのであらう。巖谷君は日本のお伽噺も段々出されたが、かの西洋のお伽噺を日本に輸入することに就いて、それをなるべく日本風に同化されたことに就いて、殊に著しい功業があること、信ずる。

フェランといふ佛蘭西人の書いた日本お伽噺の中に、巖谷君がグリムの中から翻案されたものとも知らずに、日本の古いお伽噺として載せてゐるのを見た。分量の點からいつても、説話の内容からいつても、印度日耳曼系統、殊に日耳曼種屬のお伽噺は、日本純粹のものより面白いから、明治の新文學の一現象として、この影響を蒙る事は當然である。これをそのむかし徳川の初期に、剪燈新話、聊齋志異などの翻案が流行したのと比較して見れば、徳川と明治との對照が、鮮に理解される様な氣がする。

お伽草子あたりの神異譚から、後に至つて雨月物語などが産出されることを考へれば、神祕不

可思議の材料に乏しい日本の文學は巖谷君の外國式童話の輸入とともに、將來復一の變化を喚び起す種だらうとも信ぜられる。今の子供は已に巖谷の小父さんのお伽噺でなければ満足せぬのであらう。馬琴や秋成が養成せられたお伽噺とは別種のお伽噺で養成せられてゐるのであらう。此の點は、今回の應募を見て大に悟つたので、一方には誠に頼もしい感も起るが、一方には、あまりに我國固有のお伽噺の閑却せられて居るのではないかといふ懸念も生じた。

童話傳説は、國民の空想の發現で、どことなく國民固有の思想感情、風俗習慣が反映しなければならぬ。今回の審査員としての依頼を受けた時、實は多大の興味を以て之を期待したのである。ところが案外にも、古來の歴史の面影を帯び、郷土の趣味の潜んで居る、即ち我々が子供として聽いて面白かつた童話の應募は、まづ全く見當らなかつたのである。すべてが、日耳曼式で、巖谷式で、實は採點の標準にも苦んだのである。茲に至つて、余は明治のお伽噺は、早くも巖谷君の勢力の下に存在するものであることを悟つた。否、巖谷君の爲に、子供の空想界は、全く支配されて居るものだといふことを悟つた。これは一方に於て、日本に於けるグリム兄弟の事業の益大切である事を悟つた。

今回余が一等二等に擧げた、月の御宮、七つの林檎、皆印度日耳曼種であるが、これは文辭の點も見、感興の點も考へたから致し方が無い。單に材料からいへば、同じく二等に擧げた二人



不具が、純粹の日本式だけれども、不具を以て滑稽の材料とすることが面白くなく、又大人の  
話で、童話としての興味が薄い、新浦島は構想はよいが、文辭が粗く、魔法の子のひよつとこ  
大臣、おかめ王妃の方が却つて面白い所がある。その他ふたつの星、羊姫など、材料は日本に  
してあつても、どうも外國の天地に在る様な氣がする、色々の點を考へて、どうやらからやら  
採點はして見たが、何だか不安心な不満足之感が残る云々。

即ちこれに依つて見れば、芳賀博士は、寧ろ「仙人壺」を重視せざりしものゝ如く、隨つて其の  
採點も、上田博士の七、巖谷の九に對して、六を與へ、「月のお宮」に八を與へてゐる。「仙人壺」と  
「魔法の子」の差は、僅かに一點といふ有様にて頗る際どい所にて一二等の順位が決せられた。

右の芳賀博士の審査評は、其の前段の一節に、特に首肯するに足るものがある。事實今次多數の  
應募作品が、殆ど全部に近きまで、「世界お伽噺」の影響を蒙れるは、争ひ難き事實なると共に、又  
其の將來に何等かの示唆を與ふるかに感ぜらるゝものがある。

### 第十一節 教訓假作物語

「お伽共進會」の懸賞募集と、殆ど其の時を同じうして、文部省に於て「教訓假作物語」の編纂計  
畫を發表したるは、亦少年文學界に對する、新しき一現象として、記憶に留むべきものであらう。

こは文部省圖書課の事業なりしだけに、一般少年文學に關心を有する者の外、特に普通教育家間に  
も、亦多大の反響を喚び起し、隨つて其の應募作品中には、多くの傑作を集め、頗る良好の結果を  
齎らしたるものと想はれる。

此の當時の文部省圖書局には、上田芳賀兩博士の外に、吉岡向陽（帝大文科首席卒業後女高師校長）  
高野斑山（元長野師範教諭、後の文學博士）等、少年讀み物に對し、深甚の理解を有する人々が、専ら  
其の智囊を傾けて、教科書編纂の事務に當り、又「少年世界」の小波も、文部省囑託として、此の  
編纂事業に參與した。更に一方、同省の通俗教育調査會には、文部省官吏の外に、新聞雜誌記者等  
より、廣く有能の人材を簡拔して、通俗圖書の認定に當らせ、一般作家並に出版者を獎勵したので  
ある。

さて今次文部省圖書課の計畫せる「教訓假作物語」は、如何なる主旨のものかといふに、やはり  
一種の少年讀み物に外ならぬ、而も其の要望する所は、事實談ならずして事實に近き美談を意味せ  
るものなるやに想はれる。勿論こは官廳の立案企畫だけあつて、單に安易なる趣味、娛樂にのみ執  
することなく、其の内容の如きも、修身道德の範圍に屬するものを主眼とし、隨つて有效適切と認  
められる佳篇は、これを小學讀本の一課として採用すべき豫定にて、歸するところ新教科書の取材  
を、廣く一般に募らんと劃期的のものであつた。尤も當時の應募者中には、文部省のいはゆる假



作の二字に徹底せず、爲めに普通のお伽噺なるやに思惟し、當局の希望に反する作品を投じたる者も、亦少からず認められたといふ。

殊に「教訓假作物語」の應募原稿は、飽くまで其の選擇に嚴正を期すべき手段として、一切無記名式とし、別の一紙に、應募者の住所氏名職業等を明記して、これを添付せしめることゝ定め、又其の紙數も、高學年用の讀本の一課に相當する分量を目標とせるものであつた。

かくして完成したる「教訓假作物語」は、四六判上製二百四頁、内に十四篇の當選作を盛り、一篇毎に岡田三郎助等の清酒なる三色版口繪を點綴して光彩を放たしめた。蓋し當時三色版（原色版）は甚だ高價なれば、普通一般の出版物に、かくばかり多數を加ふることは、到底經費の許さざる所なるが、流石に官廳の出版物として、能くこの舉に出で、定價六拾錢を以て、國定教科書共同販賣所より出版した。

其の卷頭の緒言には、「此物語ハ素ト高等小學讀本ノ材料トシテ、懸賞募集シ、巖谷季雄、文學博士芳賀矢一、渡部董之介、吉岡郷甫、文學博士上田萬年、幸田成行、及ビ森岡常藏ヲシテ審査選定セシメタルモノナリ。而シテ此中ノ數篇ハ讀本ニ收ムル見込ナレドモ、尙大イニ節略修正ヲ加ヘザルベカラズ、依テ此際別ニ巖谷季雄ニ託シテ些少ノ修正ヲ加ヘシメ、一冊ニ取纏メテ刊行スルト、ナセリ。此物語各篇ノ順序ハ優劣ノ差等ニ依ルニアラズ、春夏秋冬雜ノ次第ニ依リテ排列シタルモノナリ。明治四十年九月、文部大臣官房圖書課と明示して、具さに其の出版の動機由來を述べてゐる。

掲載せる十四篇の目次に見れば、花見車（山本長吉）。花野原（葛原菫）。兄弟喧嘩（市川鐵太郎）。

まだら牛（秋谷竹三郎）。米

ふみ信作（友田宜剛）。競馬

（武田颯）。洪水（塚本小次郎）。

小移住者（久保田俊彦）。納

豆賣（吉井佳水）。小指の由

來（市原隆作）。小園長（芦

田惠之助）。郵便貯金（伏脇

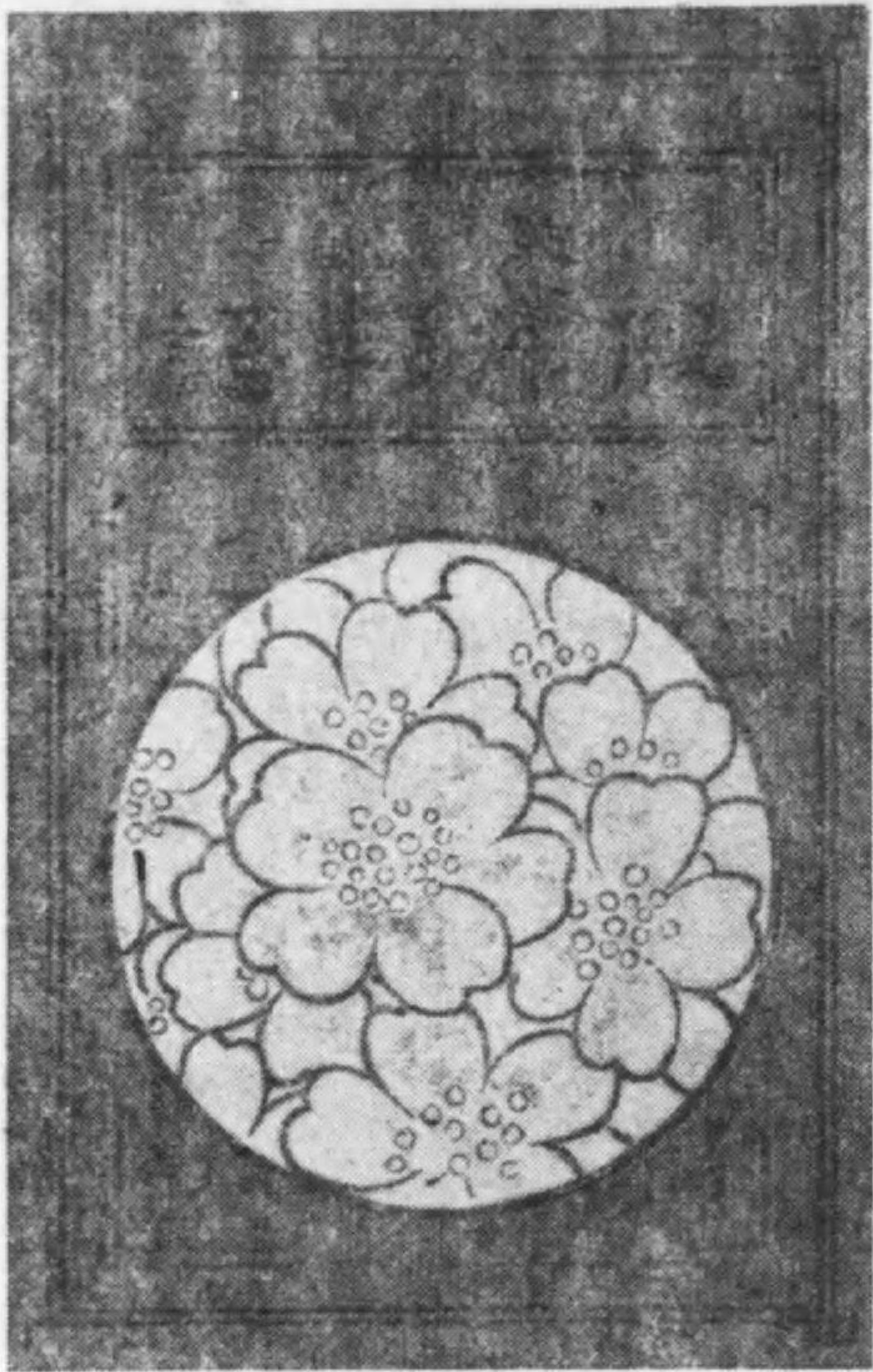
俊岩）。久米太郎（小林良濟）。

白銅貨物語（奥原福市）の順

位に依り、中には世間的に

著名の人物も入選して居る。今この中より第一等に當選せる武田颯（仰天子）の「競馬」を掲げ、當

時の教訓的少年文學の傾向を窺ひ見よう。



教訓假作物語表紙



むかし、ある鎮守の宮の祭に、「競馬の神事」といふ事があつた。その時は、宮の氏子の五箇村から、子供の騎手を一人づつ出して、鎮守の森の池のまはりで、競馬をさせるのである。

それで、競馬に勝つた騎手を出した村は、次の祭の日の来るまで、まる一箇年の間、五箇村の頭になつて、他の四箇村を支配する掟であつたから、自分の村から出した騎手が、うまく勝を取つてくれると、その村の大きな名譽になるので、どの村でも、騎手を定めるのに苦心して、村内の多くの子供の中から、馬に乗る事の一番上手な者を選びに選び抜いたのである。

さて、ある年村々で選ばれた騎手の中に、馬に乗ることの上手な子供が、二人まで加はつてゐた。一人は熊吉、一人は喜之助と云つて、年は同じ十五歳、上手さもまた同じほどだから、たちまち世間の評判になつて、「今年の競馬はさぞ面白からう」と、いはない者はないくらいで、その祭の當日には、おびたゞしい見物人が、鎮守の森へ詰めかけた。

やがて定め時刻が近づくと、五箇村の五人の騎手が、それ／＼供の者に馬を引かせ、わが村々の庄屋を始め、多くの人達に付き添はれて、鳥居の内へ集つて來た。

宮の神主は、騎手がみな集つたのを見て、まづ神前で祝詞を上げて、それが終ると、「支度をせよ」といふ相圖に、一番太鼓を打ち鳴らした。

五人の騎手は、その時社に向つて、「なにとぞ勝利を得ますよ」と祈つて、そしてみなわが

馬に跨つて、次の相圖を待ち受けた。

村々から付き添つて來た人達は、互にわが騎手の傍へ行つて、「是非勝たなければいけないぞ」「負けたら村の名をれになるぞ」「しつかりやつて呉れるのだぞ」などと勢をつけてゐる。

神主は、場合を計らつて、「さあ並べ」といふ相圖に、二番太鼓を打ち鳴らした。

騎手は直に打ち連れて拜殿の傍へ行つて、そして發足點と、決勝點とを兼ねた大きな立石の前に並んで、馬の頭を揃へながら、右の手には鞭、左の手には手綱を控へて、三度目の相圖をおそしと、息を詰めて待ち構へた。

やがて「それ出よ」と、三番太鼓が鳴り渡つた。附添人も見物人も、聲を合せて、自分自分のひいきの名を呼びながら「勝てよ」「負けるなよう」「しつかりやれよう」と、はやし立て、皆騎手を勵ますのである。

騎手はたがひに負けず劣らず、池の回りをぐるりとまはつて、そして社の横手まで來た頃は、誰もあまり甲乙はなかつた。しばらくして鍵の手なりに、拜殿の前へ折れまがつた時は、皆の間がひどく亂れて、一騎後れ、二騎後れ、續いて三騎までも後れて、流石に上手の熊吉と喜之助とだけが、しかも揃つて、決勝點へ同時に着いた。喜之助に付き添つてゐる庄屋は、悦んでをどり上つて、



「やあ、勝つた勝つた、喜之助が勝つた、これ、喜之助お前はえらい、よく勝つてくれた」とほめはやす。

熊吉に付き添つてゐる庄屋も、また同じよゝにをどり上つて、

「やあ、勝つた勝つた、熊吉が勝つた。これ熊吉、お前はえらい、よく勝つてくれた」とほめはやす。喜之助の方の庄屋は腹を立て、

「おい、お前がたは何をいふのだ、勝つたのは喜之助で、熊吉は負けたのだよ」といふ。熊吉の方の庄屋もだまつてはゐない、

「いや、熊吉が負けるものか、立派に勝つた、だから來年の今日までは、お前がたの村も、他の村々も、私の村の下に附いて、支配を受けなければならぬ、たしかに熊吉が勝つたのだもの」

と云つて争ふのである。その時神主は拜殿から聲をかけて、

「これ、お前がた、まあ待つた、今のはどちらが負けたのでもない、二人とも同じ時に、立石の所へ駈けて來たのだから勝負なしだ。しかし勝負がなければ、支配をする村が極らなくて、この後一年の間、五箇村が治まらないから、是非とも勝負をつけなければならぬ。よつてその二人に、もう一度やりなほしをさせるが宜しい」

と指圖をした。そこでまた今の二人に駈けなほさせる事に極つた。ところが、どちらも意地になつて、熊吉がたは熊吉に、

「お前、今度はあんな勝方をしないで、きつぱりと勝つてくれる、負けたらわが村の耻になるから、無理にも勝て」

といひつけた。喜之助がたは喜之助に、

「これ負けるなよ、もしも負けたら、お前を村に置かないで、直に追ひ出してしまふぞ」

ときびしく言つた。それで二人は、「なんでも勝たなければ」と勵みながら、また立石の前に並んだ。

神主は、また「出よ」との太鼓を鳴らす。

二人は、直に駈け出して、一生懸命に池の堤をまはりはじめ、およそ中ほどまで行くあひだは、たがひに五分五分に進んでゐた。

が、熊吉はわが馬がつまづいて、前足を折つた爲に、つるりと地上へすべり落ちて、その機会に、ころ／＼とこがつて、池の中へどんぶりとはまり込んだ。しかもそこは深い所だ。

喜之助はおどろいて、たちまちひらりと馬から飛び下り、水際へ走つて行つて、一たん沈んでまた浮きあがつた熊吉の襟髪を引つつかみ、ぐつと岸へ引き上げた。



附添人も見物人も臆をひやして、駈け寄つて、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやらで、上を下へのさわぎである。喜之助がたの庄屋は、喜之助の背をたいて、

「これ、お前はまつたくえらい、感心だ、熊吉の落馬したのを、お前がもし幸にして、構はないで馬を駈けさせたら、それこそ勝も勝も大勝になつて、私を始め、村の者一同がどんなに悦ぶか知れないのに、「人の命にはかへられない」と、後で私等に小言をいはれる事も忘れて、敵を助けて遣つたのは、俠氣のない者にはできない事だ。いくら言つても感心だ、實にお前はえらい子だ、だが、困つた事には、相手の熊吉があつた通りで、この駈競のやり直しは、今はとてもできないから、今日の勝負が定められない、定められないとすると、今神主様が言はれた通り支配をする村が極らないで、この後一年のあひだ、五箇村が治まらないからなあ」と、さも常感らしく言つた。熊吉がたの庄屋は、圖らずそれを聞いたので、やがて側へ寄り、「いや、その御心配は御無用です、勝はあなたの方へゆづりませう。俠氣な喜之助さんのおかげで、私の村の者一人の命が助かりまして、こんな嬉しい事はないのですから、そのお禮に喜之助さんが勝つた事に致しませう。いや、なにも私がこんな恩に被せがましい事を言はないでも、どうせ喜之助さんの勝に極つてゐたのですから、どうか今日から一年のあひだ、あなたの村が他の四箇村の頭になつて、御支配をなすつて下さい」

と言ひ出した。その事を聞いて、神主も同じく喜之助の志をほめ、支配は其村に委す様に云つたので、いよいよ今日の競馬は、喜之助が一番勝になる事に定つた。

かう云ふ次第で、喜之助はわが村へは名譽を得させたいけれども、競馬には眞に勝つたのではないから、自分はあまり名譽でもなかつた。しかし、その代りに圖らず世間の人達から、「喜之助さんは見上げた子だ、あつばれな心がけだ」とほめられて、競馬の名譽にも遙にました大名譽を得た。

以上が、其の全文である。この一篇は更に相當に用字を改め、辭句を正して、國定小學讀本の一篇として收められた。なほ武田頼は、新聞記者として夙に才名を謳はれ、餘力を少年讀み物に傾盡したる人、曾て「少年文學」の一篇に、「二代忠孝」を草し、且幼年雜誌以來諸種の雜誌に寄稿して、文名を知られし老大家にて、かの「お伽共進會」の懸賞に入選したる富岡鼓川は、實に仰天子の教へを受けたる者、即ち師弟譽を並べて、兩種の懸賞に榮冠を戴けるは一奇とすべく、分けても「假作物語」と「お伽共進會」と、官と民と途こそ異なれ、其の志向を同じうし、而も殆ど時を齊しうして、漸く沈滞せんとする少年文學界に、一脈清新の氣を漲らしたることは、更に一奇とすべくであらう。



第十二節 「家庭お伽話」に就て

恰も此の頃、文部省の吉岡向陽と、高野斑山とは、協力して「家庭お伽話」なるもの、編纂を企て、これを春陽堂より發行せしめて連続實に五十編に及び、兒童社會に貢獻したるは、亦特筆に値すべく、巖谷小波の「世界お伽話」と駢立して、斯界の二大權威を以て目せらるるものであつた。

「家庭お伽話」は、大體の形式に於て、「世界お伽話」と、其の軌を一にした。例へば活字の大小行數字數、挿畫の扱ひ方等眞に姉妹の觀を呈した。只「世界お伽話」は、殆ど大部分一冊一話を収録し、また挿畫の如きも、毎冊筆者を異にして、特殊の光彩を放たせたるに反し、「家庭お伽話」は、每編必ず二種内外のお伽話を收めた。これ蓋し二人の編者が、各一篇宛を受持ちたる結果に外ならぬ。

「世界お伽話」は、單に其の表紙にのみ、多色刷石版を應用したるが、「家庭お伽話」は二葉の彩色石版畫を以て華々しく卷首を飾り、開卷第一先づ其の美に眩惑せしめた。而してこれが装幀挿畫ともに、鱗崎英朋の努力に俟つた。英朋は右田年英の門人にて、春陽堂專屬の畫師である。

「家庭お伽話」は、正しく書籍として作られしものなるが、又多分に雜誌の形態を加味する所に特色が認められた。即ち各篇の卷末十數頁を割き、短文、歌俳句、考へ物畫直し新題等を課し、編

く投稿を募集して、總花式に紙面の許す限りこれを網羅發表し、讀者及び投書家をして、次輯の發行を鶴首翹望せしめ、連続購讀を誘致したるは、出版書肆の發案か、編輯者の計畫か、其の何れなりしにせよ、事業經營の上より見て、確かに有利適切の手段なりしやに思はれ、春陽堂の如き、類



(筆朋英) 紙表の話伽お庭家

書少き出版者が、綿々として五十篇の多きを續刊し、其の明治四十三年末に、豫定の冊數を完了すると共に、翌四十四年一月を期して、更に同體同型の「家庭お伽文庫」を創刊したるが如きは、職として此の變體的思巧の的中せる結果なりしやに見られる。

然るに、續刊の「家庭お伽文庫」は、何故か讀者の投稿欄を廢止して、單なる書冊の形式を用ひ、且其の價も、前者の八錢を引上げて、後者は拾錢を稱へ、而も總ての點にやゝ遜色を認めざるを得なかつた。——後年春陽堂は

「家庭お伽話」に就て



「家庭お伽話」と「家庭お伽文庫」とを合本とし、華麗なる裝飾を施して、再び世間の需要に應ずることとした。

次に「家庭お伽話」五十篇の總目次を掲げ、其の取材の範圍、並に編者の目標が、那邊に在りしかを推知せしめよう。

- 第一編。猿と娘。孫蛇の話。
- 第二編。泉の仙女。狐と川獺。
- 第三編。老人わ寶。金羊の裘。
- 第四編。蛙の王子。慾深和尚。
- 第五編。百合若。金剛谷。
- 第六編。周章者。硝子山。
- 第七編。月盜人。瓜姫。
- 第八編。六從者。田螺の嫁様。
- 第九編。美濃の穂壁。白鳥物語。
- 第十編。山羊娘。鼠の淨土。
- 第十一編。鴻の池。雪の子・火の子。

- 第十二編。初日の娘。縁猿。
- 第十三編。牛の報恩。豚の兄弟。
- 第十四編。池の主。馬鹿婿。
- 第十五編。黄金城。巖流島。
- 第十六編。魔法の時計。鬼女。
- 第十七編。孝子と難題。黄金も球も。
- 第十八編。花島の王女。傀儡者。
- 第十九編。鶴取兵衛。青鬚。
- 第二十編。竹篋太郎。脱走兵。
- 第二十一編。六馬鹿。對王丸。
- 第二十二編。狐の復讐。魔法の時計。
- 第二十三編。烏王子。大盃。
- 第二十四編。仔鹿。阿羅斯等。
- 第二十五編。樹上の少女。黄金の鶏。
- 第二十六編。黄金の獅子。鉢の木。

「家庭お伽話」に就て



- 第二十七編。岩見重太郎。謎物語。
- 第二十八編。姉の行方。命拾ひ。
- 第二十九編。安宅の關。王様と山羊。
- 第三十編。巨人退治。お伽棚。
- 第三十一編。梅若丸。真友。
- 第三十二編。双子武士。續お伽棚。
- 第三十三編。伊勢屋吉兵衛。白鳩王女。
- 第三十四編。手負獅子。一休和尚。
- 第三十五編。山中鹿之助。貝細工。
- 第三十六編。不思議の臼。續一休和尚。
- 第三十七編。大森彦七。寄木細工。
- 第三十八編。芳流閣。忠犬譚。
- 第三十九編。大艦隊捕獲。待賢門の戦。
- 第四十編。圓塚山。美王妃。
- 第四十一編。質入裁判。龜の恩返し。

- 第四十二編。犬田小文吾。胡桃太郎。
- 第四十三編。瑞西義民傳。貸雪隠。
- 第四十四編。對牛樓。續義民傳。
- 第四十五編。黒帆の船。夜泣石。
- 第四十六編。田宮坊太郎。睡美人。
- 第四十七編。女狩人。鴨取權兵衛。
- 第四十八編。美女御前。山男。
- 第四十九編。小人物語。
- 第五十編。信田小太郎。

以上、列記せる所の如く、「家庭お伽話」の取材は、頗る廣汎に亘り、泰西のお伽噺、口碑傳説はいふも更なり、本邦固有の説話、地方口碑、乃至小説に至るまで、苟くも児童の讀み物として適當と認めらるゝ者は、悉くこれを網羅し、中には既に小波の「日本お伽噺」「世界お伽噺」に収録せられし二三さへ見らるゝが、兎も角も比較的短年月間に、五十篇約百種に過ぎ材料を輯めて、家庭教養の好資料たらしめたる一事は、亦以て偉とするに足る。

勿論この當時は、かゝる形式のお伽叢書の世に迎へらるゝこと頻りにして、他にも又同様の企畫



を樹つる者二三ありしとはいへ、吉岡高野二者は、小學教科書編纂の經驗に基き、趣味敦養兩方面に、夙に一家の識見を有することゝて、其の編輯に係る「家庭お伽噺」が、最も健全なる讀み物として、最も廣く一般に認められしも、敢て異しむに足らぬであらう。

### 第十三節 お伽噺に對する意見

前記「お伽共進會」の發刊を期して、少年世界編輯部は、遍く當代の文學者、社會教育家、學者及び一般名士に移牒し、いはゆるお伽噺に對する希望、是非に就いて、忌憚なき意見を徴し、これを集録して卷末に附載した。

即ち當時の識者が、如何なる見解を有し、且またお伽噺なる者の將來に關して、如何に要望したるか、其の所説の當否は別とするも、各人各章一々點檢し來れば頗る興味の淺からざるものあり、次に其のうちの數章を摘録し、以て時代の風潮を窺ひ見よう。

井上哲次郎（文科大學教授、文學博士）。お伽噺は少年の趣味を養ひ、且情意を和ぐるの效があります。或は假説を交ふるからいけないといふ人が有るけれども、假説は次第に分つて來るから差支ない。お伽噺は、少年が自分で讀むのに好いものであるけれども、また母親にも必要である。まだ自分で讀むことの出來ない兒童には、母親が之に咄して聽かすべしである。母親は多

少お伽噺を知つて居るけれども、種が盡きるといけないから、澤山お伽噺を聚めて一冊にして置いたら便利であらう。又お伽噺の稍連続して込入つたやうなものは、尙更集めて一冊にして之を母親の手に付するを要するのである。毎晩食後兒女を呼び集めて、一家團樂の状をなして、之にお伽噺をして聽かすのは、最もよき方法かと思ふ。已に寢床の中に寝ねて、蒲團を被て咄するのは餘りよくない。兒童の神經を刺戟して、その睡眠を妨ぐる恐れがあるやうである。又古代のお伽噺と、他國（例へば西洋）のお伽噺は、能く我日本の今日の少年の趣味に合ふやうに選擇しなければならぬと思ふ。

鳥居龍藏（蒙古王廷顧問）。私は人種學を専門にして居る者でありますが、さて同學上から或る民族の如何なる人種から成つて居るかを取調ぶるには、色々の方面から総合的に手を着かねばなりません。則ちこれが材料、條件として第一に體質、次に言語、民族心理、それから神話、傳説、お伽噺のやうなもの、俚歌童話、風俗習慣、古物遺跡などが必要で、是等が總合せられましてはじめて其人種學上の價值が定まるのであります。お尋ねを受けましたお伽噺も、畢竟私の立場の上から申せば、以上の關係から、私に必要なのに外ならぬのであります。一體お伽噺なるものは、文學上より見ても、又教育上より見ても、將た一個の娛樂の上から見ても、最も面白い、而も大切なものであるが、是等は私が殊更に申しませずとも、夫れんくの専門の方



から、定めて申上げることでありませうから、私は是等に就ては別に何も申上げません。民族の、其固有の民族的性格の現はれてゐるものは、體質の外に、抑もどんなものがあるかと云ふに、それは色々なものがある、即ち詩歌（文學）、音楽、繪畫、彫刻、建築等がそれで、是等は比較的よく民族性を示して居る。であるから人種心理學者は、所謂其固有のクセを、是等の中で研究するのである。

次に詩歌と同一價値に、神話や傳説やお伽噺がある。是等は無意味に考へて見れば、馬鹿氣たことで、無用の長物のやうに感ずるが、さて深く研究して見れば、是等は決して左様な無價値のものでなく、誠に面白い有益なものである。こは余の如き人種學の方面から見、全くさうである。

神話や傳説やお伽噺は、要するに同一のもので、何れも民族の性格をよく現はして居る。是等が民族の心の中に畫かれたのは、最も古い昔のこと、當時は實に是等は天地の構造、天變地異、人間、動物のすべてのものを説明して居つた。されば或方面から云へば、以上は實に哲學であつて、又科學で、歴史であつた。如何なる民族も、最初は皆こんなことを信じて居つたのである。こは今日我々の中に残つて居る古事記、日本紀、其他諸種の物語（今昔物語の如き）などでも知れる。否現今地球の各地に住んで居る未開人の中には、今尚ほこれが哲學であり、科

學であり、將た歴史として居る所も敢て少くはない。

各民族は、未開なる時代には、皆これが伴つて居ることは明かであるが、茲に注意すべきことは、以上の神話、傳説、お伽噺に、それ／＼人種、民族の相異なるにつれて、従つて其話の形式の異つて居ることである。例へば印度人の有つて居る是等は、其地に昔から居るヅラビダ族のものとは大いに異なつて居る。即ち印度人は印度人の形式があり、ヅラビダは又ヅラビダの形式がある。何故かく二民族が其神話、傳説、お伽噺に於て互に相異なるかと云ふに、これは全く民族が異つて居るからで、これが爲に又其性格も異なるのである。要するに以上の事實は、其性格の影と云つてよい。これが所謂其民族のクセの現れて居るのであるから、吾人はこれに三人分研究することが出来る。

お伽噺は、未開人から申せば、大人の文學の一種でありませう。そして私から見ますれば、其中に、言ふに言はれぬ民族の影が宿つて居つて、これが詩となつて、解釋を與へて居るやうです。お伽噺は、祖先から、心的遺傳で傳はつて來たもので、苟くもこれは其民族が雜種になるか、將た絶滅せざらん限は、何時までも保存せられて行く。併し私の申しますのは、其骨組であつて、これの衣裳や彩色や、其主人公の用ゐる言葉は、時代々々で變化して行きます。例へば桃太郎の話が、元祿になれば、元祿の衣裳を着たり、當時の言葉で話したりするやうなもの



である。又かの有名な松山鏡の如きも、何ぞ知らん、古事記や、日本紀にある、我國の神話の天照大神様より、御孫の命におゆづりになつた時の、鏡に對して、お話になつたこと、同一の形式で、この骨組が、藤原時代になつて、松山鏡の話と變化したのである。これが戦國時代になつては、狂言に残つて居る。お伽噺は、以上のやうなものであるから、これを研究するにも、よく骨組に注意せねばならぬ。然るに今日までの我國の研究の仕方は、骨組よりも、寧ろ其衣裳や着色にのみ注意して居つたやうである。これは學問上から評せば、最も末である。今申したことを、別の言葉で申しますならば、其骨組は、言語學上の文法のやうなもので、衣裳や着色は、其單語のやうなものである。單語は時代々々に新しいものが加はつて來るが、文法は少しも變化をせぬ。この關係は全くこれと同一である。

お伽噺も、一民族が、其一民族のみ住まつて居れば、いつまでも同一形式のお伽噺が保存せられて行くが、若しも彼等の間に、他から別な民族が入つて來るならば、是に於て又新しい異なつたお伽噺も加はつて來る。そしてこれが長い時を經過しますならば、遂にお伽噺は互に雜種混合して仕舞ひます。けれども他の民族も居らなくなつて、長い時を經過しますならば、異なつた話は、全く衣裳着色となつて、固有の骨組に附着せられて仕舞ひます。又一民族が、他の民族に接近しないでも、間接に其お伽噺が傳はつて來ることがあります。これは恰も仲買人

によつて、買つたやうなものです。

以上でありますから、お伽噺を研究するとしても、よく注意せねばなりません。そして其民族固有のものであるか、將た他から混入したものであるかは、よく區別せねばなりません。

最後に、お伽噺の、人種學上の好材料になつた一例を申し上げます。御承知の如く、太平洋中に、ポリネシアと云ふ多くの島があります。そして此所に人間が住まつて居りますが、是等の人間は、どんな人種であるか、これ迄一向知れて居なかつたが、學者がお伽噺や神話や、俚歌童話などのやうなものを、多くの島々で取調べました結果、各々互に連絡があつて、遂にポリネシア本島の人間は、もとニューギニアとセレベス島の間にある、ブルーと云ふ島から移住して往つたことが明かになつた、これは全くお伽噺研究の結果であります。私がこれに對して最も尊敬を拂つて居るのもこれが爲である。

戸野周二郎(東京市教育課長)。私は、お伽噺は美的教授の材料として取扱ふべきもので、文學の一種として見るべきであると思ふ。大抵の兒童は、お伽噺を好んで讀むものである。是は畢竟するに、お伽噺が、兒童の美感に適合して居るから、讀んで大いに愉快を覺ゆるためである。此の兒童に快感を起さしむることは、聽て兒童の美的感情を養成することになる。だからお伽噺の本領は美にありといつて差支はないのである。然るにお伽噺の價值に對しては、東西の



教育者間に、随分やかましい議論が唱へられてゐるやうである。彼の十八世紀のナシヨナリズム一派の如きは、お伽噺は事實無根の嘘を教ふるもので、理として見るべきものが無いから、教育上宜しく排斥すべきものであると云つて、之を非難して居る。それからヘルバルト一派の如きは、お伽噺は修身上の材料とならざるべからず、然らざるものは、教育上何等の價值なしと論じて居る。

思ふに此の兩説は、共にお伽噺の本領を没した議論である。前にも述べた通り、お伽噺の本領は美であるから、此の兩説は、結局、美を理論や道德の犠牲にしようといふ、無理な要求である。美は元來理論や道德と並行的に伴ふべきものであつて、決して是等のものに從屬すべきものではない。勿論大抵の場合は、美は廣義の道德や、理論の範囲内にあるけれども、元來、美は想像力を基礎とする所から、往々嚴密な理論や道德の世界以外で美を感得することが出来る、だから美を土臺にするお伽噺の價値は、嚴密な修身や理論から判斷せらるべきものではない。勿論お伽噺も、廣義な道德には支配せらるるけれども、其働きは極めて自由で、決して嚴密な修身や理論から、其價値を論難すべきものでないと思ふ。そこでお伽噺の根本要件は何かと問へば、第一に、子供に美的感情を起こさしめ、之に快感を與へ得べき底のものであるや否や、

換言せば、子供らしくして而も無邪氣な面白き要素を含んで居るや否やである。次に第二の要件は、廣義の道德範圍から離れて居ないかである。此の二要件だに、お伽噺の内容に在るならば、それだけで充分の價値あるものと思はるゝ。大人が、自己の知識で判斷して、馬鹿々々しいとか、不合理だとか云つて、お伽噺を排斥するのは、兒童の心的發達の状態を無視したものと云はなければならぬ。

次に空想のお伽噺に對する非難であるが、論者は唯さへ豪膽なる想像を有つて居る兒童に、空想のお伽噺を讀ますのは、兒童を迷信の淵に陥らしむるから、教育上甚だ有害なものであると難じて居るが、是は間違つた皮相説だと思ふ。尤も論者のいふ如く、兒童がお伽噺を好む頃は、兒童の想像力が、極めて富裕な時代で、兒童は想像力によつて、現實世界以外に、假りに世界を設けて、動植物其他無機物に至るまで、みな人間視し、是等に對して、人間同様に同情を寄せて愛翫して居る。

例へば、兒童が、人形を弄ぶ時の如き、また草花と獨語する時の如きは、恰もそれ等のものが生けるかの如くに囁いて居る、併し其實兒童は、是等のものが生きて居るものとは信じて居ないとするれば、假令兒童が想像力の働で假の世界を設け、人形と囁くとも、其想像力は、兒童の精神の上に、何等の障害も、將た亦何等の迷信をも生ぜしめぬことは確である。



然らばお伽噺にて、兒童に何程想像力を撞にせしむるも、是が爲に少しも兒童に害を及ぼす理由はない。要するに想像のみでは——、信念が加はらぬ以上は——、決して兒童を迷信に導くものではない。一體論者が斥くる想像は、兒童の心的發達上極めて有要なもので、是が基で理解力發生の段階となるものであるから、子供がむつかしき理窟を考へ、理論を知る前には、想像的なお伽噺や、空想的な歌を教ふることは、むしろ正當な順序だと思ふ。

それで私は、お伽噺や其他一切の手段で、兒童の想像力を、出來得る限り豊富にせしむることを望むのである。それから偏狹な道學者は、美的に組立てられたお伽噺を見て、之は兒童を虚偽的に傾かしむるものなりと非難して居る。よし、論者の言が至當なりとしても、此の場合に起る虚偽は、道學者の所謂惡意に基く虚偽でなく、寧ろ美術上の一種の幻影に因て起つた虚偽と解すべきである。斯の如き虚偽が、兒童の徳性に害を及ぼすとせば、須く兒童には一切の美術品をも禁すべきである。何となれば、美術は、實際を摸して、實際のものと思はしむる一種の虚偽に過ぎざるもので、恰も美術のお伽噺が、兒童に與ふる心的現象と、其趣を同じうして居る。恐らく今日の教育者で、兒童に美術品を禁じようとする者はあるまい、斯の如き虚偽は寧ろ美術的思想の發達のため、兒童に獎勵すべきであると思ふ。

要するにお伽噺は、直接には美的陶冶の材料として兒童の想像を豊富にし、美術的思想を養成

し、兒童をして擲すべき温情と、高尚なる趣味とを有せしむることが出来る、そののみならず、兒童が趣味を以て書を繙くことよりして、兒童に讀書の趣味を涵養し、以て讀書の習慣を得しむることも、大なる副式的効果である。さればお伽噺は、其材料が健全で、而も廣義の道徳の範圍内にある限り、美的感情養成のため、將た、品のよき娛樂、乃至讀書の習慣養成のため、適當の時間に於て、之を兒童に讀ますことを希望するのである。

且夫れ國語が、如何なる國にも存する如くに、お伽噺は如何なる國にも存在し、其國民性を養成し居るのみならず、お伽噺を好む時代の心靈は、やがて未來永劫の精神ともなるべきものなれば、お伽噺は廣き意味に於ける教育上の重要な方便の一として、考へねばならぬ。已に教育上の重要な方便として考ふる場合には、其内容及び其兒童と相接する時間等を斟酌し、且兒童の性質に應じて處置しなければならぬことは勿論であるが、彼の美的教材たる繪畫、音楽、文學等に對する時代の要求、並に之に伴ふ通弊は、お伽噺に於ても同様に、必ず存在すべき筈であるから、これが作者たる人に對しては、此の邊を達觀して、お伽噺の本領を發揮すると同時に、大いに教育的價値を高むるやう、一層の御盡力あらんことを希望するのである。

吉岡郷甫（文部省視學官）。お伽噺わ、もと／＼國民の空想時代に出來たものである。後の人が、其時代の人になつて作つたものである。であるから個人の空想時代にある兒童にわ、これ程面



白いものわ無い。又面白い中に、絶大な想像力を涵養することが出来るのだから、これ程有益なものもない。想像力は人間向上の母で、人生の幸福は、皆それが生んだものだ。

由來西洋人が進取的で、吾國人が退嬰的であるというのも、一つわこれが持つて居るお伽嘶の性質に由るに違いない。西洋のお伽嘶の思想わ、思い切つて大きいが、日本のわ極て小さい。それに教訓があまりに露骨である。随つてこせ／＼したませた人間を作り易い。今日の教育家の多くわ、教訓の露骨に表れたものでなければ、價值が無いように思つて居るが、それわ大きなあやまりだ。教訓の露骨なものわ面白くない、面白くないものわ感應も少い譯である。お伽嘶の主なる價值わ、兒童の想像力を刺戟する所にあるのだから、想像力の大きなもの程貴い。そうして教訓は放膽的であつて、細心的であつてわならぬのである。

中川霞城（京都美術學校講師）。小兒が生れた初めは、植物の如く意識が無い。睡つてばかり居る。覺めて居る時も、周圍の事物とは没交渉である。六週間もすると、光澤に眼を注ぐ。顔も晴れて來て笑ひ出す。内に或物が出來かけたのである。次に發展するのが耳で、三月餘りもすると、物を攫む觸覺も養はれ、嗅覺と味覺とは其後に開ける。

二年目には我が名を覺える。物我の別も立つ、物を言ひ習ふ。精神は多方面に啓發され、觀念も養はれ、感情も自覺も發達し、意志も運動に見え、遊戲が始まる。是までが教育上では第一

期とする。第二期は三歳から六歳まで、空想は益々發展して遊戲に顯れ、理性は言語に顯れ、意志は物事の眞似に認められ、お伽嘶の最も必要なのは此時期にあるので、博士チルラーは曰く、お伽嘶は學校初年の教育に基礎を與へるものであると云々。

内田魯庵（文學家）。お伽文學といふものは、特に研究したことがないから、格別意見もありませんが、平たく申上げると、餘り文學上の價值は高いものとは思ひませぬ。勿論エソツプが創意の寓言は、實に立派なものだと思ひます。之から少しのぼつた處で、テレマツクなども立派なものだと思ひます。

小生の最も尊重するは、魯敏遜クルソーである。最近十年ばかりは手にしませぬが、同書は數遍繰返して愛讀しました、一體デフォアの文章は直截明快である上に、敘事が頗る精細で、例へば年月日は勿論、時間から溫度、何から何まで行渡つて居る。如何にも事實らしい、此點に於ては古今匹儔なしである。ベルネなどが、盛んに科學の知識を振廻しても、到底デフォアに及ばない。魯敏遜クルソーばかりでなく、疫癘日記でも、キャプテン・シングルトンでも、實に古今獨歩である。此の如くして、初めて文學上の價值ありと信ずる。

腹藏なく言ふと、今日我文壇に行はれてゐるお伽嘶は、文學上から見ても、教育上からいつても、十中八九感服しない。お伽嘶などいふものは、普通の小説から見ると、更に容易で作り易



いから、小波君の作が成功すると、直ぐ真似をする。今日は等の鵜の真似をした鳥先生の中で、大家となつた方もあるさうだが、鳥や獸に口を利かせさへすればお伽噺だと思つたら、大變な間違である。

子供の口から出まかせに出る咄が、手もなくお伽噺である。唯子供の咄は辻褄が合はぬから、子供の咄の辻褄を合はせれば、それで好いのである。所謂 Folklore 即ち元始時代の咄は、それである。處が大人が作り出すと無理に子供がらうとしてはやり損なふ。較もすれば人情染みた事がある。洒落が入ると落し噺然とする。小生は甚だ感服出来ない。お伽噺の價値は文學を離れた所にあるのだ。

一寸例をいはふなら、廣瀬中佐が海底に入つて、武勇を現はすといふお伽噺がある。子供の好きな魚が澤山出て甚だ面白い。處が末に中佐が龍宮の乙姫様をお嫁に貰ふといふ事になる、小生は宅の腕白に咄して聞かせて、爰に至つて甚だ當惑し、乙姫様と兄妹になつたと云つて聞かされた。此のお嫁さんの噺は、他のお伽噺にも屢々出る、小波君の何とかいふのにも有つたやうだが、子供に説明して聞かせるのは實に閉口する、かういふ事は一切避けねばなるまい。

お伽噺は、どこまでも無邪氣でなければならぬ、人情染みたことや、道德染みたことは、一切避けねばならぬ。今日の教育家輩は、兎角忠孝を口にし、如何なるものにも忠孝の意味を含ま

ねば教育的でないやうにいふが、小生は聊か異論がある。併し教育論はこゝにいふ限でないから他日に譲るが、兎に角お伽噺は、道德以上、人情以上に、超越しなければならぬものと信ずる。

幸田露伴（文學博士）。お伽噺に對して、私は特殊の意見といふやうなものを抱いては居りませぬ、極て平々凡々の考よりほかに、何等の考も持つて居ませぬ。でお伽噺に對しては、別に特殊の意見といふやうなものを樹てぬのが本當ではあるまいか、即ち平々凡々の考が、むしろ正常な、有利な、そして有力な考ではあるまいかと思つて居ります。

さて平凡の見として、お伽噺に對して、第一には興味あるといふ事、即ちおもしろいといふ感じを兒童に惹起させるといふ事を請求する。第二には過度の刺戟を與へる事を避けて貰ひ度いといふ事を主張する。即ちこれを聞いた兒童をして、其夜寢魔えをしたり、無益な恐怖心を發したりするに至らしむるやうな、甚だしい残酷や、悲惨毒惡な談話は、寧ろ止めて貰ひ度い。第三には、上品な簡潔な言葉によつて、其物語の傳へられんことを請求する。餘り談話を巧みにせんとするの結果として、下劣な言語の用ゐらるゝに至らんことは、兒童にとりて甚だ忌むべき嫌ふべき影響を與ふる事と信じますので、此の一箇條を加へました。猶微細に申せば際限がありませぬが、大綱はこれだけです。



三好退藏(貴族院議員)。(一)自然美を説くこと。余の見る所に依れば、お伽噺は兎角對人關係が多くて、自然美を説くことが少いやうに思ふ、勿論孝悌忠信の噺は必要だが、自然の美をも盛んに説明して、自然に對する同情、及び自然を観察する好奇心を起させることに努めて貰ひ度い。(二)家庭關係に注意すること。お伽噺の種類によると、兒童にひがみ根性を起させ、家庭内に波瀾を生ずるやうになることがある、此れは最も恐るべきことだ、要するにお伽噺は主として兒童の心をのんびりさせることに努めて欲しい、ひねくれさせるのは大禁物である。(三)妖怪談を避けること。西洋のメルヘンのやうな、草木や花鳥が話をするなどは、無邪氣で害はないが、妖怪談は兒童に恐怖心を懐かせる害があるから、全然廢することにした。ものだ。(四)損益道德を改ること。損益道德とは耳新しいかも知れぬが、善を行へば利がある、惡を爲せば損があると云ふ風に説くのが、余の所謂損益道德である。利害を見て趨捨することを兒童に吹き込むのは、其人格を下品にする基であるから、損徳に拘らず、爲すべきは爲し、爲すべからざるは爲さぬと云ふ、武士道的道德を鼓吹するお伽文學が最も必要であると思ふ。

宮田修(成女學校學監)。一、「かちく山」「舌切雀」の如き殘酷なる材料を採るべからず。一、理科的知識普及の目的を以て、自然科学中より其材料を選むも、亦たお伽噺を利用するの一方法ならんか。一、動植物界は勿論、萬有に對する愛情を涵養する爲に、是等のものを材に採り

て、彼のエソツプの中にある如き、無邪氣なる話を作るは頗る有益なり。一、お伽噺は少くとも勸善懲惡の意味を以て、目出度く終らざるべからず。一、あまりに悲哀の分子を含めるものは避くべし。尤もこれは書きやうにもよるべけれど、可憐性に富める兒童に向つて強度の刺戟は教育上大害あり。一、言語動作等、すべて子供の心となつて作らざれば、お伽噺は成功せず。

三島通良(醫學博士)。兒童が大好きで、お伽噺の親友で、體育といふ教育上の片荷を擔いで居るからには、お伽噺の利害も考へて、何時かは自分も書いて見たいと思つて居ます。然しこれはもつと後年の仕事として、今はお伽噺に對する私の希望を云うて置かう。先づお伽噺で少年少女に訓へてやり度いことは、(一)何事に拘らず成功するのは強健で長命すること。(二)強健長命には、秩序正しき生活、清潔、薄衣、適宜の運動、勉強と休息との調和、心身の正しき訓練、無益の事に心身を勞せず、膩き物甘き物を成るべく食はず、酒煙草、香料を用ひず、心にも身にも餘裕を作る事。(三)自分のみが健全でも、一家も、一町村も、一國も、否世界中の同胞も、皆が健全でなければ、眞に楽しく生活する事は出来ぬから、公衆衛生に對する公德心を養成する事。(四)忠孝、學問、藝術、行儀は、文明國の紳士淑女として無くてはならぬものであるが、此等の思想言行は、又身體の健康を保つ上にも、最も有力のものなる事等、數へれば



限りは無いが、到るところ健心強身の道を、お伽噺で教へてやり度いと思ふのです。

志賀重昂（農學士）。世にはお伽噺を以て名教を補ひ、世道人心に裨益せざる可からずなど申す者も御座候得共、これは小教育の徒が唱ふる淺薄なる似而非倫理にして、子供を餘念なく喜ばしめ樂ましむるこそ、是れ全く子供を眞善美に向はしむる發端に有之、名教を補ふとか、世道人心を裨益するとか申す考へのみにて子供を導くは、却つて子供をして小ならしめ、こせ／＼せしめ、眞正なる大に導く所以にあらずと存じ候。さればお伽噺の主眼は名教より以上、世道人心を裨益する以上の所にあり、即ち子供を喜ばしめ、樂しましむれば足れりと存じ候、名教を補はざる可からずとか、世道人心を裨益せざる可からずとか、然までやかましいことを申さずとて、お伽噺は自然と此の如き義に適ひ居れるもの夥多有之候。

例へば豆子に參れば、弘法大師が行脚空腹の際、大師が乞へるに拘らず、庄九郎婆が、其洗ひ居れる芋一つだに贈らざりしとて、庄九郎婆の石芋と其話傳り居り、磐城の松川には、大師に鮎を贈らざりしとて、鮎を生ぜざる話傳はり、備中の東部には、大師に桃を贈らざりしとて、蚊多しの話傳はり、スコットランドには、聖僧アンドリュイー行脚空腹の際、其乞へるに拘らず、老婦がパン一個だに贈らざりしとて、件の老婦は啄木鳥となりて飛び去り、啄木鳥の赤き鶏冠

あるは、老婦が冠り居たる裏所帽子の名残りとの話傳はれるなど、何れも無心の間に貪慾を戒めたるものに有之、名教を補はざる可からず、世道人心を裨益せざる可からずなど、然までやかましく申さずとて、自然と此の義に適ひ居り申候。乍併こはお伽噺の第一の主眼には無之、第一の主眼は前陳の通り子供を喜ばしめ、樂しましむるにありと存じ候。

前陳と全く別の次第に有之候得共、お伽噺の序なれば申上げ度は、お伽噺の科學的研究、及び斯道の學者の輩出せんことを希望する義に御座候。御承知の通り獨逸にてはボブ等、英吉利にてはマクスミューラー等が力學研究の結果、お伽噺の系統に因り、印度、希臘、獨逸、スカンデナヴィヤ等の國民は、全く同一種族より發し、印度歐羅巴人種、即ちアリア人種の同一血脉なる事を斷定するに屈強の材料と相成候。然れば日本朝鮮等のお伽噺を科學的に研究致し候得ば、日韓の古史上に、前人未知の資料を發見すること、存じ候間、小生は我國の學者が此の新地面を開拓せんことを希望に堪へず候。

下田次郎（女子高等師範學校教授）。お伽噺は時と所とを定めず、作り出された想像の世界で、何時何所の子供にも適當し、子供に善惡の判斷と制裁と満足とを與へ、美醜の見分けをして、之を喜び又は厭ふの情を起し、實際世界に於ける生活の準備を爲し、他の手段では、入り難く分り難いことをも、容易に且つ愉快に納得させます。且つ動物に對する愛憐の心を起さしめ、



天然に對する興味を養ひ、無生物にも生命を與へて、物の意義を裕ならしめます。文學は人間、動物、草木、天體、土石すべての物を有生視し、人格化するもので、それをせねば、文學は乾燥なものとなり、其成立を危くします。

お伽噺が、子供の想像を活潑豊富ならしめ、物を有生視し人格化するのには文學と同じで毫も差支なく、色々利益があると思ひます。且つお伽噺には、高尚な理想が含まれて居まして、子供に向上心と努力とを與へます。想像力は人間の寶で、想像で以て現實を補ひ、美化し、生命を與へればこそ、人生も一段と味があるものと思ひます、子供の生活にもお伽噺があるので一層味があり、幸福なではありませんまいか。

東荃吉(女子高等師範學校教授)。お伽噺の教育上の價値の甚だ多い中でも、殊に子供の想像力を涵養するといふ事が、最も大なるものだと思ふ。元來想像作用は、記憶と同じやうに、過去の經驗が材料となるのであるから、經驗の少いものは、従つて想像力が鈍い。而して同情といふ念は、道德上甚だ大切な心の作用であつて、畢竟道德的の行爲も、不道德的の行爲も、この同情心の豊富なものと缺乏せるとから起るのである。ところでこの同情といふ事は、自分の身を他人の位置に置いて、其境遇を想像するといふことであつて、つまり想像力が道德的方面に向つたのである。そこで子供は、勿論世の中の閱歷が少いから經驗も少い。従つて想像力が十分發

達して居ないから、やがて又同情の念も充分でない。大人から見ても、随分残酷と思はれることを、平氣で子供がやつて居るのは全く其爲である。

お伽噺は、子供の遭遇しやうな形式で以て、子供に經驗の材料を與へて、其社會上の閱歷の少い、狭隘な經驗界を補つてやる。子供はお伽噺に顯はれる種々な出來事を聞くことによつて、自分では未だ經驗しないが、然も經驗したと殆ど同様の結果を得て、其經驗界を擴張し、従つて想像力も發達されれば、同情心も涵養されることになる。

私は、お伽噺の教育的といふ意味を、たゞ表面に顯れた修身的の事實の如何に由らないで、寧ろ今述べたやうに、廣く解釋したいと思ふ。かう考へると、教育的といふ範圍は、非常に廣くなつて、一見して何等教育的——修身的の意味もないと思はれる滑稽なお伽噺も、馬鹿氣たやうな由來譚も、皆相當に教育的なのである。つまりお伽噺によつて、何等か惡事の種を子供の心に播きさへしなければ、それで教育的と考へてよい。教育的といふ意味を、いつも學校の修身の例話の様にのみ解釋するのは、當を得たものとは言はれない。お伽噺は、空想を鼓舞するから、不可だといふ教育學者もあるが、これも學者の取越し空論で、事實を根據とした議論ではない。お伽噺を多く聞かされて、其爲に現實と想像とを混同する程、空想的に育ち上つた人間の事實統計は、一向見えないではないか。